



Title	北海道大学文学研究院紀要, 第172号, 全1冊
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 172
Issue Date	2024-03-22
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/91372">http://hdl.handle.net/2115/91372</a>
Type	bulletin
File Information	00_172_all.pdf



[Instructions for use](#)

北海道大学

# 文学研究院紀要

第172号

北海道大学文学研究院

2024

北海道大学

文学研究院紀要

第172号

北海道大学文学研究院

2024

# 目次

ドイツ語から見たゲルマン語(13)

——文の構造(付…正誤表2)——……………清水 誠……………

プロクロス『プラトン』『国家』注解』第一論文 日本語訳・注

……………近藤 智彦・川島 彬・高橋 勇真・野村 拓矢……………

ドイツ高教会運動とハイラー宗教学の形成……………宮嶋 俊一……………

『伊勢物語』摘注……………後藤 康文……………



# ドイツ語から見たゲルマン語 (13)

— 文の構造 (付：正誤表 2) —

清水 誠

German as a Germanic Language (13)

—Sentence Structure—

(*Bulletin of the Faculty of Humanities and Human Sciences* No. 172.

Faculty of Humanities and Human Sciences, Hokkaido University.

Sapporo/Japan. 2024. ISSN 2434-9771)

SHIMIZU, Makoto

(mshimizu@let.hokudai.ac.jp)

## 1. 現代ゲルマン諸語の文の語順—文の領域モデル<sup>1</sup>

本稿では、ゲルマン諸語の文の構造をめぐって、定動詞第 2 位、枠構造、

---

<sup>1</sup> 本研究は清水 (2019) (2020) (2021a) (2021b) (2021c) (2021d) (2022a) (2022b) (2022c) (2023a) (2023b) の続編であり、科研費の助成による (ゲルマン語類型論から見たドイツ語の新しい構造記述, 基盤研究 (C) (一般), 19K00540)。カッコ内の用語は原則として英語名による。用例などで使用する言語名の略語は次のとおり。ア: アイスランド語, ʔ: アフリカーンス語, 英: 英語, オ: オランダ語, 低: 低地ドイツ語オストファーレン方言, 古高ド: 古高ドイツ語, 古ノ: 古ノルド語, ス: スウェーデン語, セ: 北フリジア語セルリング方言, 紮: スイスドイツ語チューリヒ方言, 中英: 中英語, 中高ド: 中高ドイツ語, デ: デンマーク語, ド: ドイツ語, 西フ: 西フリジア語, 西フ: (ベルギー) オランダ語西フランドル方言, ニ: ノルウェー語ニューノシュク, プ: ノルウェー語ブークモール, フ: フェーロー語, フ: フランス語, ベ: スイスドイツ語ベルン方言, ペ:

補文標識と一致、動詞群の語順、定形性非対称を取り上げて、順次、論じていく。

### 1-1. ドイツ語の「定動詞第2位」と枠構造

長らくバッハの作品 (BWV508) と考えられ、1999年の原典譜発見でバッハと同時代のシュテルツェル (Gottfried Heinrich Stölzel 1690~1749) の作曲と2017年に認定されたアリア『あなたがそばにいてくださるなら』(ド *Bist du bei mir*) は、結婚式の席で披露されることも多い歌曲として知られている。

- (1) ド ① *Bist du bei mir*, ② *geh (= gehe) ich mit Freuden / zum Sterben und zu meiner Ruh (= Ruhe)*. / ③ *Ach, wie vergnügt wär (= wäre) so mein Ende*, / ④ *es drückten deine schönen Hände / mir die getreuen Augen zu!* ①あなたが(私の)そばにいてくださるなら / ②喜んで死と安らぎに向かしましょう / ③ああ、(そうならばso) 私の最期はどれほど幸せなことか / ④あなたの麗しい手が / 一途な私の眼<sup>まなこ</sup>を閉じてくださるなら

まず、前半の文だが、条件節① *Bist du bei mir* 「あなたがそばにいてくださるなら」と帰結節② *geh ich mit Freuden zum Sterben und zu meiner Ruh* 「私は喜んで死と安らぎに向かしましょう」は、ともに「V(定動詞)+S(主語)」の語順を取っている。①の語順は決定疑問文(ド *Bist du bei mir*? あなたはそばにいますか?)や命令文(ド *Sei [du]* (または *Seien Sie*) *bei mir!* そばにいなさい)と同じである。つまり、ドイツ語では定動詞第1位(verb first)の語順は主節・従属節ともに現れ、決定疑問文、命令文など、話者の気持ちや判断に応じた文の種類、つまり文ムード(sentential mood)とは、本来、無関係であると言える。

---

ペンシルヴェニアドイツ語, ヴル: 低地 (>中部) ドイツ語ベルリン方言, モ: 北フリジア語モーリング方言, ル: ルクセンブルク語。

同じ条件節でも、帰結節③に後続する条件節④では、es **drückten deine schönen Hände** mir die getreuen Augen **zu** 「あなたの美しい手が一途な私の眼を閉じてくださるなら」のように、文頭に意味のない es が出ている。これは虚辞 (expletive) と呼ばれ、英 **There** is a book on the desk. の英 there と同類である。ただし、ドイツ語の es は、ド **Es** irrt **der Mensch**, solange er strebt. 「人間は努力する限り迷うものだ」(Goethe: *Faust* 317 行) のように、英語の there と違って存在・出現表現に限らず、オランダ語の er とも違って、新情報を担う不定主語以外でも現れる (オ |**De mens** dwaalt/\* **Er** dwaalt **de mens**| zolang hij streeft. 同上)。英 Yesterday, **it** rained. / ド Gestern regnete **es**. の英 it/ ド es は天候動詞の非人称主語だが、④ **es** drückten deine schönen Hände... の主語は drückten と一致した deine schönen Hände である。また、ド Der Mensch irrt. 「人間は迷うものだ」のように、文中ではこの es は不要である。文頭をふさぐ es と天候動詞の es は別物である<sup>2</sup>。そこで、①と④は「Ø/es+V+S」にまとめ、①②④の語順は「|Ø/①/es|+V+S」に集約される。

今度は、これを③ Ach, wie vergnügt **wär** so **mein Ende** 「ああ、そうならば私の最期はどれほど幸せなことか」と結びつけてみよう。これは感嘆文だが、疑問文「~どれほど幸せでしょうか?」と同じ語順である。wie 「どれほど」を除けば、Vergnügt **wär** so **mein Ende**. 「そうならば私の最期は幸せでしょうに」という同じ語順の平叙文になり、やはり文ムードとは無関係である。さて、③から ach 「ああ」を除くと、so 「そうならば」をはさんで、「V (wäre であることか)+S (mein Ende 私の最期は)」の前に wie vergnügt 「どれほど幸せな」がある。これは虚辞 es と同じ文頭の位置を占める。したがって、①~④はすべて「|Ø/①/es/wie vergnügt|+V+S」のパターンに収まる

<sup>2</sup> ちなみに、アイスランド語の虚辞 það は動詞や構文の種類に関係なく、主節・従属節の先頭に現れ、それ以外の位置には現れない (ア Það rigndi í gær./Rigndi **Ø** í gær?/Ég veit að það rigndi í gær. 昨日 (í gær), 雨が降った (það rigndi)/昨日, 雨が降ったの? /私は (ég) 昨日, 雨が降ったことを (að) 知っている (veit), Thráinsson 1994: 170)。イディッシュ語の虚辞 az も同様である (Vikner 1995: 69f.)。



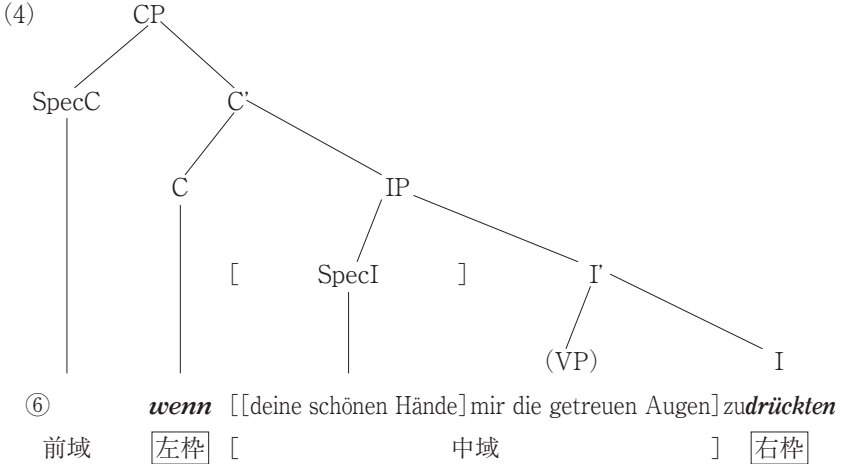


これで、右枠が定動詞⑤ bist 「いる」と⑥ zudrückten 「閉じる」(接続法 II 式)で埋まり、「中域+右枠」で「S (du/deine schönen Hände)~V (bist/zudrückten)」の語順に落ち着いた。ただし、SとVの間に副詞句 bei mir 「私のそばに」と目的語 mir die getreuen Augen 「私の一途な眼を」がはさまっている。そこで、「S (主語)+Adv (副詞句)+O (目的語)/C (補語)+V (定動詞)」となる。詳細は後述するが、この定動詞末尾 (verb final) が基本語順である。「副文 (= 従属節) では主文 (= 主節) の定動詞を文末に後置する」と説くドイツ語教科書が多いが、この立場では種々複雑な問題が生じてしまう。主節の2番目以下は「V+Adv+O」(概略)なので、定動詞と最も結びつきが強い目的語が離れるが、従属節では「Adv+O+V」となって隣接する。不変化詞動詞 (分離動詞) も同じである (ド 主節 drückten~zu ↔ 従属節 zudrückten)。言うまでもなく、VO型の英語とは逆に、ドイツ語はOV型なのである。

重要なのは、主節の定動詞 bist/zudrückten と従属接続詞 wenn (厳密にはこれとは別の補文標識, 4-1 参照) が左枠を占める点である。一見、異質な両者だが、赤信号と青信号が同時に点灯しないように、相補分布 (complementary distribution) で棲み分けており、これを「定形性非対称」(finiteness asymmetry)<sup>3</sup> と言う。左枠に従属接続詞がないときに限って、右枠が本拠地の定動詞は「家族」を残して、左枠に「単身赴任」するのである。たとえば、④ es **drückten** deine schönen Hände / mir die getreuen Augen **zu** の zu は、不変化詞動詞 (分離動詞) **zudrückten** (←zu | drücken 閉じる) の不変化詞 (分離成分) だが、文末の右枠に残り、動詞 drückten だけが2番目の左枠に移っている。これに前域を加えると、「定動詞第2位」(verb second) になる。以上が枠構造 (ド Klammerstruktur/Rahmenstruktur) と呼ばれるドイツ語の語順のエッセンスである。

これを生成文法の分析に当てはめてみよう。動詞句 (VP) の内部は省略する。表面的な文のスケッチにとどめ、後述する移動の中身も省くことにする。

<sup>3</sup> 「定性」(限定性 definiteness) と区別して、「定形性」(finiteness) とする。



「中域 + 右枠」は屈折句 (IP, inflection phrase)<sup>4</sup> にあたる。これは時制・ムード (法)・一致という屈折要素 (I) を主要部とするまとまりであり、これによって主述関係 (predication) が決まる。中域の主語は IP の指定部 (Spec) が基本だが、「Adv (so) + S (mein Ende)」「←S (mein Ende) + Adv (so)」のような「かきませ」も起こる。「前域 + 左枠」が加わると、補文標識句 (CP, complementizer phrase) になり、話者の気持ちや判断を反映する文の種類 (文モード) が決まる。従属接続詞 (*wenn* の位置は 4-1 で再検討) は補文標識 (C)、前域はその指定部 (Spec) を占める。右枠は動詞群の位置であり、そこから定動詞が左枠に移るのは、屈折句 (IP) の主要部 (I) から補文標識句 (CP) の主要部 (C) への移動に相当する。日本語では、「[何 [か]] がある」に対して「[[何] があるの] [か]」のように、「か」が文末の右端に動くと、「何」の内容を問う選択疑問の意味が生じる。ドイツ語では、ド *Dort kannst du was erleben*. 「あそこでは君は何かを (was) 体験できる」に対して、ド *Was kannst du dort erleben?* 「君はあそこで何を (was) 体験できるか」のように、*was* を文頭の左端に移動することで、同じ効果が得られる。文モードの鍵を

<sup>4</sup> 時制句 (TP, tense phrase) の代わりに用いる。

握るこの部分を左周辺部 (left periphery) と言う。文ムードを決める発話力 (illocutionary force) の種類は多彩だが、詳細は割愛する。

## 1-2. 前前域, 後域, 「枠越え」

「定動詞第2位」に基づく枠構造は、大多数の現代ゲルマン諸語に共通している。ドイツ語原典を頼りに、オランダ語訳を読み解いてみよう。左枠の棲み分けに従って、「従属接続詞 als (ド wenn)~定動詞」となる (① オ als~ bent (ド bist), ④ オ als~zouden<sub>1</sub> sluiten<sub>2</sub> (ド schließen<sub>2</sub> würden<sub>1</sub> / 英 should<sub>1</sub> shut<sub>2</sub>))。

(5) オ	前域	<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">左枠</span>	[	中域	]	<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">右枠</span>
①		<b>Als</b>		[jij bij mij]		<b>bent</b>
②	(Als jij bij mij bent,)					
	dan	<b><u>ga</u></b>		[ik met vreugde naar de dood en naar mijn rust]		_____
③	(Ach,) hoe aangenaam	<b><u>zou</u></b>		[mijn einde]		_____ <b>zijn</b>
④		<b>als</b>		[jouw mooie lieve handen]		
				mijn trouwe ogen]		<b>zouden sluiten!</b>
						( <a href="https://nl.wikipedia.org/wiki/Bist_du_bei_mir">https://nl.wikipedia.org/wiki/Bist_du_bei_mir</a> , 2023.6.9 閲覧)

②の条件節に注目されたい。オ als jij bij mij bent 「あなたが (jij) 私のそばに (bij mij) いてくださる (bent) なら (als)」を dan 「そうならば」で受けている。前域の dan の前に置かれた als-従属節の位置を前前域 (ド Vorvorfeld) と言う。「ド wenn-従属節 + dann + 定動詞」の wenn-従属節も同様である。

(6) 前々域	前域	<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">左枠</span>	[	中域	]	<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">右枠</span>
⑦	オ	[ <b>Als jij bij mij bent,</b> ]	<b>dan</b>	<b><u>ga</u></b>	[ik met vreugde naar de dood...]	_____.

- ⑧ ド [*Wenn du bei mir bist,*] *dann* geh [ich mit Freuden zum Sterben...] \_\_\_\_\_.

前域の前には譲歩節も位置する：ド [*Auch wenn du nicht bei mir bist,*], *ich* *geh* mit Freuden zum Sterben und zu meiner Ruh. 「たとえあなたがそばにいてくださらなくても (auch wenn), 私は喜んで死と安らぎに向かいますしょう」。

右枠の後ろには、後域 (ド Nachfeld) もある。これは中域の肥大化を避けて、スリムにするべく取り出した句や節の行き先である。右枠を越えるので、「枠越え」(枠外配置, ド Ausklammerung) と言い、オランダ語ではドイツ語よりも頻繁に起こる。動詞と結びつきが強い名詞句主語や目的語は対象外である。逆に、主語や目的語としてはたらく従属節は、原則としてかならず「枠越え」するか、前域に移動させる。中域に残ると、主節の解釈が終わる前に従属節の解釈が始まる中央埋め込み (center embedding) になるので、好まれない。

- (7) 前域 左枠 [ \_\_\_\_\_ 中域 \_\_\_\_\_ ] 右枠 後域

ド \*Ich kann [mir *dass du bei mir bist* nicht] vorstellen.

Ich kann [mir \_\_\_\_\_ nicht] vorstellen [*dass du bei mir bist*].

私は [あなたがそばにいてくださることを] 想像できません

### 1-3. 英語の文構造—「定動詞第2位」と枠構造の不在

これに対して、英訳はまったく別の様相を呈している。

- (8) 英 ① If *you are* with me, / ② then *I will go* gladly /unto [my] death and to my rest. / ③ Ah, how pleasing *were my end*, / ④ if *your dear hands* then / *shut* my faithful eyes !

([https://en.wikipedia.org/wiki/Bist\\_du\\_bei\\_mir](https://en.wikipedia.org/wiki/Bist_du_bei_mir), 2023.6.9 閲覧)

①②④は主節, 従属節ともに「S+V」の語順であり, 「定動詞第2位」とは無縁である。それでも, 感嘆文の③は「(how pleasing+) V (*were*) + S (*my end*)」となっている。how を除いて平叙文にすれば, *My end were* pleasing. となる。強引に(5)のモデルに押し込めば, [How pleasing (前域)] [were (左枠)] [my end \_\_\_\_\_ (中域)]. は「前域+左枠」を含むが, how を除いた移動前の *My end were pleasing.* は中域だけに収まる。

おおまかに言うと, 英語の平叙文は中域という「箱」だけで成立し, 疑問文やそれと同じ語順の感嘆文になって, 前域と左枠の「箱」が開く。これに対して, ドイツ語やオランダ語の文では, つねに右枠を含むすべての「箱」が全開している。ドイツ語やオランダ語は「一連の開かれた箱を満たす」パターン, 英語は「必要に応じて箱を開いて満たす」パターンと言えるだろう。

より射程の広い(4)の生成文法の分析に当てはめると, 3言語の例は統一的に把握できる。まず, OV型のドイツ語とオランダ語に対して, 英語はVO型なので, 動詞句(VP)と屈折句(IP)の内部の語順が変わる。次に, ドイツ語とオランダ語の①~④は補文標識句(CP)だが, 英語の②平叙文は屈折句(IP)の段階にとどまり, ③感嘆文で補文標識句(CP)に達する。助動詞は補文標識の位置(C/左枠)に移動するが(英 [Why [can]<sub>C</sub> [you \_\_ [not come]<sub>VP</sub>]<sub>IP</sub>CP?]), 本動詞は屈折句(IP)内の屈折辞(I)の位置には移らず, 否定文ではdoでふさぐ(英 [You [did]<sub>I</sub> [not \_\_ come]<sub>VP</sub>]<sub>IP</sub>). doは補文標識句(CP)でも補文標識の位置(C)に移動し, 「S+V」の語順が確保される(英 [Why [did]<sub>C</sub> [you \_\_ [not \_\_ come]<sub>VP</sub>]<sub>IP</sub>CP?) (他の移動の痕跡は省略)。

英語のパターンは次のフランス語訳と似ている(ただし, ③も「S+V」の語順を示す)。

- (9) 7a ① Si *tu restes* avec moi, / ② alors *j'irai* en joie / Vers ma mort et mon doux repos. / ③ Ah! comme *elle serait* heureuse, ma fin, / ④ *Tes jolies mains fermant* mes yeux fidèles! ①あなたが (tu) 私のそばに (avec moi) いてくださる (restes) なら (si) / ②そうならば (alors) 喜んで (en joie) 死と安らぎに (vers ma mort et mon doux

repos) 私は向かいましょう (j'irai) / ③ ああ (ah), 私の最期は (elle~  
ma fin, ド sie~mein Ende / 英 it~my end) どれほど幸せな  
(comme~heureuse) ことか (serait) / ④ あなたの麗しい手が (tes  
jolies mains) / 一途な私の眼を (mes yeux fidèles) 閉じてくださる  
なら (fermant, ド zudrückend / 英 shutting)

([https://fr.wikipedia.org/wiki/Bist\\_du\\_bei\\_mir](https://fr.wikipedia.org/wiki/Bist_du_bei_mir), 2023.6.9 閲覧)

シェイクスピアが活躍した 1600 年頃の初期近代英語までは、英語も「定動詞第 2 位」に準じた語順が主流だった (Radford et al. 2009<sup>2</sup>: 314-325)。その後、助動詞 do の発達 (橋本 2005: 169) に見られるように、英語は大多数のゲルマン諸語に共通のパターンから逸脱していった。類例はイタリア北東部の上部ドイツ語ツインバーン方言 (チンプロ方言) で、「定動詞第 2 位」の (表面的な) 不在が観察される。同方言はイタリア語から多大な影響を被った (Cognola 2013, Putnam (ed.) 2011: 231-367, Bidese 2008)。スラヴ語との関係が問われるイディッシュ語も枠構造を欠いている。

#### 1-4. 前域と中域—情報伝達のしくみと「見えない疑問詞」

上述のように、左枠と右枠は定動詞と従属接続詞 (厳密には補文標識) という機能語 (主要部) の指定席である。定動詞は時制・ムード (法)・一致という機能的素性を音形として実現する語であり、従属接続詞は 4-1 で述べるように、従属節を導く機能的要素の補文標識を内蔵している。一方、前域はそうした機能とは無縁の複数の語からなる 1 つの句 (構成素 constituent) が占める位置であり<sup>5</sup>、中域には残りの句が並んでいる。互いに性格が違うのである。

統語的な機能的領域である左右の枠に対して、前域と中域には情報伝達を司る語用論的な役目がある。ここで、ドイツ語の文を「家」にたとえてみよ

---

<sup>5</sup> ド gestern auf der Schule 「昨日、学校で」などの複合副詞句やド heute am 15. August 「今日、8月15日に」などの同格による拡大表現は、1つの句とみなされる。

う。左枠と右枠は土台を支える2本の「大黒柱」、前域は「玄関」、中域は「家族」が集う広い「居間」にあたる（前々域と後域は省略）。

(10) 前域	<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">左枠</span>	[	中域	]	<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">右枠</span>
ド (話題/強調・対比)		(	主語 + 副詞句 + 目的語/補語)		
⑨ (Sie behauptet,)	<u>dass</u>	[Hans jeden Tag Deutsch]			<i><b>gelernt hat.</b></i>
⑩ <u>Hans</u>	<u>hat</u>	[_____ jeden Tag Deutsch]			<i><b>gelernt ____.</b></i>
⑪ <u>Deutsch</u>	<u>hat</u>	[Hans jeden Tag _____]			<i><b>gelernt ____.</b></i>
⑫ <u>Jeden Tag</u>	<u>hat</u>	[Hans _____ Deutsch]			<i><b>gelernt ____.</b></i>
⑬ <u>Gelernt</u>	<u>hat</u>	[Hans jeden Tag Deutsch]			<i>_____.</i>

ハンス (男名) は毎日、ドイツ語を学んだと (彼女は主張している)

出発点は⑨の従属節である。⑩～⑬の主節では、完了の助動詞 *hat* が右枠から空席となった左枠に移動して、「定動詞第2位」となる。下線 (\_\_\_\_) はその痕跡である。点線 (\_\_\_\_\_) は中域 (⑬は右枠) から前域に出した要素の痕跡であり、その選択は先行する内容で決まる。基本的に、⑩は「ハンスはどうしたの?」という問いへの回答である。⑪は「ドイツ語は?」、⑫は「毎日って?」と聞かれたときの受け答えである。このように、前域は既知の旧情報 (old information)、つまり話題 (topic) の位置で、未知の新情報 (new information) は中域でコメントを施す。「宅急便」 (= 先行内容) が届いたら、「受取人」 (= 話題) が「居間」 (= 中域) から「玄関」 (= 前域) に出て応対すると考えればよい。

先行文との関係とは別に、前域に強い強勢を置いて強調や他者との対比を表すこともある。⑬ *Gelernt hat Hans jeden Tag Deutsch nicht.* 「ハンスは毎日、ドイツ語を学んだわけではない」では、右枠から移動した過去分詞 *gelernt* 「学んだ」が否定の焦点である。いわば「来客」 (= 強調・対比) に対して、「家族」 (= 前域/強勢) を紹介するのに似ている。

文の領域モデルは生成文法の分析と違って、普遍性を志向するものではない。しかし、統語論的な「定動詞第2位」と語用論的な情報伝達を基盤とし



た大多数の現代ゲルマン諸語の文のしくみを理解するには、有効な方策である。次に、疑問詞疑問文と二者択一の決定疑問文を比較してみよう。

- (11) ド 前域 左枠 [                      中域                      ] 右枠
- ⑭ Was                      hat                      [Hans jeden Tag .....]                      gelernt \_\_\_\_ ?
- ⑮ Ø (=Q)                      Hat                      [Hans jeden Tag Deutsch]                      gelernt \_\_\_\_ ?

ハンスは毎日、何/ドイツ語を学んだのですか

⑭の疑問詞疑問文では、前域に疑問詞 was「何を」があるが、⑮の決定疑問文では、空白 (Ø) のように見える。*Bist du* bei mir (= (1)①) には、本来、条件節「あなたがそばにいてくださるなら」と決定疑問文「あなたはそばにいますか?」の解釈が可能であり、ともに「V+S」の語順になっている。どこが違うのだろうか。その手がかりは、次のアイスランド語と古ノルド語の例にある。

- (12) ア *Hvort* eigum við að fara út í það í kvöld eða á morgun? 私たちは (við) 今晚 (í kvöld) または (eða) 明日 (á morgun) のどちらに (hvort) それに乗って出かけようか (eigum~að fara út í það)  
(Einarsson 1949<sup>2</sup>: 194)
- (13) ア Spyrðu *hvort* hann sé heima. 彼が<sup>s</sup> (hann) 自宅に (heima) いる (sé) か (hvort) 聞いてください (spyrðu)  
(Árnason (útg.) 2003<sup>2</sup>: 684)
- (14) 古ノ *Hvárt* er Qnundr sjóni hér í þingbrekkunni? 眼玉のオヌンドル (男名) は (Qnundr sjóni) この民会の丘に (hér í þingbrekkunni) いる (er) か (hvárt) (*Egils saga Skalla-Grimssonar*, Chap. 81)
- (15) 古ノ “Brátt mun þat,” segir Egill, “ljóst verða, *hvárt* þú mælir þetta af alvoru eða hégóma, 「すぐに (brátt) それは (þat) はっきりする (ljóst verða) だろう (mun)」とエギルは (Egill) 言った (segir 歴史的現在)。「おまえが (þú) このことを (þetta) まじめに (af

alvoru) か (eða) 嘘をついて ([af] hégóma) 言っている (mæliŕ)  
かどうかが (hvárt)」 (ib.)

両言語は VO 型だが、3-1 で述べるように、「定動詞第 2 位」の原則は北ゲルマン語にも共通している。ア hvort/古ノ hvárt 「2つのどちら；～かどうか」は疑問代名詞双数形にさかのぼるア hvor/古ノ hvárr の単数中性形で、英 whether にあたる。しかし、英 whether 「～かどうか」は間接疑問文に限られ、直接疑問文には使わない。それでも、英語の直接疑問文の前域にも、疑問文という文ムードを特徴づける発話力に牽引された二者択一を問う「見えない疑問詞」(Q) があると考えられる。ア hvort/古ノ hvárt はそれが音声的に実現した例なのである(清水 2013: 51a)。ドイツ語の⑭⑮もこれとの類推で捉えられる。一方、1-1 で紹介した条件節④では、ド *es drückten deine schönen Hände / mir die getreuen Augen zu* 「あなたの美しい手が / 一途な私の眼を閉じてくださるなら」のように、空席の前域をふさぐ虚辞 *es* が出ている。これは、疑問文という文ムードを伴う節ではないことを物語っている。

## 2. 中域の語順

### 2-1. 「かきまぜ」と「ヴァカーナーゲル位置」

次に、中域の語順を検討しよう。前述の「S + Adv + O/C」は素朴な概略で、実際には次の要因によって語順にヴァリエーションが生じる。次例は典型的な二重他動詞 (ditransitive / bitransitive (verb)) の場合である。

- (16) (a) 主格主語 (動作主) > 与格目的語 (受益者) > 対格目的語 (被動者),  
(b) 旧情報 (テーマ Thema) > 新情報 (レーマ Rhema), (c) 定 > 不定, (d) 代名詞 > 非代名詞, (e) 有生 > 無生, (f) 無強勢 > 強勢, (g) 短 > 長

与格目的語と対格目的語の語順を中域内の「かきまぜ」(scrambling) の観

点から検討しよう。次例の新情報（レーマ）は疑問詞で問われた名詞句である。「+」は (a) ((e) を含む) ~ (c) に合致する場合、「-」はしない場合である。

(17) ド Was hat Kim dem Jungen geschenkt? 何をキムは男の子に贈ったの

① Kim hat dem Jungen ein Bilderbuch geschenkt.

((a) + (b) + (c) +)

② ?? Kim hat ein Bilderbuch dem Jungen geschenkt.

((a) - (b) - (c) -)

キムは男の子に絵本を贈った ((18)①②も同様)

(18) ド Wem hat Kim ein Bilderbuch geschenkt? だれにキムは絵本を贈ったの

① Kim hat dem Jungen ein Bilderbuch geschenkt.

((a) + (b) - (c) +)

② ? Kim hat ein Bilderbuch dem Jungen geschenkt.

((a) - (b) + (c) -)

(17)①は (a)~(c) に合致しており、最も自然である。(18)①の dem Jungen + ein Bilderbuch の語順は、(b) に反して「新情報（レーマ）+旧情報（テーマ）」だが、(a) と (c) は満たしているので、まだそれほど悪くない (dem は指示代名詞ではなく、定冠詞の場合である)。しかし、(18)②の ein Bilderbuch + dem Jungen の語順は、(a) に反して「対格目的語 + 与格目的語」であり、(c) にも反して「不定+定」なので、少し不自然である。(17)②の ein Bilderbuch + dem Jungen の語順は、さらに (b) にも反して「新情報（レーマ）+旧情報（テーマ）」なので、かなり不自然になる。それでも意味は通じないことはなく、ein Bilderbuch に強調・対比の強勢を置けば自然になる。このほかに、心理動詞や非対格動詞、述語形容詞の種類によっても、認容度は変わってくる。

(d) 「代名詞>非代名詞」の基準についてだが、これは無強勢の弱代名詞 (weak pronoun) が中域の主語の前に置かれる傾向にも反映している。

- (19) ド Warum hat [[es ihr] niemand \_\_\_\_\_] gesagt? なぜそれを (es) 彼女に (ihr) だれも (niemand) 言わなかったのですか
- (20) ド Weißt du, warum [[es ihr] niemand \_\_\_\_\_] gesagt hat? なぜそれを (es) 彼女に (ihr) だれも (niemand) 言わなかったのか、君は知っていますか
- (21) ド Am Herd haben [[sich] die Schüler \_\_\_\_\_ die Finger] verbrannt. かまどで生徒たちが指をやけどした (sich die Finger vrebrennen 指をやけどする)
- (22) ド Ich weiß nicht, ob [[sich] die Schüler \_\_\_\_\_ am Herd die Finger] verbrannt haben. かまどで生徒たちが指をやけどしたかどうか、私は知らない

問題の弱代名詞は、波線 (\_\_\_\_\_) をつけた位置から中域の左端に出て、左枠に寄り添っている。これも「かきませ」の一種である。「定動詞/従属接続詞+代名詞」は続けて発音し、[hat es sich] / [warum es sich] niemand, [haben sich] / [ob sich] die Schüler と区切る。この配列は義務的ではないが、より自然である。「よちよち歩きの赤ん坊」が左枠という「大黒柱」にかかると考えればいだろう。中域の左端に置かれた弱代名詞の位置を「ヴァカーナーゲル位置」(ド Wackernagel-position) と言う。これは、「自立的強勢を欠く要素は、文の2番目の位置に置かれる」という古い印欧語の語順の傾向を一般化したヴァカーナーゲルの法則 (Wackernagel's law) にちなむ名称である。ちなみに、ヴァカーナーゲル (Jacob Wackernagel 1853~1938) はスイスの印欧語学者である。「定動詞+人称代名詞主格」での異分析もこれと関係がある (ド du kommst (V-st<古高ド V-s+dü), ル dir kommt (dir < V-t+ir) など)。

2-2. ドイツ語とオランダ語の代名詞の語順—話題卓越性から主語卓越性へ

「定動詞第2位」とOV型の枠構造がドイツ語と共通のオランダ語では、「ヴァーカーナーゲル位置」はあっても、あまり目立たない。たとえば、「代名詞't (←het, 英 it) + 再帰代名詞 zich」(ド's (←es) sich) が「ヴァーカーナーゲル位置」に置かれた(24)は、ごちちなく不自然に響く (Rijpma/Schuringa 1978<sup>25</sup>: 238)。なお、オランダ語ではドイツ語よりも格変化が衰退している。

- (23) オ Later kon [*mijn vader 't zich* meestal niet meer] herinneren. 後で (later) 私の父は (mijn vader) たいてい (meestal) それを ('t←het) もう (meer) 思い出す (zich 再帰代名詞~herinneren) ことができなかった (kon~niet)
- (24) オ <sup>(2)</sup> Later kon [*'t zich*] *mijn vader* meestal niet meer] herinneren. 同上

動詞の種類などにもよるが、オランダ語では、代名詞も中域で「主語+代名詞目的語」の語順を保つのが自然である。逆に、ドイツ語で自然なのは、「ヴァーカーナーゲル位置」に置かれた代名詞が主語に先行する「代名詞目的語+主語」の語順である。

- (25) オ Voor de tweede keer bedroog [*zijn vriend hem*]. 2度目に (voor de tweede keer) 彼の友人は (zijn vriend) 彼を (hem) 裏切った (bedroog) (Van Dam 1972: 101)
- (26) ド Zum zweiten Mal betrug [*ihn sein Freund*]. 同上 (ib. 101)
- (27) オ Toen was [*de stad hem* al uit boeken] bekend. 当時 (toen) その町は (de stad) 彼には (hem) すでに (al) 本から (uit boeken) なじみがあった (知られていた was~bekend) (ib. 101 変更)
- (28) ド Damals war [*ihm die Stadt* bereits aus Büchern] bekannt. 同上 (ib. 101 変更)
- (29) オ Tegelijk hield [*het besef dat dwars door het, ooit door miljoenen*

*aanbeden, omhulsel het skelet schemerde*], [*haar*] in een voortdurend staat van opwinding]. 同時に (tegelijk) [かつて (ooit) 何百万もの人々に (door miljoenen) 崇拝された (aanbeden) 体という覆いを (omhulsel) じかに (dwars) 通して (door) 骨格が (het skelet) ほのかに見えた (schemerde) という意識が (het besef) ] [彼女を (haar)] 覚めやらない (voortdurend) 興奮の (van opwinding) 状態に (in een staat) とどめていた (hield) (haar は代名詞基本形, 弱代名詞は ze [zə]) (Shannon 2000: 171)

- (30) ド *Zugleich hielt [sie] [*das Bewusstsein, dass durch die einst von Millionen Menschen angebetete Hülle das Skelett schimmerte*], in einem Zustand ständiger Aufregung. 同上  
(ib. 171 変更)*

中期オランダ語では、中域の語順は今よりも自由だった。ドイツ語も中高ドイツ語では、中域の語順の自由度はやや高かったようである (Shannon 2000: 174-177)。中域の語順の固定化がオランダ語でとくに強まった理由には、現代英語と似た格語尾の衰退が挙げられる。両言語ともに中域の語順の決定には、語用論的要因から統語論的要因へのシフトが認められ、その度合いは形態の簡素化が進んだオランダ語のほうが強いようである。これは話題卓越性 (topic prominence) から主語卓越性 (subject prominence) への移行とも関連している (Shannon 2000: 192-194)。虚辞のド es/オ er の相違も、その反映かもしれない。次例のオ er は、中域内の位置が決まった主語が空白となったのを補填しているように見える。中域の主語の位置が相対的に不確定なドイツ語では、es にこの用法は認められない。

- (31) オ Vanavond komen *er vijf gasten*. 今晚 (vanavond) お客さんが 5 人 (vijf gasten) 来ます (komen er)  
(32) オ *Hoeveel gasten* komen *er* vanavond? 今晚, 何人お客さんが (hoeveel gasten) 来ますか

- (33) オ *Hoeveel gasten* denk je dat *er* vanavond komen? 何人お客さんが  
今晚、来ると (dat) 君は (je) 思いますか (denk)

### 2-3. 「埋め込み節の話題化」と話法詞・心態詞

(1)③ド Ach, wie vergnügt wär *so mein Ende* 「ああ、そうならば私の最期はどれほど幸せなことか」を思い出していただきたい。中域の主語 *mein Ende* 「私の最期は」の前に *so* 「そうならば」が置かれている。これは「ヴァカーナーゲル位置」とは異なる。前域以外に中域の先頭にも話題が置かれるのである。同様の語順は、前域以外に発言・思考動詞が導く従属節でも見られ、これを「埋め込み節の話題化」(embedded topicalization)と呼んでいる(6-2 参照)。(34)の主節に対して、ド *sagen* 「言う」に埋め込まれた(35)ド *im Anfang* 「初めに」がそれで、従属節で中域の先頭に出ている。従属接続詞を欠いた(36)では、前域の位置を占めている。

- (34) ド *Im Anfang* war das Wort. 初めに言葉ありき  
(35) ド Der Beginn des Johannesevangeliums sagt, [dass *im Anfang* das Wort war]. ヨハネの福音書の冒頭は初めに言葉ありきと謳っている  
(Musan 2010: 36 変更)  
(36) ド Der Beginn des Johannesevangeliums sagt, [*Ø im Anfang* war das Wort]. 同上

ドイツ語では、従属接続詞 *dass* 「～ということ」があると、定動詞は文末の右枠にとどまり、主節の語順にはならない。ただし、6-2 で述べるように、西フリジア語の *dat*-主節など、この原則を破る現代ゲルマン語の例は存在する。

語順の自由度が高いドイツ語の中域では、左側の旧情報(テーマ)に右側の新情報(レーマ)が続く。その境界に位置するのが、話者の気持ちや判断を表す話法詞(ド Modalwort)である。話法詞は新情報(レーマ)の開始を示す役割を担うことがある。次例の話法詞は、ド *anscheinend* 「どうやら」

である。

- (37) ド Laut dem Johannesevangelium war [*im Anfang anscheinend* das Wort]. ヨハネの福音書によれば、初めにはどうやら言葉があったらしい (Musan 2010: 36)

中域の語順がドイツ語ほど自由ではないオランダ語でも、この点は同じである (Van der Wouden 2009<sup>3</sup>: 125)。次例は、日本語の終助詞「ね、さ、よ」にあたる心態詞 (ド Abtönungspartikel) の場合である (清水 2019b: 284-288)。オ *maar eens* 「(ちょっと)~よ」のように、重ねて使うこともかなり頻繁に見られるが、それに続く部分が短くなるにつれて、新情報が限定されていく。(38)は「私が (ik) しないといけない (moet) のは、[6時に (om zes uur) 娘を (mijn dochtertje) ピアノ教室に (van de pianoles) 迎えに行くこと (ophalen)]」、(39)は「6時にしないといけないのは、[娘をピアノ教室に迎えに行くこと]」、(40)は「6時に娘にしないといけないのは、[ピアノ教室に迎えに行くこと]」を表す。

- (38) オ Ik moet *maar eens* [om zes uur mijn dochtertje van de pianoles ophalen]. 私は6時に娘をピアノ教室に迎えに行かないといけないのよ
- (39) オ Ik moet [om zes uur] *maar eens* [mijn dochtertje van de pianoles ophalen].
- (40) オ Ik moet [om zes uur mijn dochtertje] *maar eens* [van de pianoles ophalen].

### 3 北ゲルマン語の語順

#### 3-1. 「定動詞第2位」とOV型/VO型枠構造

ゲルマン諸語の大多数が「定動詞第2位」の原則による枠構造を基本とす



る事実は、十分に認知されていないようである。『言語学大辞典第6巻術語編』（三省堂1996）の次の記述は、その一例と言える。

- (41) 「英語を含めた大部分のゲルマン語は、〈中略〉その基本語順はきわめて厳格な SVO 型の言語となっている」

（言語学大辞典第6巻術語編1996:990）

- (42) 「このような枠構造と従属文での SOV 語順は、ドイツ語、オランダ語ではまだ維持されているが、英語およびスカンジナビアの北欧語では、〈中略〉枠構造は解消され、動詞第2位置の原理が確立された」

(ib. 991)

(41)が誤りなのは明らかである。(42)「動詞第2位置の原理が確立された」も、「基本語順がきわめて厳格な SVO 型」が正しくないので、誤記である。さらなる誤解は、「スカンジナビアの北欧語では、〈中略〉枠構造は解消され、動詞第2位置の原理が確立された」、つまり、英語と同じ「SVO 型」であり、枠構造を欠くという点である。以下では、これを正した次の2点を検証してみよう。

- (43) ① 北ゲルマン語（いわゆる北欧語）の語順は、英語とは異なり、他の西ゲルマン諸語の大多数と同じく「定動詞第2位」を基本とする。  
② 大多数の西ゲルマン諸語に共通する「OV 型枠構造」に対して、北ゲルマン語は「VO 型枠構造」を有している。

一例として、新約聖書『マタイによる福音書』第5章第4節の『山上の垂訓』（ド *Bergpredigt*）に先立つ箇所を取り上げよう。この箇所は、4-2の補文標識をめぐる説明でも援用する。次例は、大陸北ゲルマン語からニューノシュク訳（*Bibelen* 1986<sup>3</sup>: 新約4）、離島北ゲルマン語からアイスランド語訳（*Biblian* 2007: 新約8）からの引用である：「イエスは<sup>2</sup> 群衆を<sup>4</sup> ご覧になった<sup>3</sup> ときに<sup>1</sup>、彼（＝イエス）は<sup>6</sup> 山に<sup>7</sup> 登られた<sup>5</sup>。そこに<sup>8</sup> 彼（＝イエス）は<sup>10</sup> おす

わりになり<sup>9</sup>,そして<sup>11</sup>(彼の)弟子たちが<sup>12</sup>みもとに<sup>14</sup>集まった/やって来た<sup>13</sup>」。

前域	左枠	[中域]	右枠	[後域]
(話題/強調・対比)	(主語)			(目的語/補語 + 副詞句)
(44) ニュ Dã <sup>1</sup>	Ø	[Jesus <sup>2</sup> ]	såg <sup>3</sup>	[folkehopen <sup>4</sup> ],
				<u>Dã<sup>1</sup> Jesus<sup>2</sup> såg<sup>3</sup> folkehopen<sup>4</sup></u> , <u>gjekk<sup>5</sup></u> [han <sup>6</sup> ] _____ [opp i fjellet <sup>7</sup> _____].
				Der <sup>8</sup> <u>sette<sup>9</sup></u> [han <sup>10</sup> ] _____ [seg <sup>9</sup> ],
(og <sup>11</sup> ) <u>læresveinane<sup>12</sup></u>	<u>samla<sup>13</sup></u>	[_____]	_____	[seg <sup>13</sup> om han <sup>14</sup> ].
(45) ア Þegar <sup>1</sup>	Ø	[Jesus <sup>2</sup> ]	sá <sup>3</sup>	[mannfjöldann <sup>4</sup> ]
				<u>Þegar<sup>1</sup> Jesus<sup>2</sup> sá<sup>3</sup> mannfjöldann<sup>4</sup></u> <u>gekk<sup>5</sup></u> [hann <sup>6</sup> ] _____ [upp á fjallið <sup>7</sup> _____].
				<u>Þar<sup>8</sup></u> <u>settist<sup>9</sup></u> [hann <sup>10</sup> ] _____ [_____]
(og <sup>11</sup> ) <u>lærisveinar hans<sup>12</sup></u>	<u>komu<sup>13</sup></u>	[_____]	_____	[til hans <sup>14</sup> ].

従属接続詞 (ニユ dã<sup>1</sup> / ア þegar<sup>1</sup> ~したときに) に導かれた従属節では、定動詞 (ニユ såg<sup>3</sup> / ア sá<sup>3</sup> 見た) は右枠にとどまる。それを欠く主節では、右枠の定動詞 (ニユ gjekk<sup>5</sup> / ア gekk<sup>5</sup> 登った, など) が左枠に移動し、話題となる要素が中域または後域から前域に移る。このように、両言語の語順は枠構造と「定動詞第2位」が基本であり、英語のSVO型とは異質である。西ゲルマン語との相違は、「目的語/補語 + 副詞句」が後域に規則的に「枠越え」している点にある。

次は「イエス (彼) は<sup>2</sup> 群衆/人々を<sup>4</sup> ご覧になった<sup>3</sup> ときに<sup>1</sup>, 彼 (イエス) は<sup>6</sup> 山に<sup>7</sup> 登られた<sup>5</sup>」(英 seeing (when he saw) the multitudes, he went up into a mountain) の比較例である (文頭は大文字, 文末はピリオドで統一)<sup>6</sup>。

<sup>6</sup> スウェーデン語 (*Bibeln* 1981/82: 新約 11), デンマーク語 (*Bibelen* 1998: 1044), ブークモール (*Bibelen* 1987<sup>4</sup>: 新約 4), フェーロー語 (*Biblia* 1983: 新約 4), ドイツ語 (*Die Bibel* 1984: 新約 6), 低地ドイツ語オストファーレン方言 (*De Plattdütsche Baibel* 1997: 652), ルクセンブルク語 (*D'Evangelium nom Matthäus* 2018: 26), スイスドイツ語チューリヒ方言 (*s Nöi Teschtamänt Züriütsch* 1997: 5), ペンシルヴェニアドイツ語 (*Es Nei Teschtament* 1993: 12), オランダ語 (*Groot Nieuws Bijbel* 1999: 新約 5), アフリカーン

I. 北ゲルマン語：定動詞第2位 VO型枠構造 ((44)ニユ/(45)ア参照)

- (46) ス När<sup>1</sup> han<sup>2</sup> såg<sup>3</sup> folkskarorna<sup>4</sup>, gick<sup>5</sup> han<sup>6</sup> upp på berget<sup>7</sup>.  
 (47) デ Da<sup>1</sup> Jesus<sup>2</sup> så<sup>3</sup> skarerne<sup>4</sup>, gik<sup>5</sup> han<sup>6</sup> op på bjerget<sup>7</sup>.  
 (48) ブ Da<sup>1</sup> Jesus<sup>2</sup> så<sup>3</sup> folkemengden<sup>4</sup>, gikk<sup>5</sup> han<sup>6</sup> opp i fjellet<sup>7</sup>.  
 (49) フエ Tá ið<sup>1</sup> hann<sup>2</sup> sá<sup>3</sup> mannamúgvurnar<sup>4</sup>, fór<sup>5</sup> hann<sup>6</sup> niðan á fjallið<sup>7</sup>.

II. 西ゲルマン語：定動詞第2位 OV型枠構造

- (50) ド Da<sup>1</sup> er<sup>2</sup> aber das Volk<sup>4</sup> sah<sup>3</sup>, ging<sup>5</sup> er<sup>6</sup> auf einen Berg<sup>7</sup>.  
 (51) オ As<sup>1</sup> Jesus<sup>2</sup> de vielen Minschen<sup>4</sup> sach<sup>3</sup>, ging<sup>5</sup> hei<sup>6</sup> up en Barg<sup>7</sup>.  
 (52) ル Wéi<sup>1</sup> de Jesus<sup>2</sup> déi vill Leit<sup>4</sup> gesinn huet<sup>3</sup>, ass<sup>5</sup> hien<sup>6</sup> de Bierg<sup>7</sup>  
eropgaang<sup>5</sup>.  
 (53) フ Won<sup>1</sup> er<sup>2</sup> aber die vile Lüüt<sup>4</sup> gsee hät<sup>3</sup>, isch<sup>5</sup> er<sup>6</sup> uf de Bèèrg<sup>7</sup> ue<sup>5</sup>.  
 (54) ペ Vo<sup>1</sup> Jesus<sup>2</sup> dee feel leit<sup>4</sup> ksenna hott<sup>3</sup> is<sup>5</sup> eah<sup>6</sup> nuff uf en hivvel<sup>7</sup>  
ganga<sup>5</sup>.  
 (55) オ Toen<sup>1</sup> Jezus<sup>2</sup> al die mensen<sup>4</sup> zag<sup>3</sup>, ging<sup>5</sup> hi<sup>6</sup> de berg op<sup>7</sup>.  
 (56) フ Toe<sup>1</sup> Jesus<sup>2</sup> die menigte mense<sup>4</sup> sien<sup>3</sup>, het<sup>5</sup> Hy<sup>6</sup> teen die berg<sup>7</sup>  
opgegaan<sup>5</sup>.  
 (57) 西7 Doe't<sup>1</sup> Er<sup>2</sup> de mannicte<sup>4</sup> seach<sup>3</sup>, gong<sup>5</sup> Er<sup>6</sup> de berch op<sup>7</sup>.  
 (58) モ As<sup>1</sup> hi<sup>2</sup> ââl da manschne<sup>4</sup> sâch<sup>3</sup>, gâng<sup>5</sup> hi<sup>6</sup> ap<sup>5</sup> önj e bärje<sup>7</sup>.  
 (59) セ Diâr<sup>1</sup> Jesus<sup>2</sup> di Kâr Lid<sup>4</sup> saag<sup>3</sup>, ging<sup>5</sup> hi<sup>6</sup> âp<sup>5</sup> üp en Bârig<sup>7</sup>.

これに対して、「北ゲルマン語の枠構造は主語しかはさんでいないのではないか」というクレームが出されるかもしれない。そこで、デンマークの言語学者ディーゼリクセン (Paul Diderichsen 1905~1964) が提唱した文図式 (デ sætningsskema) または領域図式 (デ feltskema) を移動の痕跡 (下線部) を加えて紹介しよう (Diderichsen 1976<sup>2</sup> (1946): 160-201, Diderichsen

---

ス語 (*Die Bybel* 2007<sup>16</sup>: 新約 9), 西フリジア語 (*Bibel* 1989<sup>2</sup>: 1377), 北フリジア語モーリング方言 (*Dåt Evangelium fon Mattäus aw mauringer-frasch* 1955: 11 正書法変更), 同セルリング方言 (Clemens 2008 (1870 完成): 23)。

1982<sup>5</sup> (1964): 67-71)。類例は新谷/Pedersen/大辺 (2014: 146f, 162f)。

デ 前域 左枠 [ 中域 ] 右枠 [ 後域 ]  
 (話題/強調・対比) [主語+弱代名詞+文副詞/否定詞] [目的語/補語+副詞句]

- (60) Hun siger [.....] \_\_\_\_\_  
 Ø at [Jens bestemt aldrig] har roget [tobak i sit liv].  
Jens har [..... bestemt aldrig] \_\_\_\_\_ roget [tobak i sit liv].  
 彼女 (hun) は言っている (siger)  
 イェンスは断じて (bestemt) 一度も (aldrig) 人生で (i sit liv) タバコを (tobak) 吸ったことが<sup>5</sup> (har roget 現在完了形) ない (ikke (英 not)) と (at 補文標識)  
 イェンスは断じて一度も人生でタバコを吸ったことがない
- (61) Hun gav [..... ikke] \_\_\_\_\_ [børnene slik i går].  
Hun gav [..... dem det ikke] \_\_\_\_\_ [..... i går].  
 彼女は昨日 (i går), 子供たちに (børnene) お菓子を (slik) あげな  
 かった (gav ikke)  
 彼女は昨日, 彼らに (dem) それを (det) あげなかった

左右の枠が「主語+弱代名詞+文副詞/否定詞」からなる中域をはさんでいるのが確認できる<sup>7</sup>。(61)の弱代名詞 dem det「彼らにそれを」の位置は「ヴァカーナゲル位置」と似ているが、くわしくは次節で説明する。

このように、「定形性非対称」による「定動詞第2位」の語順は、枠構造を前提とするのである。西ゲルマン語の「OV型枠構造」に対して、北ゲルマン語には「VO型枠構造」があると言える。西ゲルマン語との相異は、OV型からVO型への変遷に伴って(清水 2013a: 57-61)、動詞群がドイツ語などの

<sup>7</sup> アイスランド語はこれとは異なる: Hún segir að Jens hafi örugglega aldrei reykt tóbak á ævinni. 「イェンスは断じて (örugglega) 一度も (aldrei) 人生で (á ævinni) タバコを (tóbak) 吸ったことが (hafi~reykt) ない (ekki) と (að) 彼女は (hún) 言っている (segir)」。

「本動詞<助動詞」( $V_2 < V_1$ ) から英語式の「助動詞>本動詞」( $V_1 > V_2$ ) に変わった点と、後域が語用論的位置から統語論的位置として確立した点にある。

前者について補足しておこう。動詞 (V) が目的語 (O) を支配するのは、助動詞 ( $V_1$ ) が本動詞 ( $V_2$ ) を支配するのと同じ関係である。動詞句の動詞と動詞群の助動詞は主要部 (head), 動詞句の目的語と動詞群の本動詞はその補部 (complement) にあたる。言語類型論では、VO 型と「助動詞>本動詞」( $V_1 > V_2$ ) は主要部前置 (主要部先頭 head-initial, 主要部>補部), OV 型と「本動詞<助動詞」( $V_2 < V_1$ ) は主要部後置 (主要部末尾 head-final, 補部<主要部) に分類される。

なお、北ゲルマン語の「定動詞第 2 位」に対するわずかな例外は、主節に現れる一部の話法詞と焦点副詞である。(62) について、スウェーデン・アカデミー編集のスウェーデン語辞典 (ス *Svensk ordbok A-L* 2009: 1449) は、*sanske/kanhända/måhända* 「もしかして」について、(det) {*kan ske/kan hända/må hända*} att-従属節「～ということが起こる (-ske/-hända) かもしれない (kan-/må-)」という文の意味の残存を指摘している (英 maybe 参照)。

- (62) ス *Kanske/Kanhända/Måhända* |du har/har du| rätt. もしかして君  
は (du) 正しい (har 現在形~rätt) かもしれない  
(ib. 1449 変更)

- (63) ブ Vi *bare* satt der og ventet. 私たちは (vi) ただ (bare) そこで (der)  
待っていた (satt og (英 and) ventet 過去形) だけだ  
(Faarlund 2019: 210)

### 3-2. 大陸北ゲルマン語の目的語交替

ここで、次に再録する (61) の例を改めてよく見てみよう。後域の目的語名詞句 *børnene slik* 「子供たちにお菓子を」を受けた無強勢の弱代名詞 *dem det* 「彼らにそれを」が、中域の否定詞 *ikke* (英 not) の前に置かれている。これを目的語交替 (object shift) と言う。この目的語交替は、普通の名詞句や強勢を持つ代名詞では起こらない。大陸北ゲルマン語に広く共通する現象だ

が、微妙な差異がある。

- (61) 前域 左枠 [ 中域 ] 右枠 [ 後域 ]  
 (話題/強調・対比) [主語+弱代名詞+否定詞] [目的語/補語+副詞句]  
 デ Hun gav [\_\_\_\_\_ ikke] \_\_\_\_\_ [børnene slik i går].  
Hun gav [\_\_\_\_\_ dem det ikke] \_\_\_\_\_ [\_\_\_\_\_ i går].  
 彼女は昨日、子供たちに (børnene) お菓子を (slik) あげなかった  
 彼女は昨日、彼らに (dem) それを (det) あげなかった

「ヴァカーナーゲル位置」との相異は、「目的語交替は動詞句内で弱代名詞が文副詞/否定詞に隣接する場合に限られ、その間に何らかの要素があってはならない」という条件である。これは「ホルムベリの一般化」Holmberg's generalization) として知られている。したがって、たとえば(64)「文副詞/否定詞+従属節の定動詞+弱代名詞」、(65)「完了の助動詞+文副詞/否定詞+過去分詞+弱代名詞」、(66)「定動詞+文副詞/否定詞+間接目的語+弱代名詞」では、目的語交替は起こらない(下線部が「何らかの要素」にあたる)。この場合には、弱代名詞(次例では下線部で指示)は文副詞/否定詞の前には出られず、名詞句と同じ位置にとどまる (Faarlund 2019: 199f.)。

- (64) デ Han købte ikke avisen/den ikke. 彼は (han) {新聞を (avisen)/それを (den)} 買わなかった (købte 過去形 ikke (英 not))  
 hvis han ikke købte avisen/ikke købte den/\* den ikke købte}. もし (hvis) 彼が {新聞を/それを} 買わなかったら  
 (65) ニ Vi har ikkje sett jenta/ikkje sett henne/\* henne ikkje sett. 私たちは (vi) {女の子 (jenta)/彼女 (henne) を} 見かけなかった (har ikkje sett 現在完了形 (英 have not seen))  
 (66) ス Han gav inte Jens tidskriftet/inte Jens det/\* det inte Jens}. 彼は イェンスに {雑誌を (tidskriftet)/それを (det)} あげなかった (gav 過去形 inte (英 not))

言語間の相異も認められる。デンマーク語とニューノシュクでは、(61)「[間接目的語+直接目的語] (dem det 彼らにそれを) + 否定詞」のように、弱代名詞はともに交替するのが普通である(67)。一方、スウェーデン語では、最初の間接目的語しか動かないことがある(68)。文副詞/否定詞が2つの場合でも、デンマーク語とニューノシュクではかならずまたぐが(69)、スウェーデン語では任意である(70)。スウェーデン語の弱代名詞は、比較的「重い」のかもしれない。それとは逆に、再帰代名詞 sig が主語を飛び越えるスウェーデン語の長距離目的語交替 (long object shift) (71)は、「-s/-st 動詞」の成立を彷彿とさせるようである。

- (67) ニュ Eg lånte henne dei *ikkje*. 私は (eg) 彼女に (henne) それらを (dei) 貸さなかった (lånte 過去形~ikkje (英 not))

(Faarlund 2019: 201)

- (68) ス Han gav {henne den inte/henne inte den}. 彼は彼女に (henne) それを (den) あげなかった (gav 過去形 inte (英 not))

(ib. 201 変更)

- (69) デ I går læste Peter den uden tvivl ikke. 昨日 (i går) ペーターはそれを (den) 疑いなく (uden tvivl) 読まなかった (læste 過去形~ikke (英 not))

(Vikner 2017<sup>2</sup>: 2801)

- (70) ス Man ser {henne ju inte/ju henne inte/ju inte henne}. みんな (= 人は man 不定代名詞) 彼女を (henne) 見かけない (ser 現在形~inte (英 not)) よ (ju 心態詞) (Faarlund 2019: 201f.)

- (71) ス Klarar sig barnen på egen hand? 子供たちは (barnen) 自力で (på egen hand) やっていけるのか (klarar sig 再帰動詞現在形)

(ib. 202)

## 4. 補文標識と一致

### 4-1. 補文標識をめぐって—従属接続詞, 関係詞, 間接疑問文の疑問詞

1-2(6)ド *wenn* du bei mir bist 「あなたがそばにいてくださるなら」では、従属接続詞 *wenn* 「～ならば」を左枠に配置した。しかし、この処置は再考を要する。語彙範疇としての従属接続詞と機能範疇としての補文標識は、同一視できないからである。従属節を導く補文標識のしくみを掘り下げてみよう。

ドイツ語の文の領域モデルを論じた Wöllstein (2010: 30) は、(72)の①関係詞と②間接疑問文の疑問詞を前域に置いて、補文標識を空白 (Ø) とする一方で、③従属接続詞 *weil* 「～なので」/*ob* 「～かどうか」/*dass* 「～ということ」は左枠に置いて、前域を空白にしている。前者①②は後者③と違って句であり、機能語（主要部）ではないというのが、両者を区別する理由である。簡略化すると、次のようになる。

(72)	前域	左枠	[	中域	]	右枠
ド	①	<i>wer/der</i> Ø	[	<i>sich die Hände am Feuer</i>	]	<i>wärmen kann</i>
		手を火で暖めることができる (人はだれでも/人)				
	②	<i>wer</i> Ø	[	<i>sich die Hände am Feuer</i>	]	<i>wärmen kann</i>
		だれが手を火で暖めることができるか (ということ)				
	③	Ø <i>weil/ob/dass</i>	[	<i>du dir die Hände am Feuer</i>	]	<i>wärmen kannst</i>
		君が手を火で暖めることができる {ので/かどうか/ということ}				

はたしてそうだろうか。ゲルマン語比較統語論 (comparative Germanic syntax) の視点から検討してみよう。一例として、北海ゲルマン語の後裔である英語と西フリジア語の音韻上の共通点をついた次の合い言葉 (shibboleth) を見てみよう。



- (73) 西フ Bûter, brea en griene tsiis, [**wa't** dat net sizze kin], is gjin oprjochte Fries. バター (bûter ['butər], 英 butter), ライ麦パン (brea [brɪə], 英 bread), 青カピチーズ (griene ['grɪənə] tsiis [tsi:is], 英 green cheese), それを (dat) 言う (sizze) ことができ (kin) ない (net) 者は (wa't←wa dat, 英 who that) 本当の (oprjochte) フリジア人ではない (is gjin~Fries, 英 is no~Frisian)
- (74) ド Butter, Brot und grüner Käse, [**wer** Ø das nicht sagen kann], ist kein aufrechter Friese. 同上
- (75) オ Boter, brood en groene kaas, [**wie** Ø dat niet kan zeggen], is geen oprechte Fries. 同上

(73)西フ **wa't** dat net sizze kin 「それが言えない者」の wa't [va:t] 「～する人はだれでも」は、先行詞を欠く(76)①自由関係詞(不定関係詞)である。wa [va:] (ド wer) に補文標識 dat [dɔt] (ド dass) の前接語 't [t] がついて、定動詞末尾の従属節を導いているのがわかる。しかし、(74)のドイツ語訳には、この接語化した補文標識がない。(75)のオランダ語訳も同じである。さらに、(76)の②定関係詞(西フ dyjingen dy't [dit]←dy [di] + dat/ド diejeningen die Ø～という人々)、②間接疑問文の疑問詞(西フ wa't [va:t]←wa [va:] dat/ド wer Ø だれが～なのか)、③従属接続詞(西フ om't [omt]←om [om] + dat/ド weil Ø～なので; 西フ oft [ɔt]←of [ɔf] + dat/ド ob Ø～かどうか)の対応でも同様である。なお、接語化して寄り添うべきホストを欠く④従属接続詞の西フ dat 「～ということ」は、前接語 't にはならない。

(76)	前域	<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">左枠</span>	[ 中域 ]	<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">右枠</span>
①西フ	<b>wa</b>	<b>'t</b> (←dat)	[dat net]	sizze kin
ド	<b>wer</b>	<b>Ø</b>	[das nicht]	sagen kann
	それを言えない者は/だれがそれを言えないか (wa't←wa dat)			

- ②西フ dyjngen **dy** 't (←dat) [dat net] sizze kinne  
 ド diejenigen **die** Ø [das nicht] sagen können  
 それを言えない者たち (dy't←dy+'t)
- ③西フ **om/of** 't (←dat) [se dat net] sizze kinne  
 ド **weil/ob** Ø [sie das nicht] sagen können  
 彼らはそれが言えないので (om't←om dat)/かどうか (of't←of dat)
- ④西フ Ø **dat** [se dat net] sizze kinne  
 ド Ø **dass** [sie das nicht] sagen können  
 彼らがそれを言えないということ (dat/\*-'t)

関係節や間接疑問文という従属節を導くのは、西フリジア語に残る接語化した補文標識 -t (←dat) 「～ということ」である。西フ dy/wa (ド die/wer) は単なる代名詞にすぎず、本来、それ自体が従属節を導入することはできないはずである (西フ **Dy** kinne dat net sizze. その人たちは (dy) それを言えない/**Wa** kin dat sizze? だれが (wa) それを言えるのか)。ドイツ語も同様である (ド **Die** können das nicht sagen./**Wer** kan das sagen? 同上)。ただし、ドイツ語では、補文標識 dass 「～ということ」は接語化せずに脱落し、音形として実現されない。したがって、空白 (Ø) になっているのである。英 I know {**that**/Ø} they can't say that. の that の省略も同様に捉えられる。

西フリジア語でも、補文標識 -t (←dat) は名詞句や形容詞などの一般語句の直後では脱落する。この場合、補文標識 -t を oft/(at) [ɔt] (←of [ɔf] dat) で補うことがある (77)。機能語である疑問詞も「疑問詞+'t」の代わりに、「疑問詞+oft」とすることがある (78)。of は「または」の意味だが、(79) のような再述所有代名詞構文 (ソノ～デアルトコロノ) による関係詞にも使うので、この場合は補文標識の「支え」にすぎない (79)。

- (77) 西フ Witte jo {**hoe let** Ø/**hoe let oft**} it is? あなたは (jo) 何時 (hoe let  
 (ド wie spät) Ø/hoe let oft) なのか (it is) 知っていますか (witte)  
 (De Haan 2006: 24 変更)

- (78) 西7 Ik frege {*\*wa Ø/wa't/wa oft*} it dien hie. 私は (ik) だれが (wa Ø/wa't/wa oft) それを (it) したか (dien ha) たずねた (frege)  
(Bosma-Banning 1981<sup>2</sup>: 85)
- (79) 西7 de jonge {dy syn fyts Ø/*\*dy syn fyts't/dy syn fyts oft*} stellen wie (カレノ dy syn 再述所有代名詞構文) 自転車を (fyts) 盗まれている (stellen wie) 少年 (de jonge)  
(Hoekstra/Tiersma 1994: 525 変更)

通常はこの of dat を欠くオランダ語でも、話し言葉や方言には類例が見られる (80) (SAND I 2005: 16 (Commentary 15f.), Donaldson 2008<sup>2</sup>: 297, 303, 313)。

- (80) オ Ik weet niet {*wie/wie dat/wie of dat*} er zal komen. 私は (ik) だれが (wie/wie dat/wie of dat) 来るか (er zal komen) 知らない (weet niet)  
(Donaldson 2008<sup>2</sup>: 303 変更)

中英語でも、補文標識を伴う「who that-関係節」が頻繁に登場した。

- (81) 中英 I wrecche, *which that* wepe and wayle thus このように泣きわめく哀れな私  
(Chaucer: *Canterbury Tales* A931, 中尾/児馬 (編著) 1997<sup>3</sup>: 63)

今でも、英語の that は関係詞 who/which とは異なる補文標識 (英 the fact *that* they can't say that) であり、複数形 those を欠き (英 the students {*who/that/\* those*} can't say that), 「\*前置詞 + that-関係文」は非文である (英 the students *with whom/\* that* we all are acquainted)。つまり、(76)①②西7 wa't/dy't は「wa/dy (前域) + 't (左枠)」、(72)(76)①②ド wer/die は「wer/die (前域) + Ø (左枠)」の位置を占める。これは Wöllstein (2010: 30) の分析と同じである。なお、西7 dy't/ド die などの指示詞 d-系列の関係詞

を d-関係詞 (d-relative), 西フ *wa't*/ド *wer*/英 *who, which* などの疑問詞 w-系列の関係詞を w-関係詞 (w-relative) と呼んでいる。

問題なのは, (72)③/(76)③従属接続詞の解釈である。④西フ *dat* 「～ということ」(ド *dass*) は従属節を導入するだけだが, ③西フ *om't* 「～なので」/*oft* 「～かどうか」(ド *weil/ob*) には疑問・理由という語彙的意味があり, その意味を担うのは, 西フ前置詞 *om* 「～のために」(ド *um*), *of* 「または」(西フ A of B, 英 A or B) である。ここでも従属節を導くのは, *dat* が接語化した補文標識 *-t* である。語彙的意味を持つド *weil* 「～なので」/*ob* 「～かどうか」は, 主要部とは言えない。ド *ob* は西フ *of* (英 *if*) と同源である。ド *weil* 「～なので」は名詞 *Weile* 「(一定の) 時間」に連なる中高ド *die wile sō* 「～する間」が論理的意味に転じた結果である。本来, 従属節を導いたのは, 脱落した中高ド *sō* だった (Pfeifer 2004<sup>7</sup>: 1550)。これは so-関係節の補文標識 *so* にあたる。1-1 で挙げたド *Es irrt der Mensch, solang er strebt*. 「人間は努力する限り迷うものだ」の従属接続詞 *solang* 「～する間, ～する限り」も, 副詞 *solang* 「その間, その限り」と同形である。英語では, *so long as* he strives のように従属接続詞 *as* を伴い, 西フリジア語でも *De minske dwaalt, salang't (←dat)/salang as* er stribbet. となる<sup>8</sup>。低地ドイツ語北低地ザクセン方言でも, *solang (as/dat)*-従属節「同上」(Thies 2011<sup>2</sup>: 245) と言う。

このように, Wöllstein (2010: 30) の分析は不適切である。ド *dass* (西フ *dat*) を除いて, 従属接続詞は前域 (生成文法の分析では CP の指定部) にあり, 左枠には音声的に実現されない補文標識 (CP の主要部) を設定するのが妥当なのである。そこで, 1-1(3)のド *wenn* (=左枠) *du bei mir bist* の *wenn* も前域に置き直し, 左枠は空白 (∅) に変更するのが適切と判断される。

(82)	ド 前域	<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">左枠</span>	[ 中域 ]	<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">右枠</span>
	<i>wenn</i>	∅	[ <i>du bei mir</i> ]	<i>bist</i>

<sup>8</sup> 西フ *as* (英 *as*/ド・オ *als*) の用法は複雑である。詳細は Popkema (1979), De Rooy (1965) 参照。

あなたが（私の）そばにいてくださるなら

#### 4-2. ゲルマン諸語の補文標識

ゲルマン諸語の従属節を導く補文標識の種類は多彩である。まず、西フ dat/ド dass/英 that 「～ということ」は、「th/b/d/t-系列」の指示詞標識を伴う代名詞から発達した補文標識（代名詞補文標識 pronominal complementizer）である。一方、ドイツ語の so-関係節やスイスドイツ語チューリヒ方言の wo-関係節は、不変化詞（いわゆる副詞）を転用した補文標識（不変化詞補文標識 particle complementizer, または、副詞的補文標識 adverbial complementizer）であり、前域（指定部）にあたる要素を欠いている。次例の低地ドイツ語北低地ザクセン方言の nu {*dat/wo*} 「今はもう～だから」は、両者の使用例である（英 now (*that*)/西フ no't (←no + *dat*)/オ nu (←nu + Ø)）。

- (83) ザ Nu {*dat/wo*} ik di wedderseh, warrt mi dat Hart licht. 私は (ik) 君と (di) 再会した (wedderseh 現在形) 今 (nu {*dat/wo*}), ほっとした (気持ち *が* (mi dat Hart) 軽くなる (warrt 現在形))

(Thies 2011<sup>2</sup>: 245)

ドイツ語にもその片鱗は認められる。ブラームス作曲『ドイツ・レクイエム』(ド *Ein deutsches Requiem* 1868) の感動的な第1曲の冒頭で確認してみよう。

- (84) ド Selig sind, *die da* Leid tragen, / denn sie sollen getröstet werden. / *Die* mit Tränen säen, / werden mit Freuden ernten. 悲しみを抱く者は幸いである / その身は慰めを受けるがゆえに / 涙して種まく者は / 喜びとともに刈り入れん (Matthew 5, 4; Psalm 126, 5)

新約聖書『マタイによる福音書』第5章第4節の『山上の垂訓』から取ら

れたド Selig sind, **die da** Leid tragen 「悲しみを抱く者は幸いである」は、d-関係詞の die 「～する人はだれでも」による自由関係節（不定関係節）である。直後の da に注目されたい。これは場所の副詞 da 「そこで」（英 there）ではなく、d-系列の指示詞標識を伴う補文標識であり、w-系列の(83)wo と同類である。

一方、旧約聖書『詩篇』第 126 篇第 5 節を引用したド **Die** mit Tränen säen 「涙して種まく者」には、da は不在である。出典となった 16 世紀前半の『ルター聖書』では、da の使用があいまいだった。中高ドイツ語の対応語 dā（<古高ド dār）による次例（Dal/Eroms 2014<sup>4</sup>: 243f.）では、補文標識を伴う関係詞 die dā 「～した者たち」と指示代名詞 die 「その者たち」の対比が明確である。

- (85) 中高ド **die dā** torsten vechten, **die** lägen alle erslagen. 勇んで戦った (torsten vechten) 者たち (die dā) だが、その者たちは (die) すべて (alle) 撃ち殺されて (erslagen) 倒れていた (lägen)  
(*Das Nibelungenlied* 98, 1)

他の現代ゲルマン諸語の例を見てみよう。低地ドイツ語オストファーレン方言（ド Ostfälisch）の dei da/dei はド die da/die と同様である。西フリジア語では、規則的に dy't (←dy (ド die) + 't (←dat)) となる。

- (86) 𐌺 Selig sind, **dei da** Laid draget, / denn se söllt ertröistet weern. / **Dei** mit Tranen saaiet, / weret mit Froiden arnen. 悲しみを抱く (Laid draget) 者は (dei da) 幸いである (seelig sind) / その身は (se) 慰めを受ける (söllt ertröistet weern) がゆえに (denn) / 涙して (mit Tranen) 種まく (saaiet) 者は (dei) / 喜びとともに (mit Froiden) 刈り入れん (weret~arnen)  
(*De Plattduitsche Baibel* 1997: 652, 361)

- (87) 西フ Lökkich **dy't** treurje, / want se sille treaste wurde. / **Dy't** mei

triennen siedzje, / sille mei jubel sightsje. 悲しみを抱く (treurje)  
 者は (dy't) 幸いである (lokkich [binne]) / その身は (se) 慰め  
 を受ける (sille treaste wurde) がゆえに (want) / 涙して (mei  
 triennen) 種まく (siedzje) 者は (dy't) / 喜びとともに (mei jubel)  
 刈り入れん (sille~sightsje) (Bibel 1989<sup>2</sup>: 1377, 733)

「w-系列」の例には、上記のチューリヒ方言とペンシルヴァニアドイツ語の「先行詞+ヲ wo/ペ vo」がある。アフリカーンス語は単数・複数、人間・物事で「先行詞+wat」に統一している。この wat は「\*前置詞+wat」ではなく、「waar (R-代名詞)/wat~前置詞」となるように (Donaldson 1993: 146-148), 英 that に相当し, 英 what/オ wat のような関係代名詞ではなく, 補文標識と考えられる。アフリカーンス語の自由関係詞 (不定関係詞) は, wie (英 who/オ wie)/wat 「~する人/物事」(英 what/オ wat) である。

(88) ヲ Seelig sind **die, wo** truured — / die wèèrded trööschtet. 悲しみを  
 抱く (truured) 者は (die, wo) 幸いである (seelig sind) / その身  
 は (die) 慰めを受ける (wèèrded trööschtet) がゆえに

(s Nöi Teschtamänt Züritüütsch 1997: 5)

(89) ペ Ksaykend sinn **dee vo** dreepsawl henn. / Si zayla gedraysht vadda.  
 悲しみを抱く (dreepsawl henn) 者は (dee vo) 幸いである  
 (ksaykend sinn) / その身は (si) 慰めを受ける (zayla gedraysht  
 vadda) がゆえに (Es Nei Teschtament 1993: 5)

(90) ア Geseënd is **dié wat** treur, / want hulle sal vertroos word. / **Wie**  
 met trane saai, / sal die oes met gejuig inbring. 悲しみを抱く  
 (treur) 者は (dié wat) 幸いである (geseënd is) / その身は (hulle)  
 慰めを受ける (sal vertroos word) がゆえに (want) / 涙して (met  
 trane) 種まく (saai) 者は (wie) / 喜びとともに (met gejuig) 刈  
 り入れん (sal die oes~inbring)

(Die Bybel 2007<sup>16</sup>: 新約 9, 旧約 653)

北ゲルマン語に移ることにしよう。デンマーク語の関係文は次の2手に分かれる。

- (91) デ Salige er **de, som** sørger, / for de skal trøstes. 悲しみを抱く (sørger) 者は (de, som) 幸いである (salige er) / その身は (de) 慰めを受ける (trøstes) がゆえに (for) (Bibelen 1998: 1044)
- (92) デ **De, der** sår under tårer, / skal høste med jubel. 涙して (under tårer) 種まく (sår) 者は (de, der) / 喜びとともに (med jubel) 刈り入れん (skal høste) (ib. 554)

デンマーク語の(92)de, der (ド die da) のderは, ド da (<古高ド dār) と同源の補文標識だが, 主語の関係節化にしか使えない。一方, (19)デ de, som のsomは, 単独で広く関係詞として用いる補文標識で, 現代北ゲルマン語では最も一般的である。英 that と似て, 関係代名詞ではなく, 無変化で前置詞に支配されず, 「\*前置詞+デ som-関係節」(\*前置詞+英 that-関係節)は不可である(前置詞残留 preposition stranding)を伴う「デ som-関係節~前置詞」は「英 that-関係節~前置詞」と同様に可)。somには「~のよように」の意味もあり, 用法としては英 as/ド wie に相当する。

スウェーデン語の(93)somもデンマーク語のsomと同じく, 広く関係詞として用いる。間接疑問文では, 主語の場合に限って, 両言語とも複合的に「ス 疑問詞主語 vem (英 who)+補文標識 som-従属節」/「デ 疑問詞主語 hvem (英 who)+補文 der-従属節」(だれが~なのか)とする(94)(95)。アイスランド語の対応語 semも主語と目的語の関係詞化(96)以外では, 「関係詞+補文標識 sem」となる(97)。しかし, 間接疑問文では, 「疑問詞+Ø」となってsemは登場せず, 定動詞が補文標識の位置(Ø)を占める(98)。

- (93) ス Jag känner ingen **som** inte kan säga det. 私は (jag) それを (det) 言え (kan säga) ない (inte) 者を (som) 知りません (vet inte)
- (94) ス **Vem** kan inte säga det? — Vet du **vem som** inte kan säga det? だ



れが (vem) それを言えないのですか—誰が (vem som) それを言えないか君は (du) 知っていますか (vet)

- (95) デ *Hvem* kan ikke sige det? — Vet du *hvem der* ikke kan sige det?  
同上

- (96) ア Hann gerði það, *sem* hann gat. 彼は (hann) 彼ができた (hann gat) ことを (það (英 that/ド das), sem) した (gerði)

(Friðjónsson 1978: 95 変更)

- (97) ア húsið, *þar sem* hann bjó 彼が (þar (英 there/ド da) sem) 住んだ (bjó) 家 (húsið)

*Þar* bjó hann. そこに (þar) 彼は住んだ (ib. 95 変更)

- (98) ア *Hver* getur ekki sagt það? — Veistu *hver getur* ekki sagt það? だれが (hver) それを (það) 言え (getur~sagt) ない (ekki) のですか—誰が (hver) それを (það) 言え (getur~sagt) ないか (ekki) 君は (-u←þú) 知っていますか (veist-)

フェーロー語には, sum (ス・デ・ブ・ニユ som/ア sem) と並ぶ補文標識として, 次例の ið [ɪ] がある。関係詞以外に, 従属接続詞としても用いる (7<sub>E</sub> tá ið ~したときに (3-1(49)参照) ↔ tá そのときに)。また, 次例の7<sub>E</sub> tí at-従属文「~なので」(↔ tí それゆえ, tað 「それ」の与格) の at (ス att/デ・ブ・ニユ at) は, ア því að-従属文 (↔ því, það 「それ」の与格) の að と同じく, 西7 `t (←dat)/英 that/ド dass にあたる。

- (99) 7<sub>E</sub> Sæl eru *tey, ið* syrgja, *tí at* tey skulu fáa troyst. *Tey, ið* sáa við gráti, skulu heysta við gleði. 悲しみを抱く (syrgja) 者は (tey, ið) 幸いである (sæl eru) / その身は (tey) 慰めを受ける (skulu fáa troyst) がゆえに (tí at) / 涙して (við gráti) 種まく (sáa) 者は (tey, ið) / 喜びとともに (við gleði) 刈り入れん (skulu heysta)

(Biblia 1983: 新約 5, 旧約 636)

上記の som/sem/sum, der, at/að とは別に、古ノルド語で最も一般的な補文標識は、アイスランド語では古風になった er (<代名詞 es) だった。これは、ドイツ語の er やゴート語の is と同源の代名詞補文標識である。関係詞 (100) (101), 従属接続詞 (102) (102), およびその支えとしてはたらく、多方面で用いられた。

(100) 古ノ Frá hverjum er [*saga sú, er* hann segir] ? 彼が<sup>g</sup> (hann) 言っている (segir) [トコロノ (er 関係詞)] その話は (saga sú) だれについて (frá hverjum) なのか (er) (*Fóstbræðra saga*, Chap. 23)

(101) 古ノ “[*Því*] veld ek eigi,” segir Qnundr, “[*er* þeir eru ósáttir], それには (því) 私が<sup>g</sup> (ek) 原因なのでは (veld) ない (eigi)” とオヌンドル (男名) は言った (segir 歴史的現在)。「彼らが<sup>g</sup> (þeir) 不和になっている (eru ósáttir) ことには (er 関係詞)」

(*Egils saga Skalla-Grimssonar*, Chap. 81)

(102) 古ノ ok [*er* hann náði konungs fundi], kvaddi hann konunginn. そして (ok) 彼は (hann) 王の集會に (konungs fundi) 近づいた (náði) ときに (er), 王に (konunginn) 挨拶した (kvaddi hann)

(*Gunnlaugs saga ormstungu*, Chap. 9)

(103) 古ノ Þeir bræðr hans stýrðu ríkinu, [*þá er* hann var í brottu]. 彼が (hann) 不在だった (var í brottu) ときに (þá er), 彼の兄弟たちが<sup>g</sup> (þeir bræðr hans) 国を (ríkinu) 治めていた (stýrðu)

(*Ynglinga saga*, Chap. 3)

不変化詞 (いわゆる副詞) 由来の補文標識 (不変化詞補文標識) の中でとくに広い用法を備える現代ゲルマン語の例には、アルザスドイツ語の as がある。この語は英語の as やドイツ語の als と同源である。アレマン方言に共通してアルザスドイツ語の関係詞は wu (ド wo) だが、同言語の as はド als と同じく比較の対象を表すほかに (104), 主語節・目的語節を導く英 that/ド dass のようにも用いる (105) (106)。さらに、間接疑問文では、西フ

リジア語の「疑問詞 -t (←dat)」のように、「疑問詞+as」(7ル èb (英 if/ド ob) を除く)として現れる(107)(108)。(108) *wènn-me abfahrt/a-kummt* では、「出発/到着するときに」の意味になる(7ル wènn as いつ〜か(ド wann) ↔7ル wènn ~するときに(ド wenn))。

- (104) 7ル Es ésch vil schéner **as** gèstert. 昨日 (gèstert) よりも (as) ずっと (vil) 天気が良い (es ésch~schéner) (Brunner 2001: 175)
- (105) 7ル Es ésch nume schad, [**as** die Wohnung e-so tir ésch]. その住居が (die Wohnung) そんなに (e-so) 高価 (tir) である (ésch) ことは (as) ただ (nume) 残念だ (ésch schad) と言うほかはない (ib. 279)
- (106) 7ル Se fénde alle zwài, [**as** der Zug vil praktischer ésch]. 彼らは (se) 2人とも (alle zwài) 電車のほうが (der Zug) はるかに (vil) 便利 (praktischer) だ (ésch) と (as) 思っている (fénde) (ib. 197)
- (107) 7ル Lüeg do, [**wèr as** zu uns kummt]. だれが (wèr as) 私たちのところへ (zu uns) 来るか (kummt) 見てみなさいよ (lüeg do) (ib. 181)
- (108) 7ル Méndestens wàiss me, [**wènn-as** me abfahrt] un oi [**wènn as-me** a-kummt]. 少なくとも (méndestens) いつ (wènn-as) (人は me, 不定代名詞) 出発するか (abfahrt), そして (oi), いつ (wènn as) (人は -me, 不定代名詞) 到着するか (a-kummt) (人は me) わかる (wàiss) (ib. 195)

以上、紹介したのは、定動詞を含む従属節を導く定形補文標識 (finite complementizer) である。このほかに、不定詞句 (= 不定詞節) を導く不定形補文標識 (non-finite complementizer) も挙げられる。オランダ語、西フリジア語、アフリカーンス語の「om+te-不定詞句」(〜すること) がそれである。ドイツ語の「um+zu-不定詞句」(〜するために) に対応する「om (義務

的) + te-不定詞句」(～するために)もあるが、このド um/オ om は目的の意味を持つ前置詞である。補文標識 om はこれから発達したもので、語彙の意味が薄れ、不定詞句を導く役割を担うように文法化した。その過程は、om の使用程度に応じて、「アフリカーンス語 (ほぼ義務的) > 西フリジア語 (推奨) > オランダ語 (任意) > ドイツ語 (未発達)」の順で進んでいると言える。

- (109) ド Sie haben vor [ $\emptyset$  nach Japan **zu kommen**]. 彼らは日本に来るつもりだ
- (110) オ Zij zijn van plan [ $\{om/\emptyset\}$  naar Japan **te komen**].
- (111) 西フ Hja binne fan doel [ $\{om/^{(2)}\emptyset\}$  nei Japan ta **te kommen**].
- (112) フ Hulle is van plan [ $\{om/*\emptyset\}$  na Japan **te kom**].

英語の for もこれによく似ており、I want  $\{\emptyset$  you to come/very much **for you to come**}. のように、動詞と隣接しない場合に現れる。for him のように目的語を伴うのは、前置詞のなごりと言える。

#### 4-3. 西フリジア語の「補文標識の一致」と関連現象

補文標識の一致について論じるにあたって、まず、関口存男<sup>つぎお</sup>「<sup>ベルリンなまり</sup>伯林訛 雑考 (2)」(1934) の次の一節を見てみよう。

- (113) wennste = wenn du それから、一つ疑問なのは、wenn du の代わりに wennste と云う件です。Wenn de でよささうなものを、何故 s が這入るのか、〈中略〉haste, meenste, kommste, jehste などと云ふ口調にあやかつて wennste なんてものが出来たのではないかと思ひます。〈中略〉 / たとへば、『おれがほんとに好きなら』斯々してくれてもよささうなものだ、と云つたやうな時は Wennste mir uffrichtig lieben dust (= wenn du mich aufrichtig lieben tust) と云ふ。また、たとへば、『何の苦もなく』やつつける (入學試験の答案など) ことを、als wennste schwebst (まるでスーツと宙に浮かんで行くやうに)

と云ふなどもそれです。

(関口 1994: 355f.)

これは、管見の限り、補文標識の一致について、日本人が発した関連発言の先駆けと言えるように思われる。ペリ *haste/meenste/kommste/jehste* は、ド *hast/meinst/kommst/gehst* 「君は持っている/思う/来る/行く」にあたる。オランダのヴァン・ハーリングゲン (Coenraad B. van Haeringen 1892~1983) の『活用する接続詞』(1962<sup>2</sup> 再録) と Van Ginneken の『従属接続詞と代名詞の活用』と題する論考が世に出たのは、それから5年後の1939年のことだった(原題は参考文献参照)。

本節の趣旨は、「従属接続詞(厳密には補文標識)は屈折(活用)し、定動詞に準じた一致(agreement)による語尾を持つ」というものである。ちなみに、「曲用」(declension)は名詞類、「活用」(conjugation)は動詞の「屈折」(inflection, 語形変化)である。以下では、西フリジア語の従属接続詞(補文標識) *dat* 「~ということ」を用いた例で確認していこう。

- (114) 西7 \*Ik leau net **dat do** [dɔ'do:(u)] dat sizze **kinst**. 私は (ik) 君が (do) それを (dat) 言える (kinst~sizze) とは思わない (leau net)
- (115) 西7 Ik leau net {**datsto** [dɔs'to:(u)]/**datst-Ø** [dɔst]} dat sizze **kinst**.  
同上 (datsto (datst-+o (doの接語化)/-Ø (代名詞主語省略))

(114) *dat do* (ド *dass du*) は単なる2語の連続にすぎない。その発音 [dɔ'do:(u)]←[dɔd'do:(u)]←[dɔt 'do:(u)] は、複数の単語間で子音の有声と無声の連続が逆行同化で有声に統一され、二重子音の縮約を経た結果である。これは *dat do* に限らない一般的な現象である。この場合、*dat* が無変化の「\**dat do* [dɔ'do:(u)] + 従属節」は許されない。

一方、(115) *datsto* [dɔs'to:(u)] では、*do* 「君」が義務的に接語化して、-o [o:(u)] となる。西7 Heitelân, hoe moai **bisto!** 「祖国よ、おまえは何と美しいことか」(Troelstra) のように、左枠の定動詞に隣接する場合と同じく、-o

(←do) は左枠の従属接続詞に隣接する場合に限られた統語的接語 (syntactic clitic) なのである。datsto [dɔs'to:(u)]←[dɔts'to:(u)] の発音は、破擦音の発生を嫌って [s]←[ts] となり、dat の t [t] が脱落した結果である。\* [dɔz'do:(u)] とならないのは、接語化で 1 語の音韻論的語 (phonological word) になっているためである。それにしても、datsto の -st は奇妙である。-s- を挿入する発音上の理由は見当たらない。

じつは、datsto の -st は定動詞 *kinst* [kɪst] 「～できる」の語尾 -st と同じなのである。do 「君」は代名詞主語省略 (*pro-drop*) できるので、-o (←do) を欠く datst [dɔst] ともなる。もし単に do が接語化して -to になったのなら、代名詞主語省略で -to が脱落するはずだが、\*dats とはならない。つまり、「-st は補文標識の活用語尾」なのである。これは従属節を導く補文標識 dat/'t に限られる。この語尾 -st は、従属接続詞一般(116)、関係詞(117)、間接疑問文の疑問詞(118)に接語化した補文標識 dat/'t でも、規則的に現れる。その際、「活用」しているのは、あくまで補文標識 dat/'t なのである。

(116) 西フ Do moatst jûns altyd toskpoetse [**foar'tst** op bêt giest]. 君は (do) 夜には (jûns) いつも (altyd) 寝る (op bêt giest) 前に (foar'tst [fwast]←[fwatst], foar (英 before/ ド bevor) +-'t (←dat) + -st + ∅ (←do), 従属接続詞) 歯を磨く (toskpoetse) 必要がある (moatst) (Van der Meer 2009: 102 変更)

(117) 西フ Ik wit net [oer **wa'tsto** it hast], mar [**watsto** seist] is net wier. 君がだれについて (oer wa'tsto ['vas'to:(u)]←['vats'to:(u)], wa (英 who/ ド wen) +-'t (←dat) + -st + -o (←do), 疑問詞) 話しているか (it hast) 私は (ik) 知らない (wit net), しかし (mar) 君が言っていることは (watsto [vɔs'to:(u)]←[vɔts'to:(u)] ←[vɔtts'to:(u)]←wat (英 what/ ド was) + 't (←dat) + -st + -o (←do), 関係詞) 本当では (wier) ない (is net) (ib. 78 変更)

datsto [dɔs'to:(u)]←[dɔts'to:(u)] と同じく、破擦音の発生を嫌って [s]

←[ts] となるので、接語化した補文標識 't は発音しない ((116) foar'tst [fwast]← [fwatst], (117) wa'tsto ['va:s'to:(u)]← ['va:ts'to:(u)]))。そこで、関係詞 wat では -t を除き、(117) watsto [vɔs'to:(u)]← [vɔts'to:(u)] (←wat + -t (←dat) + -st + -o (←do)) とつづる。-t を除いた foar'st, wa'sto とつづることもある。そのために、従属接続詞・関係詞・疑問詞それぞれ自身が活用しているように見えるのである。

この -st は 2 人称親称単数という人称と数に一致した語尾であり、時制やムード (法) とは無縁である。そこで、「補文標識の一致」(complementizer agreement) と呼ぶほうが適切である。「定動詞第 2 位」の原則に従って、右枠の定動詞は左枠に移動するわけだが、左枠に補文標識が居座っていると、動くことができない。そのため、「定動詞の文法的素性だけが移動する」とも言えそうだが、動詞自身の素性である時制やムード (法) は語尾 -st には反映されない。むしろ、「ヴァカーナーゲル位置」に隣接する人称代名詞 do 「君」と左枠の補文標識との接触で生まれた近世以降の現象とみなすのが妥当と言えよう。

西フリジア語では、「補文標識の一致」は 2 人称親称代名詞 do に限られる。それは、他の語尾 -e/-t/-en に比べて、語尾 -st が音韻的に「鮮明」だからかもしれない。代名詞主語省略も do のみに限定されている。その一方で、ドイツ語やオランダ語の諸方言の中には、大部分あるいはすべての人称と数で一致を示す例も存在する。『オランダ語方言統語論地図』の第 I 巻 (SAND I 2005: 19-36, *Commentary* 17-24) を紐解くと、その様子がよく理解できる。

さらに、同書の地図 (61-66) によれば、返答詞のオ ja/nee (英 yes/no) には、主語代名詞の前接語が付加される方言がかなり見られる。その際、ベルギー北西部の西フランドル州 (オ Westvlaanderen) を中心に、ja/nee と前接語の間に定動詞の語尾が加わる。標準オランダ語に焼き直した同書の雛形の例文 (118) では、jaa-**n-s** 「はい」の -s [s] は 3 人称代名詞複数主語 ze [za] 「彼 (女) ら」の前接語であり、-n が完了の助動詞 hebben (英 have) の語尾にあたる。なお、ja/jaa- [ja:] のつづりは正書法上の区別にすぎない。

- (118) オ *Hebben ze* al gegeten? — Jaa-*n-s*. 彼(女)らは (ze) もう (al) 食事をしたのですか (hebben) —はい (jaa-n-s)  
(SAND I 2005 (Commentary): 54)

オランダ語西フランドル方言(オ Westvlaams)では, ja「はい」の3人称複数語尾 -nは補文標識と定動詞の語尾と共通している(119)。これを ja/neeの一致 (agreement of *ja* and *nee*) とみなす意見もある ((46)の出典参照)。つまり, 「はい/いいえ」も「活用(屈折)」すると言えることになる。

- (119) 西フ jaa-*n-ze* da-*n-ze* gaa-*n-ze* (SAND I 2005: 66)  
(英 yes-語尾-they, that-語尾-they, go-語尾-they)

## 5. 動詞群の語順

### 5-1. 動詞繰り上げ, 第3構文

これまで, 「右枠の定動詞が左枠に移動する」などと述べてきた。これはゲルマン諸語の動詞が位置を変えやすい証拠である。かたや日本語の動詞は, 歴史言語学的に一貫して文末を保ってきた。日本語のような膠着語 (agglutinative/agglutinating language)の動詞は, 「待たせられ続けていただろうに」のように, 「ヴォイス(態: 使役<受動)<アスペクト(継続<完了)<話法」という階層に従って, 語幹に種々の要素をつけて分割できないかたまりを作る。これを動かすのは大変なことである(松本 2006: 44)。一方, ゲルマン諸語の動詞は独立の要素の集合であり, 動詞群の形態的なまとまりが弱く, 個々の要素を分離できるのである。ゲルマン諸語の動詞群の語順は多様である。詳細は Wurmbrand (2004), SAND II (2008: 14-25) に譲り, 以下ではドイツ語と関連言語に限定することにした。

動詞群には, 全体としてのまとまりの強さ(結束性 cohesion)に段階がある。まず, 完了形だが, 英 I *have built* a house. は「家を建てられた状態(built)持っている(have)」, ド Er *ist gekommen*. 「彼は来た」は「来た者



(gekommen<Gekommener)だ(ist)」に由来する。しかし、今では、「彼は家を建てた」/「彼は来た」の意味になっており、「過去分詞+完了の助動詞」はひとまとまりに解釈される。使役動詞では、ド dass sie das *wissen ließ* 「彼女がそれを[知らせた]こと」の *wissen lassen* 「知らせる」は意味的に1語に相当し、ド *tränken* 「飲ませる」/*fällen* 「切り倒す」(←*trinken* 飲む/*fallen* 倒れる)のように、完全に1語の例もある(jan-動詞)。一方、知覚動詞構文は、ド dass sie ihn *kommen sah* 「彼女が彼が[来る]のを[見た]こと」のように、意味的なまとまりに欠けている。ただし、ド [*Kommen sehen*] haben wir die Fluten nicht. 「洪水が来るのを私たちは見なかった(sehen 代替不定詞)」(Pafel 2011: 192)と前域に置けるので、統語的には動詞群をなしていると言える。

ド zu-不定詞句を伴う一部の他動詞も、動詞群としてのまとまりを示すことがある。ド *versuchen* 「～することを試みる」を例に取ってみよう。

(120) ド dass sie [*versucht hat* (=右枠)], [den Kindern ein Märchen *vorzulesen* (=後域)] 彼女が[子供たちに童話を読み聞かせることを]試みたこと

(121) ド dass sie den Kindern ein Märchen [*vorzulesen versucht hat* (=右枠)] 彼女が子供たちに童話を[読み聞かせようとした]こと

zu-不定詞句全体を後域に「枠越え」した(120)は、*versuchen* 「試みる」が他動詞として目的語「～することを」を伴う「2階建て」の埋め込み構造になっている。一方、*vorzulesen* 「読み聞かせる」を母型文の右枠に動詞繰り上げ(verb raising)すれば、(121)のように「平屋」のひとまとまりの動詞群になり、*versuchen* は助動詞「～しようとする」に近づく。

さらに、zu-不定詞句の一部が後域に「枠越え」し、目的語が中域に残る第3構文(third construction)も挙げられる。次の②～④の従属節がその例である(Wöllstein-Leisten 2001: 15)。

- (122) 左枠 [ 中域 ] 右枠 [ 後域 ]
- ト ① weil [er] *versprochen hat* [*den Kindern* ein Märchen *vorzulesen*]
- ② weil [er *den Kindern*] *versprochen hat* [\_\_\_\_\_ ein Märchen *vorzulesen*]
- ③ weil [er *ein Märchen*] *versprochen hat* [den Kindern \_\_\_\_\_ *vorzulesen*]
- ④ weil [er *den Kindern ein Märchen*] *versprochen hat* [\_\_\_\_\_ *vorzulesen*]

なぜなら彼が子供たちに童話を読み聞かせるのを約束したので

話法の助動詞ではどうだろうか。スイスドイツ語チューリヒ方言では、不定詞句全体が完了形で話法の助動詞に後続する語順も普通である。これは動詞繰り上げ以前の段階の似ている(123)(124)。(125)はブラームス作曲の標準ドイツ語による民謡である。オランダ語西フランドル方言でも、類例が見られる (SAND II 2008: 29f.)。

- (123) チュ Si säit, das me **hett sele** [de tokter **la choo**]. (人は me 不定代名詞) 医者を (de tokter) 来させる (la choo, 直訳: ト lassen kommen) べきだったのに (hett sele, 直訳: ト hätte sollen) と (das) 彼女は (si) 言っている (säit) (Baur 1997<sup>11</sup>: 155)
- (124) チュ Zwäi jaar schpöötter simer wider häi, wil myn maa **hät müese** [s gschäft vo sym vatter **übernëe**]. 夫が (myn maa) 仕事を (s gschäft) 父親から (vo sym vatter) 継ぐ (übernëe, ト übernehmen) 必要があった (hät müese) ので (wil), 2年後 (zwäi jaar schpöötter) 再び (wider) 我々は (-mer) 家に戻った (si~häi) (ib. 154)
- (125) ト O Mädchen, O Mädchen, / Du einsames Kind, / Wer hat den Gedanken / Ins Herz dir gezinnt, / Dass ich **solll** [den Garten, / die Rosen nicht **sehn**] ? ああ、お嬢さん、お嬢さん、ひとりぼっちの娘さん、だれがあなたの心にそんな思惑の火をつけたのでしょうか、この私がお庭や<sup>ぼら</sup>薔薇を見てはいけないと  
(ト *Erlaube mir, feins Mädchen*)

5-2. 左枝分かれ型と右枝分かれ型, 上方域と下方域, 中間配列

さて, (123)の標準ドイツ語訳に注目してみよう。

- (126) ド Sie sagt, dass man den Arzt ***hätte kommen lassen sollen***. (人は man 不定代名詞) 医者を来させるべきだったのにと彼女は言っている

この例の  $\text{kommen}_4 \text{lassen}_3 \text{sollen}_2$  「来<sub>4</sub>させる<sub>3</sub>べき<sub>2</sub> (代替不定詞)」は、日本語と同じく、右側の要素が左側の要素を支配する左枝分かれ型 (left branching) の「 $V_4 < V_3 < V_2$ 」の語順を示している。一方、 $\text{hätte}_1 + [\text{kommen}_4 \text{lassen}_3 \text{sollen}_2]$  「[来<sub>4</sub>させる<sub>3</sub>べき<sub>2</sub>] だったのに」では、左側の要素が右側の要素を支配する右枝分かれ型 (right branching) の「 $V_1 > [V_4 < V_3 < V_2]$ 」が混ざっている。ドイツ語教科書では、「副文 (= 従属節) の動詞の語順は日本語と同じ」と説いているが、それは完了形では 2 要素の動詞群に限った場合にすぎない。

一般に動詞群は 4 要素までが普通だが、あえて 5 要素の例を検討してみよう。以下では、動詞の種類は不定詞と過去分詞に限定し、zu-不定詞は考慮外とする。

- (127) 上方域 ( $V_x > V_{x+1}$ ) | 下方域 ( $V_{x+1} < V_x$ )

ド dass er sie hier *hätte*<sub>1</sub> | *stehen*<sub>5</sub> *bleiben*<sub>4</sub> *lassen*<sub>3</sub> *sollen*<sub>2</sub>. 彼が彼女をここに [立った (*stehen*<sub>5</sub>) ままでい (*bleiben*<sub>4</sub>) させる (*lassen*<sub>3</sub>) べきだ (müssen<sub>2</sub> 代替不定詞) たのに (*hätte*<sub>1</sub>)] ということ (dass)

dass er sie hier *hätte*<sub>1</sub> *sollen*<sub>2</sub> | *stehen*<sub>5</sub> *bleiben*<sub>4</sub> *lassen*<sub>3</sub>

dass er sie hier *hätte*<sub>1</sub> *sollen*<sub>2</sub> *lassen*<sub>3</sub> | *stehen*<sub>5</sub> *bleiben*<sub>4</sub>

\*dass er sie hier *hätte*<sub>1</sub> *sollen*<sub>2</sub> *lassen*<sub>3</sub> *bleiben*<sub>4</sub> | *stehen*<sub>5</sub> (下方域 1 要素)

デンマークのゲルマン語学者ベック (Gunnar Bech 1920~1981) は、ドイ

ツ語の右枠の動詞群を下方域 (ド Unterfeld, 「\_\_」) と上方域 (ド Oberfeld, 「\_\_」) に区分した (Bech 1983<sup>2</sup> (1955/57): 62-67)。下方域の動詞群は左分岐型を示し、最下位から順に2つ以上の要素からなり、過去分詞も含まれる (ド kommen<sub>2</sub> konnte<sub>1</sub> 来られた, kennen<sub>2</sub> lernte<sub>1</sub> 知り合いになった, kennen<sub>3</sub> gelernt<sub>2</sub> hat<sub>1</sub> 知り合いになった)。一方、3要素以上になると、右分岐型の上方域が現れる。これはドイツ語では、とくに話法の助動詞の完了形で義務的であり (ド hat<sub>1</sub> | kommen<sub>3</sub> können<sub>2</sub> 代替不定詞 ↔ \*kommen<sub>3</sub> gekonnt<sub>2</sub> hat<sub>1</sub> 来られた), 最上位の定動詞から順に不定詞の随伴を伴う。下方域の動詞は1要素では不可であり、最低2要素を必要とする。

ゲルマン諸語の動詞群は、ドイツ語式のハイブリッド型に限られるわけではない。上方域だけの (標準) オランダ語, 下方域だけの西フリジア語も存在する。まず, (128) に示すように, 西フリジア語の動詞群は日本語と同じく, 一貫した「被支配要素 < 支配要素」の左分岐型 (V<sub>5</sub> < V<sub>4</sub> < V<sub>3</sub> < V<sub>2</sub> < V<sub>1</sub>) を示す。逆に, オランダ語は (129) に示すように, 一貫した「支配要素 > 被支配要素」の右分岐型 (V<sub>1</sub> > V<sub>2</sub> > V<sub>3</sub> > V<sub>4</sub> > V<sub>5</sub>) が標準語の規範であり, 両者は鏡像関係 (mirror image) をなしている。西フリジア語の moatten<sub>2</sub> hat<sub>1</sub> 「する必要があった」では, 第1不定詞 moatte の過去分詞 moatten (ド gemusst) を使い, 代替不定詞は出現しない。一方, オランダ語の heeft<sub>1</sub> moeten<sub>2</sub> 「同上」は逆の語順になり, ドイツ語と同じく代替不定詞 moeten (ド müssen) が現れる。

(128) 西フ dat er se hjir stean<sub>5</sub> bliuwe<sub>4</sub> litte<sub>3</sub> moatten<sub>2</sub> hie<sub>1</sub> 彼が<sup>s</sup> (er) 彼女を (se) ここに (hji) 立った (stean<sub>5</sub>) ままでい (bliuwe<sub>4</sub>) させる (litte<sub>3</sub>) べきだつ (moatten<sub>2</sub> 過去分詞) たのに (hie<sub>1</sub>) という こと (dat)

(129) オ dat hij ze hier had<sub>1</sub> moeten<sub>2</sub> laten<sub>3</sub> blijven<sub>4</sub> staan<sub>5</sub> 彼が<sup>s</sup> (hij) 彼女を (haar) ここに (hier) 立った (staan<sub>5</sub>) ままでい (blijven<sub>4</sub>) させる (laten<sub>3</sub>) べきだつ (moeten<sub>2</sub> 代替不定詞) たのに (had<sub>1</sub>) という こと (dat)

形態的なまとまりが弱いゲルマン諸語の動詞群ではあるが、「右側(=後方)の成分が左側(=前方)の成分を支配する」という語形成での主要部後置の原則が作用して、結束性が強まることがある。これは語内部の形態素(意味を区別する最小単位)の配列に関する原則によるもので、たとえば複合語の性は最も右側(=後方)の成分に従う(ド *der Autobahnring* 環状高速道路 ← das Auto 車 + die Bahn 道路 + der Ring 循環)。下方域はこの原則が関与して、複合動詞に準じたまとまりを作る場合と言える。上方域で代替不定詞が現れるのは、ド *hätte<sub>1</sub> | kommen<sub>3</sub> sollen<sub>2</sub>* 「来る<sub>3</sub> べきだ<sub>2</sub> たのに<sub>1</sub>」のように、支配要素 *hätte<sub>1</sub>* が被支配要素 *sollen<sub>2</sub>* の右側(=後方)にないので、形態表示できないためであると考えられる。

古高ドイツ語では、2要素の動詞群は右分岐型の「 $V_1 > V_2$ 」が優勢だった。中高ドイツ語以降に左分岐型の「 $V_2 < V_1$ 」が増えたのである(Sapp 2011)。3要素以上の例は、中世では稀だった。代替不定詞は13世紀に最初の例があり、それを伴う3要素の語順は、初期新高ドイツ語では「 $V_1 < V_2 < V_3$ 」が約6割、「 $V_1 > V_3 < V_2$ 」が約3割を占めている(Fleischer/Schallert 2011: 179-186)。過去分詞として支配関係を明確に形態表示する完了形で、上述の主要部後置という語内部の形態素配列の原則がはたらき、複合動詞に準じた最小数の2要素を中心に、左分岐型が浸透したと考えられる。右分岐型の「 $V_1 > V_2$ 」(*is<sub>1</sub> gekommen<sub>2</sub>* 来た)が規範的なオランダ語でも、話し言葉では、とくに過去分詞を含む2要素は、ドイツ語(*gekommen<sub>2</sub> ist<sub>1</sub>* 同上)と同じ左分岐型の「 $V_2 < V_1$ 」(*gekommen<sub>2</sub> is<sub>1</sub>* 同上)が好まれる。ドイツ語では、デフォルト形態の不定詞を含む2要素でもこれが一般化した。3要素以上には完全には及ばず、上方域が残ったと考えられる。

事実、(130)に示すように、上方域の形成は、不定詞との共起制限がほとんどない①話法の助動詞では頻繁に起こる。しかし、不定詞の意味的選択制限が狭まり、複合動詞に準じたまとまりが強まるにつれて、少なくなる(Eisenberg et al. 2001: 250)。すなわち、②知覚・使役/許容の助動詞では任意となり、③④⑤の動詞では上方域は現れない。受動態は過去分詞を義務的に伴うので、上方域は現れず、代替不定詞も不在である(ド *gesehen<sub>3</sub>*

worden<sub>2</sub> ist<sub>1</sub> / \*ist<sub>1</sub> | gesehen<sub>3</sub> werden<sub>2</sub> 見られた)。ちなみに、オランダ語ではすべて代替不定詞が可能である (清水 2019b: 245-246)。

- (130) ド ① 話法の助動詞 : hat<sub>1</sub> | arbeiten<sub>3</sub> können<sub>2</sub> / \*arbeiten<sub>3</sub> gekonnt<sub>2</sub>  
hat<sub>1</sub> 働くことができた
- ② 知覚・使役/許容の助動詞 (sehen/hören ~するのを見る/聞く, lassen ~させる/したままにする, など) : hat<sub>1</sub> | arbeiten<sub>3</sub> sehen<sub>2</sub>  
 / arbeiten<sub>3</sub> gesehen<sub>2</sub> hat<sub>1</sub> 働くのを見た, hat<sub>1</sub> | arbeiten<sub>3</sub> lassen<sub>2</sub>  
 / arbeiten<sub>3</sub> gelassen<sub>2</sub> hat<sub>1</sub> 働かせた
- ③ 継続動詞 (bleiben ~したままている, など) : sitzen<sub>3</sub> geblieben<sub>2</sub>  
ist<sub>1</sub> / \*ist<sub>1</sub> | sitzen<sub>3</sub> bleiben<sub>2</sub> すわったままていた
- ④ 運動動詞 (gehen/kommen ~しに行く/来る) : arbeiten<sub>3</sub>  
gegangen<sub>2</sub> ist<sub>1</sub> / \*ist<sub>1</sub> | arbeiten<sub>3</sub> gehen<sub>2</sub> 仕事をしに行った
- ⑤ lernen 「~するのを学ぶ」/lehren 「~するのを教える」/helfen  
 「~するのを手伝う」 : kennen<sub>3</sub> gelernt<sub>2</sub> hat<sub>1</sub> / \*hat<sub>1</sub> | kennen<sub>3</sub>  
lernen<sub>2</sub> 知り合いになった

これに加えて、ドイツ語の話し言葉では、下方域の語彙の意味を持つ要素が強勢を伴って、最下位要素から順に随伴されながら、上方域のさらに前に移る中間配列 (ド Zwischenstellung) が起こる (Pafel 2011: 68)。ここでは、語彙の意味を持つ要素が後続の文法的意味を持つ要素から順に分離し、前置されて際立つことになる。意味の中心を先に伝える効果があると言えるだろう。

- (131) ド ob er sie hier [hätte<sub>1</sub> | stehen<sub>5</sub> bleiben<sub>4</sub> lassen<sub>3</sub> sollen<sub>2</sub>]  
 彼が彼女をここに立った (stehen<sub>5</sub>) ままでい (bleiben<sub>4</sub>) させる  
 (lassen<sub>3</sub>) べきだった (müssen<sub>2</sub>) た (hätte<sub>1</sub>) のかということ (ob)  
 ob er sie hier [stehen<sub>5</sub>] [hätte<sub>1</sub> | bleiben<sub>4</sub> lassen<sub>3</sub> sollen<sub>2</sub>]  
 ob er sie hier [stehen<sub>5</sub> bleiben<sub>4</sub>] [hätte<sub>1</sub> | lassen<sub>3</sub> sollen<sub>2</sub>]

ob er sie hier [stehen<sub>5</sub> bleiben<sub>2</sub> lassen<sub>3</sub>] [hätte<sub>1</sub> | \_\_\_\_\_ sollen<sub>2</sub>]

中間配列の最古の例は、宮廷叙事詩『パルツイヴァール』（ド *Parzival* 1220 年頃）に見られる (132) (Paul 1959<sup>5</sup>: 149)。

- (132) 中高ド nu was ez ouch über des jâres zil daz Gahmuret [gepriset<sub>3</sub>]  
vil [was<sub>1</sub> worden<sub>2</sub>]. ガハムレトが大いに (vil) 称賛  
(gepriset<sub>3</sub>) され (worden<sub>2</sub>) た (was<sub>1</sub>) ときから (daz), 今  
や (nu) また (ouch) 1 年以上の歳月が (über des jâres zil)  
過ぎていた (was ez) (Parzival 57, 29)

オランダ語の話し言葉にもあり, (133)①は規範例, ②が中間配列である。  
③④の語順はフランドル地方で好まれる (Verheyen 2010: 144)。③は上方域  
と下方域の併存に似ており (zal<sub>1</sub> | moeten<sub>2</sub> afgebroken<sub>4</sub> worden<sub>3</sub>), ④は定形  
zal<sub>1</sub>「だろう」に続いて語彙的要素 afgebro-ken<sub>4</sub>「取り壊さ」を先置している  
(zal<sub>1</sub> | [[afgebroken<sub>4</sub>] [moeten<sub>2</sub> worden<sub>3</sub>]])。

- (133) オ Ik ben bang dat het huis ①[zal<sub>1</sub> moeten<sub>2</sub> worden<sub>3</sub> afgebroken<sub>4</sub>].  
②[afgebroken<sub>1</sub> zal<sub>1</sub> moeten<sub>2</sub> worden<sub>3</sub>].  
③[zal<sub>1</sub> moeten<sub>2</sub> afgebroken<sub>4</sub> worden<sub>3</sub>].  
④[zal<sub>1</sub> afgebroken<sub>4</sub> moeten<sub>2</sub> worden<sub>3</sub>].

私は (ik) 家が (het huis) [取り壊さ (afgebroken<sub>4</sub>) れる (worden<sub>3</sub>)  
必要がある (moeten<sub>2</sub>) だろう (= のではないか zal<sub>1</sub>)] と (dat) 心  
配だ (ben bang)

## 6. 「定形性非対称」をめぐって

### 6-1. 西フリジア語の「en+第3不定詞 (命令形不定詞)」

枠構造と「定動詞第2位」による「定形性非対称」の原則には, じつは重

要な反例がある。その1つは、西フリジア語の「en+第3不定詞」または「en+命令形不定詞」であり、IPI-構文 (IPI-construction, IPI=ラ imperativus pro infinitivo) と呼ばれている (清水 2003: 763-772, 2006a: 712-722)。西フ en は語形的に英 and に対応する。これには副詞的な付加詞 (adjunct) としてはたらく「並列型」(134)と、動詞や名詞などの補部の役目を担う「従属型」(135)(136)がある。前者では、話法の助動詞など、話者の主観的感情・評価を表す要素が必要とされる(137)。

- (134) 西フ De polysje soe by him komme kinne {**en helje him op/om him op te heljen**}. 警察が (de polysje) [彼を (him) 連行するために (en helje~op/ om~op te heljen←op/helje) 彼のところに (by him) 来る (komme) かもしれない (soe~kinne)  
(De Waart 1971: 13f. 変更)
- (135) 西フ De polysje komt by him {**\*en helje him op/om him op te heljen**}. 警察が [彼を連行するために] 彼のところに来る (komt 現在形)  
(ib. 4 変更)
- (136) 西フ It is de muoite wurdich [**en lês dit/(om) dit te lêzen**]. [これを (dit) 読むことは (en lês/(om)~te lêzen)] 努力の (de muoite) 価値がある (is wurdich) (De Haan/Weerman 1986: 96)
- (137) 西フ It idee {**en lis de Lauwersmar droech/(om) de Lauwersmar droech te lizzen**} is net alhiel nij. [ラウエルス湖を (de Lauwersmar) 干拓するという (en lis~droech/ (om)~droech te lizzen)] 考えは (it idee) それほど新しくない (is net alhiel nij)  
(De Haan 1987: 26f. 変更)

(134)(135) 「om+te-第2不定詞句」(～するために) の om は、使用が義務的で目的の意味を表す前置詞である。(136)(137) 「(om)+te-第2不定詞句」(～すること) の om は、使用が任意の不定形補文標識 (4-2 末尾参照) であり、形容詞述語 is wurdich 「～の価値がある」の主語と名詞句 it idee 「考



え」の修飾成分になっている。第3不定詞は命令形（西フ helje~op! 連行しなさい/lès! 読みなさい/lis~droech! 干拓しなさい）と同形だが、命令の意味はなく、不定詞の役目を担っている。語形的に英 and に対応する en も並列接続詞とは言えず、不定詞標識のようである。そこで、不定詞句内の不定詞が変則的に第2位の左枠を占めることになり、「定形性非対称」の原理が崩れるのである。

この構文は、オランダ北東部のオランダ語低地ザクセン方言（オ Nedersaksisch）でも観察される（*SAND II* 2008: 38）。中期オランダ語や古フリジア語でも例証されるが（Hoekema 1958: 21-23）、命令形ではなく、不定詞であり、並列型に限られていた。20世紀まで「en+不定詞」と「en+命令形」が併用され、命令形の語形に替わったのである（Hoekstra 1997: 35）。その原因は、不定詞句内で不定詞を先頭に置くのは特殊な語順なので、不定詞と命令形が同形で派生動詞に用いる生産的な「je-動詞」にならって、不定詞の代わりに命令形を援用して、通常の無標の語順に変えた結果と言われている（Van der Meer 1975: 28）。

古フリジア語期の並列型に加えて、従属型が発達した理由は、不定詞から命令形に転換した結果、本来の並列接続詞 en に続く動詞句が先行する動詞句から独立性を獲得し、並列句から従属句に変わったためとされている（Hoekstra 1997: 37）。次の例文を見てみよう。(138)「en+命令形」と(139)「en+第3不定詞」の関連が納得できるだろう。

- (138) 西フ Wy riede dy oan [**en jou do heit in strik**] (en dan jouwe wy him sigaren). 私たちは (wy) 君に (dy) 忠告します (riede~oan) : [それで (en) 君が (do 命令形主語) お父さんに (heit) ネクタイを (in strik) あげなさい (en jou 命令形←jaan 与える)] (そうしたら (dan) 私たちが (wy) 彼に (= お父さんに him) 葉巻を (sigaren) あげるから (jouwe)) (Hoekstra 1997: 41 変更)
- (139) 西フ Wy riede dy oan [**en jou heit in strik**]. 私たちは君に [お父さんにネクタイをあげることを (en jou 第3不定詞)] 忠告します

そもそも定形と不定形には、一義的に峻別できない点があり、動詞の定形性には段階が認められる可能性がある。西フリジア語では、主節の定動詞は「時制」と人称・数の「一致」を示し、第2位を占める典型的な定形である。一方、人称の「一致」だけを示して、第2位に出現するのが同言語の命令形であり、定形としてはやや特殊である。現在形や過去形と違って、命令形は右枠にも現れない。「en+第3不定詞」はさらに特殊であり、「時制」も「一致」も示さず、右枠にも置かれぬ。それでも、並列型では話法の助動詞が必要なように、定形性を帯びることがある。「en+第3不定詞」は、例外的に第2位を占める特殊な不定形と言えよう。

#### 6-2. 西フリジア語の dat-主節、「埋め込み節の定動詞第2位」

「定形性非対称」には、もう1つ重要な反例が挙げられる。西フリジア語の dat-主節がそれである。西フリジア語には2つの接続詞 dat 「～ということ」があり、(140) dat-主節 (定動詞第2位) と (141) dat-従属節 (定動詞末尾) に分かれる。dat-主節は、架橋動詞 (bridge verb) と呼ばれる発言・思考動詞 (例: 西フ *sizze* 言う, *tinke/leauwe* 思う) に導かれた肯定文であり、話法の助動詞を含まない場合に用いる。dat を欠く主節だけでもかまわない(140)。ただし、否定文では dat-主節は使えない(141)。発言の引用的性格が強いと言える。一方、dat-従属節は否定文でもよく ((114) (115) 参照)、動詞の種類にも制限はない。ドイツ語の dass 「～ということ」は従属接続詞であり、dat-従属節だけに対応する(142)。dat-主節にあたるド dass は存在しない。ドイツ語の発言・思考動詞の一覧は Helbig/Buscha (1994<sup>16</sup>: 646f.) 参照。

(140) 西フ Ik leau [**dat do** [dɔ'do:(u)]/Ø **do**] *kinst* dat sizze]. 私は (ik) 君が (do) それを (dat) 言える (*kinst*~*sizze*) と (dat/Ø) 思う (leau←leauwe)

(141) 西フ Ik leau net [**\*dat do** [dɔ'do:(u)]/**\*Ø do**] *kinst* dat sizze]. 私は君

がそれを言えるとは思わない (leau net)

- (142) † Ich glaube nicht, [ $\{^*dass/\emptyset\}$  du *kannst* das sagen/*dass* du das sagen *kannst*]. 同上

西フリジア語の dat-主節は結果節「～なので～だ」/「そこで」でも用い、dat には語彙的意味が認められる。とくに(144)はそうである(清水 2003: 407-414, 2006a: 376-381)。

- (143) 西フ Wy wiene sa benaud,  $\{\{dat/\emptyset\}$  de knibbels *staten* ús *oan/dat* de knibbels ús *oanstaten*}. 私たち (wy) はとても (sa) 怖かった (wiene~bernaud) ので (そのため (dat/∅)) 膝が<sup>s</sup> (de knibbels~ús) 震えた (staten~oan/oanstaten←oan|stjitte)  
(Hoekstra/Tiersma 1994: 524)

- (144) 西フ *Dat* sadwaande *gie* ik op ûndersyk *út*. そこで (dat) そのようなわけで (sadwaande) 私は (ik) 偵察に (op ûndersyk) 出かけた (gie~út←út|gean) (Bosma-Banning 1981<sup>2</sup>: 34)

西フリジア語の dat-主節は「埋め込み節の定動詞第 2 位」(embedded verb-second) と呼ばれ、「定形性非対称」に反している。間接話法に似た発言の引用の性格が強く、この dat は語彙的意味を帯びることもあり(143)(144)、典型的な無標の補文標識から逸脱している。前節で述べた動詞の定形・不定形の区別に関する問題のように、補文標識にも補文を導く役目に段階がありそうである。

架橋動詞による上記の現象は、北ゲルマン語でも観察される<sup>9</sup>。(145)~(149)のデンマーク語の例を検討しよう。基本的な意味は、「イェンス(男名)がこの本を (denne bog) 読まなかった (har ikke læst, 英 has not read) と (at, 英 that) (彼女は (hun) 言っている (siger))」である (Vikner 1995: 67,

<sup>9</sup> アイスランド語では、架橋動詞以外にもこの現象が見られる (Vikner 1995: 65-80)。

Thráinsson 2007: 43)

- デ                    前域                    左枠 [ 中域 ] 右枠                    [ 後域 ]  
 (145)                    Jens                    **har** [..... ikke]                    læst [denne bog].  
 (146)                    Denne bog                    **har** [Jens ikke]                    læst [.....].  
 (147) (Hun siger)                    at/∅ [Jens ikke]                    **har læst** [denne bog].  
 (148) (Hun siger)  
                           at/??∅                    Jens                    **har** [..... ikke]                    læst [denne bog].  
 (149) (Hun siger)  
                           at/\*∅                    denne bog                    **har** [Jens ikke]                    læst [.....].

(145)(146)の主節は、(147)の従属節からVO型枠構造と「定動詞第2位」によって導かれる。ところが、(148)(149)の補文標識at(英 that/ド dass)に続く節は、(145)(146)の主節と同じ語順である。これは2-3で扱った「埋め込み節の話題化」の例である。ドイツ語では、この場合もdat-従属節の語順を示す。しかも、目的語を話題化した(149)では、補文標識atは欠かせず、主語を話題とした(148)も補文標識atがなくては不自然である(Thráinsson 2007: 43)。このように、(148)(149)は西フリジア語のdat-主節に準じて、「埋め込み節の定動詞第2位」を示す変則的なケースなのである。

次のスウェーデン語、ニューノシユク、フェーロー語の例も同様である。たとえば、(150)から補文標識attを除けば、ス **Den boken har** Maria ännu inte läst. 「その本はマリーアはまだ読んでいない」という主節の語順が得られる<sup>10</sup>。以上のように、「定形性非対称」の原則には、2本の重い横槍が控えているのである。

- (150) ス Jag tror [**att den boken har** Maria ännu inte läst]. 私は (jag) そ

<sup>10</sup> 母型動詞(デ siger 言っている)が補文標識句(CP)としての従属節を支配しているとみなす分析(CP-recursion)もある(Vikner 1995: 67, De Haan/Weerman 1986: 86)。

の本は (den boken) マリーアが<sup>s</sup> (Maria) まだ (ännu) 読んでいない (har~inte läst, 英 has~not read) と (att) 思う (tror)

(Faarlund 2019: 241)

- (151) ニ<sub>1</sub> Ho sa [**at neste gong så kunne** ho ikkje komme]. 彼女は (ho) 次回は (neste gong) そういうわけで (så) 来られないだろう (kunne~ikkje komme, 英 could~not come) と (at) 言った (sa)

(ib. 241)

- (152) フ<sub>1</sub> Eg haldi, [**at grind hevur** hann ongantið etið]. 私は (eg) クジラの肉は (grind) 彼は (hann) 一度も (ongantið 否定) 食べたことが<sup>s</sup> (hevur~etið, 英 has~eaten) ないと (at) 思う (haldi)

(Thráinsson et al. 2004: 297)

## 参考文献

- Árnason, Mörður (útg.) (2003<sup>2</sup>) *Íslensk orðabók*. Reykjavík: Edda.
- Baur, Arthur (1997<sup>11</sup>) *Schwyzertüütsch*. Winterthur: Gernsberg.
- Bech, Gunnar (1983<sup>2</sup> (1955/57)) *Studien über das deutsche Verbum infinitum*. Tübingen: Niemeyer.
- Bibel* (1989<sup>2</sup>) Haarlem: Nederlands Bijbelgenootschap/Boxtel: Katholieke Bijbelstichting.
- Bibelen* (1986<sup>3</sup>) Oslo: Bibelselskapets Forlag.
- Bibelen* (1987<sup>4</sup>) Oslo: Bibelselskapets Forlag.
- Bibelen* (1998) København: Det Danske Bibelselskab.
- Bibeln* (1981/82) Stockholm: Svenska Bibelsällskapet.
- Biblia* (1983) Keyptmannahavn: Det Danske Bibelselskab.
- Biblian* (2007) Reykjavík: Hið íslenska biblíufélag.
- Bidese, Ermenegildo (2008) *Die diachronische Syntax des Zimbrischen*. Tübingen: Narr.
- Bijbel: Het Nieuwe Testament* (1926) London: Britsche en buitenlandse Bijbelgenootschap.
- Bosma-Banning, A. (1981<sup>2</sup>) *Büter, brea en griene tsiis. Grammofoanplatekursus Frysk*. Ljouwert: Afûk.
- Brunner, Jean-Jacques (2001) *L'alsacien sans peine*. Chennevières-sur-Marne Cedex: Assimil.
- Clemens, Peter Michael (2008 (1870 完成)) *Die vier Evangelien auf Sylterfriesisch* (Hrsg.

- Hindrik Brouwer). Kil/Kiel: *Estrikken/Ålstråke* 83.
- Cognola, Federica (2013) *Syntactic Variation and Verb Second. A German Dialect in Northern Italy*. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins.
- Dal, Ingerid/Eroms, Werner (2014<sup>4</sup>) *Kurze deutsche Syntax auf historischer Grundlage*. Berlin/Boston: De Gruyter.
- Dåt Evangelium fon Mattäus aw mauringer-frasch* (1955) Flensburg Avis.
- De Haan, G. J. (1987) De *en* + ymperatyf. Yn: Dyk/Hoekstra (útj.). 24-31
- De Haan, Germen/Weerman, Fred (1986) Finiteness and Verb Fronting in Frisian. In: Haider, Hubert/Prinzhorn, Martin (eds.) *Verb Second Phenomena in Germanic Languages*. Dordrecht/Riverton: Foris. 77-110.
- De Haan, Rienk (2006) *Fries voor zelfstudie*. Utrecht: Prisma.
- De Plattduitsche Baibel. (Ostfälisch von Friedrich Wille)* (1997) Einbeck: Scheele-Druck Einbeck.
- De Rooy, J. (1965) *Als-of-dat. Enkele conjuncties in ABN, dialect en Fries*. Assen: Van Gorcum.
- De Waart, A. A. J. (1971) Constructies met *en* + “imperatiefzin” in het moderne Westeralouwerse Fries. In: *Stúdzjekonferinsje Frysk*. Ljouwert. 3-31.
- D’Evangelium nom Matthäus (D’Bibel op Lëtzebuergesch)* 2018 Luxembourg: Äerzbistum.
- Diderichsen, Paul (1976<sup>3</sup> (1946)) *Elementær dansk grammatik*. København: Gyldendal.
- Diderichsen, Paul (1982<sup>5</sup> (1964)) *Essentials of Danish Grammar*. Copenhagen: Akademisk Forlag.
- Die Bibel* (1984) Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft.
- Die Bybel* (2007<sup>16</sup>) Bellville: Bybelgenootskap van Suid-Afrika.
- Donaldson, Bruce C. (1993) *A Grammar of Afrikaans*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Donaldson, Bruce (2008<sup>2</sup>) *Dutch. A Comprehensive Grammar*. London/New York: Routledge.
- Dyk, Siebren/Hoekstra, Jarich (útj.) (1987) *Ta de Fryske syntaksis*. Ljouwert: Fryske Akademy.
- Einarsson, Stefán (1949<sup>2</sup>) *Icelandic*. Baltimore/London: The Johns Hopkins University Press.
- Es Nei Teshtament* (1993) Van Dam Road South Holland: The Bible League.
- Faarlund, Jan Terje (2019) *The Syntax of Mainland Scandinavian*. Oxford: Oxford University Press.
- Fleischer, Wolfgang (1976<sup>4</sup>) *Wortbildung der deutschen Gegenwartssprache*. Leipzig: Bibliographisches Institut.

- Friðjónsson, Jón (1978) *A Course in Modern Icelandic*. Reykjavik: Timaritíð Skák.
- 『言語学大辞典第6巻術語編』（亀井孝/河野六郎/千野栄一編著）（1996）三省堂
- Groot Nieuws Bijbel* (1999) Haarlem/'s-Hertogenbosch: Nederlands Bijbelgenootschap/  
Katholieke Bijbelstichting.
- Helbig, Gerhard/Buscha, Joachim (1994<sup>16</sup>) *Deutsche Grammatik*. Leipzig et al: Langenscheidt/  
Verlag Enzyklopädie.
- Hoekema, Teake (1958) In spesifyk Frysk syntagme. *Us Wurk* 7. 17-23.
- Hoekstra, Jarich (1997) *The Syntax of Infinitives in Frisian*. Ljouwert: Fryske Akademy.
- Hoekstra, Jarich/Tiersma, Peter Meijes (1994) Frisian. In: König/Van der Auwera (eds.)  
505-531.
- König, Ekkehard/Van der Auwera, Johan (eds.) (1994) *The Germanic Languages*.  
London/ New York: Routledge.
- Musan, Renate (2010) *Informationsstruktur*. Heidelberg: Winter.
- 中尾俊夫/児馬 修 (1997<sup>3</sup>) 『歴史的にさぐる現代の英文法』大修館書店
- Pafel, Jürgen (2011) *Einführung in die Syntax*. Weimar: Metzler.
- Paul, Hermann (1959<sup>3</sup>) *Deutsche Grammatik. Bd. IV*. Halle (Saale): Niemeyer.
- Popkema, J. (1979) As alle assen iene wiene. *It Beaken* 41. 259-290.
- Putnam, Michael T. (2011) *Studies on German-Language Islands*. Amsterdam/Philadelphia:  
Benjamins.
- Radford, Andrew/Atkinson, Martin/Britain, David/Clahsen, Harald/Spencer, Andrew  
(2009<sup>2</sup>) *Linguistics. An Introduction*. Cambridge. Cambridge University Press.
- Rijpma, E/Schuringa, R. G. (1978<sup>2b</sup>) *Nederlandse spraakkunst*. Wolters-Noordhoff: Groningen.
- SAND I (Syntactische atlas van de Nederlandse dialecten. Deel 1 /Syntactic Atlas of the  
Dutch Dialects. Volume I + Commentary)*. Barbiers, Sjeff/Bennis, Hans/De Vogelaar,  
Gunther/Devos, Magda/Van der Ham, Margreet (2005) Amsterdam: Amsterdam  
University Press.
- SAND II (Syntactische atlas van de Nederlandse dialecten. Deel II/Syntactic Atlas of the  
Dutch Dialects. Volume II + Commentaar)*. Barbiers, Sjeff/Bennis, Hans/De Vogelaar,  
Gunther/Devos, Magda/Van der Ham, Margreet (2008) Amsterdam: Amsterdam  
University Press.
- Sapp, Christopher D. (2011) *The Verbal Complex in Subordinate Clauses from Medieval to  
Modern German*. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins.
- 関口存男 (1994) 「伯林訛雑考(2)」『関口存男生誕100周年記念著作集 別巻ドイツ語学論  
集』三修社。355-357。（『獨文評論』1934年11月号62-64）
- Shannon, Thomas F. (2000) On the Order of (Pro) nominal Arguments in Dutch and  
German. In: Shannon, Thomas F./Snapper, Johan P. (eds.) *The Berkeley Conference on*

- Dutch Linguistics 1997*. Lanham: University Press of America. 145-196.
- 清水 誠 (2003) 『西フリジア語文法—現代北海ゲルマン語の体系的構造記述とゲルマン語類型論構築のための基礎的研究』(論文博士学位請求論文) 北海道大学
- 清水 誠 (2004) 『現代オランダ語入門』 大学書林
- 清水 誠 (2006) 『西フリジア語文法—現代北海ゲルマン語の体系的構造記述』 北海道大学出版会
- 清水 誠 (2012) 『ゲルマン語入門』 三省堂
- 清水 誠 (2019) 「ドイツ語から見たゲルマン語—名詞の性、格の階層と文法関係」『北海道大学文学研究院紀要』 158. 37-76.
- 清水 誠 (2020) 「ドイツ語から見たゲルマン語(2)—属格と所有表現」『北海道大学文学研究院紀要』 160. 37-96.
- 清水 誠 (2021a) 「ドイツ語から見たゲルマン語(3)—名詞の性の発達と複数形の形成」『北海道大学文学研究院紀要』 162. 35-101.
- 清水 誠 (2021b) 「ドイツ語から見たゲルマン語(4)—冠詞と指示詞」『北海道大学文学研究院紀要』 163. 1-22.
- 清水 誠 (2021c) 「ドイツ語から見たゲルマン語(5)—人称代名詞」『北海道大学文学研究院紀要』 164. 19-41.
- 清水 誠 (2021d) 「ドイツ語から見たゲルマン語(6)—3人称代名詞, 再帰代名詞, 所有代名詞」『北海道大学文学研究院紀要』 165. 31-60.
- 清水 誠 (2022a) 「ドイツ語から見たゲルマン語(7)—2人称代名詞と関連表現」『北海道大学文学研究院紀要』 166. 1-27.
- 清水 誠 (2022b) 「ドイツ語から見たゲルマン語(8)—不定詞と分詞」『北海道大学文学研究院紀要』 167. 1-30.
- 清水 誠 (2022c) 「ドイツ語から見たゲルマン語(9)—動詞の強変化と弱変化, ウムラウト, 人称語尾」『北海道大学文学研究院紀要』 168. 1-35.
- 清水 誠 (2022d) 『ゲルマン語歴史類型論』 北海道大学出版会
- 清水 誠 (2023a) 「ドイツ語から見たゲルマン語(10)—強変化動詞, 過去現在動詞, 母音交替」『北海道大学文学研究院紀要』 169. 1-39.
- 清水 誠 (2023b) 「ドイツ語から見たゲルマン語(11)—過去形と完了形: 時制, アスペクト, 語法」『北海道大学文学研究院紀要』 170. 1-33.
- 清水 誠 (2023c) 「ドイツ語から見たゲルマン語(12)—進行形と不在構文(付: 正誤表)」『北海道大学文学研究院紀要』 171. 1-38.
- 新谷俊裕/Thomas Breck Pedersen/大辺理恵 (2014) 『デンマーク語』 大阪大学出版会
- s Nöi Teschtamänt Züritüütsch* (1997) Zürich: Jordan-Verlag.
- Svensk ordbok A-L (utgiven av Svenska Akademien)* (2009) Stockholm: Norstedts.
- Thies, Heinrich (2011<sup>2</sup>) *Plattdeutsche Grammatik*. Neumünster: Wachholtz.



- Thráinsson, Höskuldur (1994) Icelandic. In: König/Van der Auwera (eds.) 142-189.
- Thráinsson, Höskuldur (2007) *The Syntax of Icelandic*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Thráinsson, Höskuldur/Petersen, Hjalmar P./Jacobsen, Jógvan í Lon/Hansen, Zakaris Svabo (2004) *Faroese*. Tórshavn: Føroya Fróðskaparfelag.
- Van Dam, Jan (1972) *Syntax der deutschen Sprache*. Groningen: Wolters-Noordhoff.
- Van der Meer, Geart (1975) The imperativus pro infinitivo reconsidered. *Us Wurk* 24. 19-34.
- Van der Meer, Willy (2009) *Basiskursus Frysk*. Ljouwert: Afûk.
- Van der Wouden, Ton (2009<sup>3</sup>) Partikels: woordjes die het Nederlands markeren. In: Van der Sijs, Noline/Stroop, Jan/Weerman, Fred (red.) *Wat iedereen van het Nederlands moet weten en waarom*. Amsterdam: Bert Bakker. 119-129.
- Van Ginneken, J. (1939) De vervoeging der onderschikkende voegwoorden en voornaamwoorden. *Onze Taaltuin* 8. 1-11.
- Van Haeringen, C. B. (1962<sup>2</sup> (1939)) Congruerende voegwoorden. (再録 *Neerlandica*. 246-259).
- Van Haeringen, C. B. (1962<sup>2</sup>) *Neerlandica*. Den Haag: Daamen N. V.
- Verheyen, Rob (2010) *Precies ! Lern- und Übungsgrammatik Niederländisch. Band 2*. Hamburg: Buske.
- Vikner, Sten (1995) *Verb Movement and Expletive Subject in the Germanic Languages*. New York/Oxford: Oxford University Press.
- Vikner, Sten (2017<sup>2</sup>) Object Shift in Scandinavian. In: Everaert, Martin/Van Riemsdijk, Henk (eds.) *The Wiley Blackwell Companion to Syntax. Vol. V*. 2784-2843.
- Wöllstein-Leisten, Angelika (2001) *Die Syntax der dritten Konstruktionl*. Tübingen: Stauffenburg.
- Wöllstein, Angelika (2010) *Topologisches Satzmodell*. Heidelberg: Winter.
- Wurmbrand, Susi (2004) West Germanic Verb Clusters. In: Kiss, Katalin É./Van Riemsdijk, Henk (eds.) *Verb Clusters. A Study of Hungarian, German and Dutch*. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins. 43-85.

## 正誤表 2

前稿末尾の正誤表の補足として、誤植・誤記の訂正を記す（「誤>正」の順）。

- \* 「ドイツ語から見たゲルマン語 (6)一人称代名詞, 再帰代名詞, 所有代名詞」『北海道大学文学研究院紀要』165 (2021: 31-60)
- p.36 下から7行目: et/dât > dât (2箇所)
- p.36 下から6行目: et/hat > hat, ham/et > ham (2箇所)

ドイツ語から見たゲルマン語 (13)

- \* 「ドイツ語から見たゲルマン語 (9)―動詞の強変化と弱変化, ウムラウト, 人称語尾」  
『北海道大学文学研究院紀要』168 (2022: 1-35)
  - p. 4 下から7行目: -an の -a > fa- の a
  - p. 6 下から12行目: 第2次ウムラウト > その他の第2次ウムラウト
  - p. 16 上から6行目: hŭp(e)t > hŭp(e)þ
  - p. 16 上から6, 8行目: iç > ic
  - p. 17 上から1行目: i<e/u\_ > i<e/\_u
  - p. 21 上から14行目: bet/malede, malte > bed/malede, malte
- \* 「ドイツ語から見たゲルマン語 (10)―強変化動詞, 過去現在動詞, 母音交替」『北海道大学文学研究院紀要』169 (2023: 1-39)
  - p. 11 下から1行目: ゲ \* ou > ゲ \* au
  - p. 15 上から2行目: nāmun←niman/neman > nāmun←niman
  - p. 16 下から7行目: (←māßen [a:]) > (<māßen [a:])  
下から3行目: (←sāßen [a:]) > (<sāßen [a:])
- \* 「ドイツ語から見たゲルマン語 (11)―過去形と完了形: 時制, アスペクト, 語法」『北海道大学文学研究院紀要』170 (2023: 1-33)
  - p. 17 上から1行目: makiat (h)/-et (h) > makiat (h)/-iet (h)
- \* 「ドイツ語から見たゲルマン語 (12)―進行形と不在構文」『北海道大学文学研究院紀要』171 (2023: 1-38)
  - p. 10 上から2行目: vera > være
  - p. 14 上から2行目: 連結要素 > 接合要素
  - p. 16 下から11行目: 連結要素 > 接合要素
  - p. 31 下から13行目: vara (英 be) > gå (英 go)



# プロクロス『プラトン『国家』注解』第一論文 日本語訳・注

近 藤 智 彦・川 島 彬  
高 橋 勇 真・野 村 拓 矢

[5.1-5] プラトン学派の後継者リュキアのプロクロスによる『プラトン『国家』の講読 (συνανάγνωσις) に先立って、この作品をただしく解釈する者が明確しておくべき論点 (κεφάλαια) は、いかなるものであり、また、いくつあるかについて』

## [序：七つの論点 (5.6-7.4)]

[5.6-25] プラトンの対話篇への序説を — 粗略ではない仕方であつた事柄に取り組む者であれば — どのように構成すべきかを明らかにすることを意図して、私は『国家』という一つの著作を例としてあなた方にも示すことにしたい。あなた方は、以下で述べられる言論にあたかも足跡に従うかのように従い、他の著作の場合にも同じ仕方解釈を追求するならば、こうした事柄に関する方法を捉えることができるだろう<sup>1</sup>。実際、多くの解釈者を

---

### [方針]

- ・本訳の底本としては Kroll を用いた (文献表記については末尾の文献表を参照のこと)。
- ・底本と異なる読みを採用した場合のほか、底本が謄写本と大きく異なる修正案を採用している場合も、注に記した。
- ・訳文中の ( ) はギリシア語の原語を、[ ] は訳者による補足を示す。
- ・注については、本著作に関しては Festugière, Abbate, Baltzly, Finamore & Miles, プロクロス哲学一般に関しては Chlup に負う部分が大きい。特別な場合を除いてどの文献に依拠したのかを一々記すことは控える。

真似して、[当の著作で]論じられている問題を予告するだけで済まし、この[序説という]論題(トポス)を無味乾燥で内容貧弱なものとしてなおざりにすべきではなく、かといって、テキスト読解(λῆξις)に先立つ検討において、目下の作品に何ら関連しないような探求を遠くから寄せ集めるべきでもない——まさにそのように、別のプラトン主義者の人々が、異説を説く人々に反論するために数え切れないほどの膨大な議論を持ち込んでいるのを目にするのだが——。むしろ、目下の著作そのものだけを取り上げ、各著作の意図(πρόθεσις)<sup>2</sup>、ジャンル(εἶδος)、設定(ὑλη)<sup>3</sup>、教説(δόγματα)、総じて当の著

- 
- ・プラトンの著作への参照に際しては、慣例に従いステファヌス版全集のページ数と段落記号(a-e)を付し、段落内の行数表記についてはOxford Classical Texts(『国家』についてはSlings、他の著作についてはBurnetおよびDuke, Hicken, Nicoll, Robinson & Strachan)に従う。
  - ・節と段落の分割、および[ ]内の見出しは、Festugière, Abbate, Baltzly, Finamore & Milesを参考にしつつ独自に付けたものである。
  - ・各段落の冒頭にKroll(全2巻のうち第1巻)の頁数・行数を[5.6-25]のように入れた。
  - ・全体の構成は以下の通りである。

序：七つの論点(5.6-7.4)

I：狙い(7.5-14.14)

正義(7.9-8.6)

最善の国制(8.6-11.4)

解決(11.5-14.14)

II：ジャンル(14.15-16.25)

III：設定(16.26-19.25)

場所(17.1-18.6)

時(18.6-19.23)

登場人物(19.23-25)

以下欠落

<sup>1</sup> 想定読者は、教師の導きに従ってプラトンの著作と共に講読・会読(συνανάγνωσις)するプラトン主義者の人々だと考えられる。

<sup>2</sup> 本論文では「意図(πρόθεσις)」と「狙い(σκοπός)」が交換可能な語として用いられている。

<sup>3</sup> εἶδοςとὑληは「形相」と「質料・素材」の意味で用いられる語であるが、ここでは本論文での用法に従って「ジャンル」と「設定」と訳した。ただし、「形相」と「質料・素材」という意味と無関係ではない。プロクロスは『プラトン『アルキピアデス』注解』

作全体に亘る諸言論の主題 (ὕποθεσις) を突き止めて、共に学ぶ仲間の眼前に提示しなければならない<sup>4</sup>。というのも、そうすることで、対話篇の全体的な意図が読者に明らかになるだろうからである<sup>5</sup>。

[5.25-6.1] さてそれでは、先に述べたように、『国家』を例として[プラトン対話篇序説の]指針 (τύπος) を詳しく説明していこう。私の主張では、『国家』の読解 (ἀνάγνωσις) に先立って、この作品を適切に読もうとする者であれば、次の七点を見定めておく必要がある<sup>6</sup>。

---

10.3-14で、自身の他の著作(おそらく以下注4で言及するプラトン哲学全体への「序説」)を参照しつつ、各対話篇には宇宙全体と類比的に「善」、「知性」、「魂」、「形相」、「基体となる自然本性」ないし「質料・素材」があるとし、そのうち「形相」にあたるものとして措辞・文体を、「質料・素材」にあたるものとして「登場人物、時、一部の人々」によって「設定 (ὕποθεσις)」と呼ばれているものを挙げています。また、プロクロス以降の新プラトン主義者によると考えられる著者不明『プラトン哲学への序説』16-17でも、各対話篇は宇宙と同じように「質料・素材」と「形相」のほか「自然本性」、「魂」、「知性」、「神性」にあたる構成要素を有すると言われた後、「質料・素材」にあたるものとしては本論文と同じく登場人物、時間、場所が、「形相」にあたるものとしては(こちらは本論文とは少し異なるが)文体(莊重体、平明体、その混合)が挙げられている。なお、プロクロスが本論文で「一部のプラトン主義者」に帰している「教示的なもの」と「探求的なもの」とその混合というジャンルの区別([15.18-16.1])は、著者不明『プラトン哲学への序説』同箇所では「自然本性」に比されている。

<sup>4</sup> 古代後期の新プラトン主義者による「序説」には、プラトンおよびアリストテレスの哲学全体への導入として記されたものと、特定の著作への導入として記されたものがある。古代後期の新プラトン主義者は、プラトンとアリストテレスの哲学が調和するという前提のもと、アリストテレスを経てプラトンを学ぶというカリキュラムを設けていたため、こうした「序説」が重要な役割を果たしていたと考えられる。本論文は後者にあたるが、プロクロスには散逸したプラトン哲学全体への「序説」にあたる著作もあったと推測されている。なお、アンモニオス、オリュンピオドロス、エリアス、ピロポノス、シンプリキオスらによる『アリストテレス『カテゴリー論』注解』や著者不明『プラトン哲学への序説』などに見られるように、紀元後五世紀以降の新プラトン主義者の間では、前者については十の論点、後者については六つの論点を取り上げる枠組みが概ね固定化されていたが、この体系化に貢献したのはプロクロスだと推測されている(以上については、Westerink XXV-XLI, Hadot 21-47, Mansfeld 10-57, 中畑 423-449を参照)。ただし、本論文が取り上げる七つの論点(およびこの箇所では挙げられている五項目)

[6.1-4] 第一に、この作品の狙い (σκοπός) はいったい何であるのか<sup>7</sup>。プラトンの対話篇における狙いを見出すことに関する規準を私は何度も論じてきたが、その規準に則ってこの作品の狙いを確立しなければならない<sup>8</sup>。

[6.4-7] 第二に、『国家』の著者はいかなる言論ジャンル (εἶδος) に即して『国家』を構成したのか。この点も、対話篇の[内で見出される]ジャンルについて、どのようなものがあるのかを覚えている者には、明らかになるだろう。

[6.7-12] 第三に、『国家』における言論の設定 (ὄλη) をそれ自体として検討すること。設定に関する考察は、登場人物・場所・時の点においてなされている<sup>9</sup>。実際こうした事柄についても、そのすべてが各対話篇の狙いに合致することが示されなければならないことは、私が述べてきた通りである。

は、各著作の「狙い」を捉えることを第一に置いていること以外、後に固定化された論点とは対応していない。

<sup>5</sup> 写本には文末に τοῖς ἀκουσομένοις (「これから読む人々に」) とあるが、τοῖς ἀκούουσι (「読者に」) と重複するため底本に従って削除する。

<sup>6</sup> 以下の七つの論点のうち、第三の場所・時の設定が論じられた後、登場人物に関する議論が始まったところで写本が途切れている。第四から第六の論点<sup>7</sup>が『国家』という著作に特有の問題であることは、プラトンの他の著作の序説に際しても模範となる指針を提供するという趣旨からすると、やや奇妙に思われる。

<sup>7</sup> プラトンの各対話篇の「狙い」を一つに定めることを重視することは、プラトン『パイドロス』264c2-5 に言及して著作の一貫性を論じることとともに (以下注 14 参照)、新プラトン主義者のイアンプリコス (後 242 年頃-325 年頃) に端を発すると推測されている (納富 13-21)。イアンプリコスによるプラトン注解の断片資料は、Dillon に集められている。

<sup>8</sup> 本論文中には自己の著作への言及が何箇所か見られるが、いずれもプロクロスの散逸した著作 (おそらく注 4 で言及したプラトン哲学全体への「序説」) への言及だと考えられる。著者不明『プラトン哲学への序説』21-23 では、各対話篇の狙いを見出すための規準が論じられている。

<sup>9</sup> 写本のまま読んだが、Festugière は「設定は、登場人物・場所・時代の点において合致していることが [別の修正案: いかに合致しているかが] 考察されなければならない」とテキストを修正する可能性を提案している。

[6.12-16] 第四に、この著作における言論の多くは国制<sup>10</sup>に関するものであるため、諸国制をプラトンの考えに即して——この作品やそれ以外の作品において彼が分類したその仕方にしたがって——分類し、彼が論じているのはいかなる種類の国制についてなのかを述べること。

[6.16-21] 第五に、理（ロゴス）に即した国制のみを<sup>11</sup>、情念（パトス）に即した諸国制から区別しそれ自体として把握した上で、それがただ一つなのか複数あるのかを、もし複数あるのならば、いくつ、いかなるものがあるのかを見てとること。さらには、こうした事柄を必然的な議論を通して確立した上で、それら複数の国制のうちいかなる種類の国制に関して主導的な考察がなされることになるのかを、論理的思考によって把握すること<sup>12</sup>。

[6.21-24] 第六に、さらにその採用された国制そのものについて、それをわれわれは何通りの仕方で見ればよいかとプラトンその人は考えたのか、そして、その国制に関する考察のいかなる方式も彼は精査せずに放置することがなかったかどうかを確認すること<sup>13</sup>。

<sup>10</sup> πολιτεία の訳語については、著作のタイトルとしては伝統的な『国家』を踏襲し、地の文では可能なかぎり「国制」と訳すことにする。

<sup>11</sup> 写本の μόνην を μόνον と修正する底本の読み（「理（ロゴス）のみに即した国制」）には従わず、写本のまま μόνην と読む（底本も II p.472, Addenda では Radermacher による写本のままの読みの擁護を報告しており、それに諸訳も従っている）。

<sup>12</sup> この点に関してプロクロスが散逸箇所でもう論じたのかは不明だが、おそらくは現存箇所中の [9.17-10.17] で論じられている三種の国制（第一の『国家』の国制、第二の『法律』の国制、第三の国制）に関する議論がさらに詳述されたと考えられる。Baltzly, Finamore & Miles はさらに、算術的・幾何学的・調和的の三者にもとづく異なる正義概念に応じて複数の「理に即した」国制があると論じたのではないかと（すなわち、『国家』の国制は幾何学的・調和的の両者にもとづく、『法律』の国制は幾何学的・算術的の両者にもとづく）と推測している（プロクロス『プラトン『ティマイオス』注解』 II 171.19-173.4, 198.17, 317.25 参照）。

<sup>13</sup> Baltzly, Finamore & Miles は、プロクロスが第五論文の第四問題のなかで、ソクラテスが『国家』第三巻の音楽論で音調（ハルモニア）に関する技術的な詳細に踏み込むのを避けたのは真の政治家として教育に資するかがりでもう論を展開したからだと弁護している



[6.24-7.1] 第七に、著作全体に亘る諸教説の一貫性を眼前に提示して、プラトン本人が『パイドロス』のなかで述べているように<sup>14</sup>、相互に組み合わせられた諸部分や手足を〈有する〉一つの生き物の構造のような仕方<sup>15</sup>で、論考の全体が仕上げられていることを示すこと。

[7.1-4] 実際、以下の論述において、論点の数が明らかになるだろうし、これらの論点の織り成す秩序が、すなわち、その論点のすべてがいかにして一つの狙いを目指しているのかが、明白に見てとられることになるだろう。

## [I : 狙い (7.5-14.14)]

[7.5-7.8] では、もしよければ、まずはこれら七点のうち第一に挙げた点を検討するでしょう。それはすなわち、『国家』<sup>16</sup>の狙いそのものを見てとることであった。というのも、多くの人が自分自身の説を激しく擁護しながら論争しているのを、私は耳にしているように思うからである<sup>17</sup>。

---

ことを挙げ、これと同じような仕方<sup>14</sup>で『国家』のなかで一見不完全と見える議論があることを弁護したと推測している。

<sup>14</sup> プラトン『パイドロス』264c2-5。

<sup>15</sup> 底本の apparatus における提案に従い (Festugière と Baltzly, Finamore & Miles も採用), πρός の前に ἔχοντος を挿入して ὡς εἰς ἐνὸς ζώου μέρη τε καὶ μέλη συντεταγμένα (ἔχοντος) πρός ἄλληλα σύστασιν と読む。

<sup>16</sup> 底本では小文字で始まっているが、著作名を指していると解する。

<sup>17</sup> この論争は古くに遡る。前一世紀にプラトンの著作を九つの四部作集にまとめたトラシュッロス (前36年没) は、『国家 (ポリテイア)』または『正義について』、政治的著作 (Πολιτεία ἢ περὶ δικαίου, πολιτικός) という二重のタイトル表記と分類を行ったとされる (ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』3.60)。またプラトン『国家』の主要写本 (A 写本: Parisinus graecus 1807) にも同様の二重のタイトル表記 (πολιτείαὶ vel πολιτείας ἢ περὶ δικαίου) が見出される (なお、A 写本では「ポリテイア」が複数形となっているが、プロク羅斯は古代の大多数の証言と同じく、明らかに単数形として理解している)。

[正義 (7.9-8.6)]

[7.9-10] 正義について[論じること]が[本著作の]意図であると主張している多くの人がいることはたしかであり、彼らによると次の点にわれわれは注目すべきだとされる。

[7.10-14] 第一に、この著作において最初に探求される対象はこのこと、すなわち、何が正しいことであり誰が正しい人か、ということであり、ケパロス、ポレマルコス、トラシユマコスに対する言論はこの点に関してなされた、ということ<sup>18</sup>。

[7.14-24] 第二に、国制に関する検討もまた、正義[という主題]のために、その正義に関する言論の後に導入された——小さな文字のなかでは容易に見ることができないものを、大きな文字のなかでわれわれが眺めることができるように——ということ<sup>19</sup>。実際、アデイマントスとグラウコンのアポリアを出発点として正義に関するいっそう厳密な探求が始められたのであり<sup>20</sup>、ソクラテスが国制に関して語ったのも、その言論にもとづいてその場にいる者たちにいっそう明確に正義[のあり方]を示そうと望んだためであった。したがって、探求されているもののうち、一方のものは何らかのもののために検討すべきだとみなされ、もう一方のものがその検討の目的<sup>21</sup>であるとすれば、かのもの、すなわち、そのために探求対象のうち一方のものが導入された目的の方が、狙いだとみなされなければならないことは必然だろう、と彼らは言うのである。というのも、二者のうち一方が主導的なもの(προηγούμενον)であり、他方が派生的なもの(ἐμπίπτον)だからである。

[7.24-8.4] 第三に、ソクラテス本人もまた、正義について[論じること]が意図だとしばしば強調することで、この点を証言しているということ。そ

<sup>18</sup> プラトン『国家』第一巻。

<sup>19</sup> プラトン『国家』368c8-369b3。

<sup>20</sup> プラトン『国家』第二巻では、グラウコンの問題提起が357a2-362c8、アデイマントスの問題提起が362d1-367e4でなされ、それを受けてソクラテスが議論を展開していく。

<sup>21</sup> 底本の apparatus では τὸ δὲ (τὸ) οὐ ἔνεκα ἐστίν と挿入する可能性が提案されている。修正しない場合でも意味的にはそのように解するのが適当だろう。

れはすなわち、彼が何か別の話題に言及した後で、議論に導かれて正義 [という主題] へと至り、「われわれの探求はこのためにあるのだ」とたびたび結論するときのことや<sup>22</sup>、また最後に、正しい人を最後まで仕上げ、ハデスにおいて割り当てられる報いについて議論した後で、次のように結論づける——あらゆることのために正義を営むべきであり、褒賞を与えてくれる神々の目の前で競っているかのように、しかもそのような生の褒賞は大きいと考えて、生きるべきである、と結論づける——ときのことである<sup>23</sup>。

[8.4-6] 以上の人々は、正義について [論じること] が [本著作の] 狙いであるとみなすようにわれわれを導くような、こうした議論を展開している。

#### [最善の国制 (8.6-11.4)]

[8.6-10] しかし、他の論者は——先の論者に数において引けをとらず、信頼性においても遜色のない仕方著述しているのだが——、国制について [論じること] が [本著作の] 意図であるとみなしている。たとえ正義に関する探求が先になされたのだとしても、主導的なものであるがゆえにそうなのではなく、国制に関する検討に通じる道をいっそう真っ直ぐな仕方<sup>24</sup>もたらすものであるがゆえにそうなのだ、というのである。

[8.10-9.9] この人々はまた、もっとも古くからある [『ポリテイア (国家)』という] タイトルを、証拠として引き合いに出している。実際、アリストテレスはこの論考を要約する際、「『ポリテイア (国家)』を要約する」と述べており<sup>25</sup>、『共同食事』でもこの仕方<sup>26</sup>、『政治学』においても同じように<sup>27</sup>、本

<sup>22</sup> 言葉通りの対応箇所はないが、プラトン『国家』368d8-e1, 588b1-4を指すと考えられる (Kroll はこれに加えて 336e も挙げている)。

<sup>23</sup> プラトン『国家』621c3-d3。

<sup>24</sup> 写本の *εὐρυπρόσωπον* は明らかに毀れており、Festugière に従って *εὐθυπορώτερον* と読み副詞的に解する。底本の *apparatus* は *εὐπορον* (「国制に関する考察に通じる容易な道をもたらす」)、Abbate は *εὐρυπρόσοδον* (「国制に関する考察に通じる幅広い道をもたらす」とする修正を提案している)。

<sup>25</sup> アリストテレス断片 180 Rose。

<sup>26</sup> アリストテレス断片 181 Rose。

著作を名指している。また、テオプラストスも、『法律』その他の多くの箇所において、同様の仕方でも名指している<sup>28</sup>。タイトルが古くからのものである以上、次のことは万人に明らかである[と彼らは考える]。すなわち、プラトンによって事柄(πράγμα)にもとづいてタイトルを付けられた対話篇があり——『アルキビアデス』や『パイドン』のように登場人物にもとづいてタイトルを付けられた対話篇ではなく——、しかも、対話において探求される事柄にもとづいてタイトルを付けられた対話篇があるが——『饗宴』のように場面設定にもとづいてタイトルを付けられた対話篇ではなく——、これらの対話篇はすべて、主導的な問題からそのタイトルを得ているのであって、その検討が主導的ではなく何か別の目的のためになされている問題からそのタイトルを得ているのではない<sup>29</sup>。実際、そのような仕方でも彼は『ソフィスト(ソピステス)』というタイトルを付けたのだが、それはソフィストこそがこの対話篇における検討の課題だったからである。たしかに「ある(ὄν)」について

<sup>27</sup> アリストテレス『政治学』1261a6, 9, 1264b28, 1291a11, 1316a1, 1342a33。他に『弁論術』1406b32。

<sup>28</sup> テオプラストス断片 595 FHS&G。

<sup>29</sup> ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』3.57によると、トラシュッロス(注17参照)がプラトンの各著作に「名前(ὄνομα)にもとづく」タイトルと「事柄(πράγμα)にもとづく」タイトルとの二重のタイトルを与えたとされる。ただし、前者の多くは登場人物の名であるが、『国家(ポリテイア)』または『正義について』の場合、前者を「名前」と呼ぶのは奇妙である(同じことは『法律』などにも当てはまる)。このうち「名前にもとづく」タイトルの多くはプラトン自身に由来すると考えられるが、「事柄にもとづく」タイトルへの言及もトラシュッロス以前にしばしば見られ、例えば、アリストテレスは『メネクセノス』を『葬送演説』(『弁論術』1415b30)と、『饗宴』を『恋についての言論』(『政治学』1262b11)と、「事柄にもとづく」タイトルで呼んでいる(なお、トラシュッロスは『饗宴』の二つ目のタイトルを『善について』としている)。このことから Mansfeld 71-73 は、トラシュッロスが「事柄にもとづく」タイトルの使用例をまとめて一般化を行ったうえで、各著作へ一つずつ「二つ目」のタイトルを与えたという仮説を立てている。著者不明『プラトン哲学序説』18では、プロクロスと類似の仕方でも、登場人物にもとづくタイトルと事柄にもとづくタイトルを区別し、さらに事柄にもとづくタイトルを、『弁明』のように「出来事にもとづく(ἀπὸ τῶν γινόμενων)」ものと『ソフィスト(ソピステス)』のように「探求される事柄にもとづく」ものとに区別している。

も「あらぬ (μη ὄν)」についても極めて多くのことが語られているが、これらのことはソフィストに関する議論へと収斂しているのである。同様に彼は『政治家 (ポリテイコス)』についても、宇宙の回転運動について多くのことを詳述してはいるものの<sup>30</sup>、主導的な探求対象にもとづいてそのタイトルを付けた。こうした事柄が語られたのも政治家 [の探求] のためであるがゆえに、タイトルにはただ「政治家 (ポリテイコス)」だけが採られたのである。したがって、まさにこの論考のタイトル、すなわち『ポリテイア (国家)』というタイトルも、同じようにこれ [国制 (ポリテイア)]こそがこの作品において主導的に探求される事柄であるということを、この上なく明らかに示している——場面設定に関わるのではない事柄にもとづいて付けられたタイトルは、対話篇において主導的に探求される事柄それ自体にもとづいて付けられている以上は。

[9.9-9.16] さて第一に彼らは、以上で述べたように、タイトルに関して次の二つの点を示した。すなわち、[I] 一つは、このタイトルは古くからあるものであって、権威を利用しようとする後世の人々が付け加えた他のタイトルのように捏造されたものではないという点であり<sup>31</sup>、[II] もう一つは、このタイトルは事柄にもとづくもの、しかも場面設定に関わる事柄<sup>32</sup>ではなく主導的な事柄にもとづくものであるという点である（登場人物にもとづくタイトルや、場面設定にもとづくタイトルをわれわれが持ち出すことのないように）。それによって彼らは、この [『ポリテイア (国家)』という] タイトルが、国制 (ポリテイア) について [論じること] が [本著作の] 意図であることの明白な〈証拠〉<sup>33</sup>を提供するものだと考えている。

<sup>30</sup> プラトン『政治家 (ポリテイコス)』268d5-274e3。

<sup>31</sup> プラトン『国家』に古来帰されてきた『正義について』という別のタイトルを念頭に置いたものと考えられる（注17参照）。

<sup>32</sup> 底本の apparatus では περιστατικῶν は毀れている可能性があるとして ἐπεισάκτων（「外から持ち込まれた」）と修正する提案がなされているが、修正は不要だろう。

<sup>33</sup> 底本の apparatus の提案に従い、ἐναργῆ〈πίστιν〉と挿入して読む（諸訳は採用していないが、事実上同じ意味で訳している）。

[9.17-10.17] 第二に、この人々もまた証人としてプラトン自身を挙げている。すなわち、プラトンは『法律』第五巻において明瞭に以下のように述べている<sup>34</sup>。第一の最善の国制とは、妻、子、所有物、金銭といったあらゆるものが完全に共有されている国制のことであり、それは——神々の住まう国制にせよ、自然本性的に神的な存在の住まう国制にせよ<sup>35</sup>——本当に神的な国制の範型となるものである。第二の国制とは、『法律』において彼が[いま]解説していると述べている国制のことであり、それも何らかの仕方では不死性に与っていて、それに先立つ[第一の]国制からかけ離れたものではない<sup>36</sup>。第三の国制とは、それ[第二の国制]の後に詳述することにしよう[とプラトンが述べている]国制のことであり、以上の[第一と第二の]国制と調和するものではあるが<sup>37</sup>、両者に比べるとはるかに劣るものである<sup>37</sup>。した

<sup>34</sup> プラトン『法律』739a1-740b1。現代の多くの解釈者も、この箇所が『国家』の理想国家への何らかの言及がなされていると考える(England I 515, Stalley 92-94, Griffith & Schofield 185-187, 丸橋 160-166)。一つには、同箇所で見られる「友のものは皆のもの(κοινὰ τὰ φίλων)」(739c2-3)という格言は、『国家』で守護者教育について論じられる際にも二度引かれているからである(424a2-3, 449c5)。ただし、Griffith & Schofield *ibid.*, 丸橋 *ibid.*は、同箇所の「第一の国制」の共有制は、統治者の間だけでなく全市民に及ぶものと考えられることから、「第一の国制」は『国家』の理想国家より徹底していると指摘する。これに対して、共有制の徹底度に関する差異は、むしろ「第一の国制」が『国家』の理想国家と異なるものであることを示している、とみなす解釈もある(Bobonich 11-12)。

<sup>35</sup> プラトン『法律』739d6-7「そこに住まわれるのがいく柱かの神々にせよ、神々の子たちにせよ」(森・池田・加来訳)。

<sup>36</sup> プラトン『法律』739e3-4「そしていまわたしたちが試みてきたものは、もしそれが実現すれば、不死なるものにもっとも近く、一つの次善の意味での[別の解釈: 次善のものとしては第一の]国制(ή μία δευτέρως)になるでしょう」(森・池田・加来訳を改変)。

<sup>37</sup> プラトン『法律』738e5 (cf. 739a6-b3)での「第三の国制は、もし神の思し召しがあれば、そのつぎに述べるとしましょう」という約束が実際に果たされた、とプロクロスは考えていた(『プラトン『国家』注解』II 8.15-23, 『プラトン『ティマイオス』注解』I 446.5-8)。著者不明『プラトン哲学への序説』26でも、国制には「矯正に基づくもの」、「前提条件(ヒュポテシス)に基づくもの」、「前提条件なしに成立するもの」という三種類の形態が存在し、それぞれ『書簡集』、『法律』、『国家』で扱われていると論じられている。プロクロスもおそらくプラトンの(偽作の可能性もあるが真作とする説もある)『第七書簡』および『第八書簡』を考えていたのだろう。

がって、もし彼が一方の〔第二の〕国制のことを〔いま〕詳論していると述べ、他方の〔第三の〕国制のことはあらためて論じることになろうと述べているのならば、以下のことはおそらく明らかだろう。すなわち、これらの国制に先立つ〔第一の〕国制のことは、どこかですでに詳述したものとみなしているからこそ、いま論じているのでもなければあらためて論じるつもりもないと述べているということである。では、あらゆるものが共有であり私的なものは何一つないということが、プラトンによってこの論考〔『国家』〕以外のどの著作で宣言されているだろうか。そして、その〔『国家』で語られている〕国制を何より特徴づけるものは、あらゆるものに亘る共有以外の何であろうか。したがってもし彼が、第二の国制を〔いま〕論じており、第三の国制はあらためて詳述することになろうと述べているように、その〔第一の〕国制のことはすでに語ったと述べているのであれば、次のことは万人に明らかだろう。すなわち、まさに同じ仕方で、『法律』の狙いは第二の国制について〔論じること〕であり、目下の論考〔『国家』〕の狙いは第一の国制について〔論じること〕であり、第三の国制を解説することになる著作の狙いは第三の国制について〔論じること〕であるということが。したがって、『法律』の有する狙いが、籤による分配がなされた〔後では〕第一となる国制を教示することであるように<sup>38</sup>、『国家』の有する狙いは、分割されない仕方で一なる善き生にしたがって特徴づけられた——〔互いに〕好意をもって集まり、同一の共棲を営む人間たちからなる——共有を明らかにすることであって、他の諸徳から区別された徳の一種——すなわち、ある人々が言うように、正義——を明らかにすることではない。実際それ〔本著作が明らかにしているもの〕は、正義とともにすべての善を集めたものであって、徳の一種のみに限られてはいないがゆえに、ずっと学知的で究極的だからである。

〔10.17-11.1〕第三に、この説を唱道する人々は以下のように述べている。ソクラテス自身もまた『ティマイオス』において、彼が前日に語った議論を

<sup>38</sup> 注36で引用したプラトン『法律』739e3-4を参照。『法律』のこの箇所では論じられる次善の国制では、第一の国制とは異なり土地と家は分配される。

要約するようにティマイオスとその周りの人々から頼まれた際、前日に彼が論を展開した国制に関するすべての指針を順次取り上げているが<sup>39</sup>、それはまさに、正義に関する検討は国制のために持ち出されたのであり、このこと——すなわち正義について、それそのものをそれ自体に即して、また、それが不正といかなる関係にあるかを、考察すること——は派生的な課題であって、[主要な]課題は最善の国制について、それがいかにして生じるか、いったん生じたならばそれはいかにして、またいかなる営みを通して維持されるのかを、教示することだ、と考えてのことである。というのも、もしそのこと——すなわち国制の成り立ち——が彼が語った議論のもっとも究極の狙い(σκοπιμώτατον τέλος)でなかったのであれば、語られたことを聞き手に再び思い出させるように頼まれた際、国制の成り立ちに関連する議論のみを振り返るということはないからである。

[11.1-11.4] したがって、以上のすべての点を通して、『法律』の狙いが法律の教示であるのと同じように、『国家』の狙いが最善の国制の教示以外の何ものでもないことは明らかである。

#### [解決 (11.5-14.14)]

[11.5-12.2] さて、以上のような議論をこれら両陣営の人々が展開しているが、私たちは両者の議論を受け入れて[次のように考える]。すなわち、これらの人々は真実のところでは意見を異にしていなかったのであって、むしろ、国制と真の意味での正義について[論じること]が[本著作の]意図なのである。ただしそれは、狙いが二つあるとみなしてのことではなく(というのも、そのようなことはありえないからである。少なくとも、言論に何らかの有益性が存するかぎりその言論は生き物に類似しているのだから、一つの狙いを有していなければならない——ちょうど生き物の全体がすべての部分の点で一つの斉合性に即して組み合わせられているように<sup>40</sup>)、むしろ、これら二

<sup>39</sup> プラトン『ティマイオス』17b5-19b2。

<sup>40</sup> 注7, 14参照。



つのものが互いに同じものだともみなしてのことである。というのも、一個人の魂においては正義にあたるものが、善く統治されたポリスにおいてはそのような [正しい] 国制にあたるものに他ならないからである。実際、国制における三種族は魂の三部分と類比関係にある。すなわち、守護者の種族は思案にたずさわるものとして理知に対応し、補助者の種族は防衛のために戦うものとして気概に対応し、労働者の種族 (θητικόν) は自然的な必要を満たすものとして欲望的部分に対応しているのである。そこで、もしそれぞれの [種族の] 人がその生きるところのもの [その生き方] そのものであるならば、守護者は理知、補助者は気概、労働者は欲望の一種であり、その結果、すべての [種族の] 人々に亘る国制が — それぞれの [種族の] 人が自分のことを為し [自分の役目を果たし]、ある者は労働者にふさわしく、ある者は補助者にふさわしく、ある者は守護者にふさわしく (すなわち、自然的、防衛的、知性的に) 生きることにより — 〈正義である〉ことになる<sup>41</sup>。というのも、このこと — すなわち、ポリスを秩序づける性向と、家を秩序づける性向と、一個人を秩序づける性向は一つであるということ — もまた、プラトンの見解だからである。もしそうであるならば、われわれの各々は正義によって秩序づけられるかぎりで「ポリス的 (市民的) に (πολιτικῶς)」生きることになり、ポリスは最善の国制に即して秩序づけられるかぎりで「正しく (δικαίως)」生きることになるのである。そして、彼が『法律』において述べているように<sup>42</sup>、もしポリスにおける民衆が各人における欲望的部分にあたり、[ポリスにおける] 思案にたずさわる [種族] が [各人における] 理知であるならば、彼の考えによれば、正義は魂の国制であり、最善の国制はポリスの正義であることになるだろう。

[12.2-12.9] もし以上のことが真実であるならば、正義について教える者は、それを不完全な仕方では教えるのでないかぎり、あらゆる所に見出される

<sup>41</sup> 底本に従い写本にない δικαιοσύνη を補う。

<sup>42</sup> プラトン『法律』689b1-2。ただし、『法律』のこの箇所ではアテナイからの客人は、快苦を感じる魂の部分が民衆に対応すると述べているだけである。

正義を視野に入れて、国制について教えることになるし、そしてまた、真つ当な国制について論じる者は、一部の国制ではなくそのすべてを視野に入れるかぎり、一個人の内なる国制であるところの正義——すなわち、われわれの内なる民衆を、われわれの内なる補助的部分を通して、われわれの内なる守護的部分の判断に即して、統御している正義——についても、必ずや語ることになるだろう。

[12.9-19] プラトンもまたこうした事柄について以上の見解をもっているということを、われわれは以下の点に留意することで把握できるだろう。すなわち、正義に関する探求から国制に関する議論へと移行する際、彼はいかなる意味でこの移行のことを、自然本性的に相異なる別の事柄への移行としてではなく、小さな文字からより大きくいっそう明瞭な——ただし同じものごとを表している——文字への移行として述べているのかという点である<sup>43</sup>。しかるに、両者の質料・素材は小さな文字と大きな文字のそれが異なるように異なっているが、その形相は二つの文字のそれが同じように同じである。よって、最善の国制の形相とポリス的(市民的)な正義の形相とでは<sup>44</sup>、その基体の量の点においてのみ差異があるのであって、両者が有している本質存在(οὐσία)は一つなのである。

[12.19-13.20] よって、彼がわれわれの各々に対して「自分自身の内なる国制へと目を向ける」ようにと、まさにこの文言を用いて語り<sup>45</sup>、また、その[自分自身の内なる国制の]支配を<sup>46</sup>、金銭を愛する部分ではなく最善の部分

<sup>43</sup> プラトン『国家』368c8-369b3。注19参照。

<sup>44</sup> FestugièreとBaltzly, Finamore & Milesは、「(魂における)最善の国制の形相とポリスにおける正義の形相」と補って訳し、前者を一個人の魂のレベル、後者をポリスのレベルだと解している。たしかにプラトン『国家』に倣った一個人の魂の「内なる国制」への言及は見られるものの、「ポリス的(市民的)(πολιτική)」という語はこの前後で一貫して一個人の魂にそなわる徳を形容する際に用いられているため、むしろ前者を一般的な意味での「最善の国制」、後者を一個人の魂にそなわる「ポリス的(市民的)な徳としての正義」ととる方が自然だろう。

<sup>45</sup> プラトン『国家』591e1。

<sup>46</sup> あるいはFestugièreとAbbateのように「その[魂の]支配」と補うことも可能。

へと委ねるようにと語っているのも（これらのことは第九巻に書かれている）、以上のことのゆえである。さらにまた、各人の内なる正義は国制であると彼が論じているのをわれわれは見出す、これも以上の議論に即してのことである。実際、別の著作でわれわれが区別したように<sup>47</sup>、節制は倫理的な徳をとりわけ特徴づけるものであり（教育を受けている者にとって節制を保つことよりも相応しいものは他にないから）、正義はポリス的（市民的）な徳をとりわけ特徴づけるものであり（他の人々を秩序づけるためには各人に値するものを画定する徳がとりわけ必要となるから）、勇氣は浄化的な徳をとりわけ特徴づけるものであり（われわれの内に真なる敵として潜んでいる諸情念によって傷つけられないこと（ἀτρωτον）は勇氣の特性だから）、知慮（φρόνησις）<sup>48</sup>は観想的な徳をとりわけ特徴づけるものである（有るものども（τὰ ὄντα）についてしかるべき仕方では認識する（φρονεῖν）ことは観想の固有性だから）。こうして、正義がポリス的（市民的）な徳を特徴づけるのだとすれば、正義が各々の魂の国制であることが、そして、真の意味での国制がポリス全体の正義であることが、どうして必然でないことがあろうか。そこでわれわれは、[本著作に]二つの狙いがあるとは言わず、ポリス的（市民的）な正義について[論じる]という狙いと最善の国制について[論じる]という狙いは一つであると言うことにしよう。また彼は、一個人の内なる国制としての正義から探求を始め、多数者の内なる正義としての最善の国制に関する探求に移行したのだ、と言うことにしよう。それはちょうど、プラトン自身が述べているように<sup>49</sup>、小さな文字から大きな文字に移行しているような

<sup>47</sup> 対応する議論はプロクロスの現存著作中には見当たらないが、新プラトン主義による徳の段階説にもとづいている。ポルピュリオス『センチティアエ』32は、プロティノス『エンネアデス』I.2「徳について」の議論を発展させ、「ポリス的（市民的）な徳」、「浄化的な徳」、「観想的な徳」、「典型的な徳」という四段階の区別を導入した。さらにイアンプリコスら後の新プラトン主義者は、「神官的（ιερατική）」もしくは「神術衛的」な徳を加え、また「ポリス的（市民的）な徳」の下位にも「自然的な徳」と「倫理的な徳」を加えている（ダマスキオス『プラトン『パイドン』注解』I 138-158）。

<sup>48</sup> アリストテレス的な実践知の意味ではなく、プラトンの「知恵（σοφία）」「思惟（νοῦς）」と近い意味で用いられている。

ものであるが<sup>50</sup>、基体の点での差異によって形相が入れ替わることはなく、異なる基体の内で同一のものであり続けている。したがってその移行は、国制から国制への、すなわち、一個人の内で見とられる国制から多数者の内で見とられる国制への移行でもあれば、正義から正義への、すなわち、縮約された正義からいっそう明白な正義への移行でもあるのである。

[13.21-14.4] また、[正義と国制は] 一方が主導的に探求される対象であり、他方が派生的に探求される対象である、というわけではない。というのも、「主導的である」とか「派生的である」ということは、二つのものに関して言われるのが本当であるが、これら [正義と国制] は二つではなく一つだとわれわれは主張するからである。よって、諸々の国制の変遷に関する議論においても、彼はそれぞれの国制を一人の人間の場合とポリス全体の場合とに即して観察しているが、これもそのためである<sup>51</sup>。すなわち、名誉支配制的な人間と名誉支配制的なポリスとを検討し、ついで寡頭制的な人間と寡頭制的なポリスとを、民主制的な人間と民主制的なポリスとを、そして僭主独裁制的な人間と僭主独裁制的なポリスとを検討しているのである。彼は、正義そのものと究極の不正に関して下したのと同じ評価を、優秀者支配制的な国制と僭主独裁制的な国制とに関して下しているが、これは、それらは互いに異なるところがまったくなく、一個人の内なる正義はポリスにおける優秀者支配制であり、[一個人の内なる] 究極の不正はポリスにおける僭主独裁制である、と考えてのことである。

[14.4-12] よってわれわれは、この論考の [『ポリテイア (国家)』という] タイトルも、正義に関する探求に調和したものであると主張することにしよう。なぜなら、このタイトルはまさにそのこと、すなわち、ただしい理に即して (κατὰ τὸν λόγον τὸν ὀρθόν) 生きている魂の国制であるところの正義を意味しているのだから、と。たとえプラトンが、この論考を「正義」という

<sup>49</sup> 注19参照。

<sup>50</sup> 底本は δὲ を削除しているが、写本のまま読んで問題はない。

<sup>51</sup> 『国家』第八・九巻 (特に 544d5-c6)。

名前では呼ばず、「国制（ポリテイア）」という名前と呼んだにしても（別の著作を「法律」という名前と呼んだように）、思うに、このことは驚くにあたらない。というのも、タイトルはいつそうよく知られているものにもとづいて付けられるべきだが、プラトン自身も語ったように<sup>52</sup>、「国制（ポリテイア）」という名前の方が「正義」という名前よりもいつそうよく知られているからである。

[14.13-14] さて、以上でようやく結論に達し、『国家』という著作の狙いをわれわれは完全に押し押さえた、と言うことにしよう。

## [II：ジャンル（14.15-16.25）]

[14.15-15.18] 以上の論点に続く第二の論点は、著者はいかなる言論ジャンルに即してこの論考を構成したのか、ということであった。思うに、この論点については、多くのことを私が語る必要はなく、ただ次のことを思い起こせばよいだろう。すなわち、プラトン自身もまたこの著作のなかで、語り方（λέξις）には三つのジャンルがあると言っている、ということである<sup>53</sup>。彼が論じるには、一つ目はもっぱら演劇的で模倣的なジャンルであり、これは喜劇と悲劇に属する。二つ目は叙述的で非模倣的なジャンルであり、これは、ディテュランボスを書く者や過去の出来事の歴史を書く者が、登場人物に語らせることなく著述する際に従う種類のものである。三つ目は両者が混合されたジャンルであり、例えばホメロスの詩作——ある部分は出来事の叙述によって、別の部分は登場人物の模倣によって彩られたもの——がこの種類に

<sup>52</sup> プラトン『国家』368e7-369a1 および545b3-4にあたと考えられるが、同箇所では、ポリスというより大きなもの内にある正義の方が見てとりやすいと言われているだけであり、「国家（国制）」の方が「正義」よりもいつそうよく知られているとは言われていない。

<sup>53</sup> プラトン『国家』392c7-398b9。プラトンは「模倣（真似）（μίμησις）」（登場人物の台詞を語ること）を伴わない叙述を「単純な叙述（ἀπλή διήγησις）」と呼んでいるが、プロクロスはこれに ἀφηγηματικόν（「叙述的」）、ἀφήγησις（「叙述」）という別の語を当てている。

あたる。プラトンは以上の三つのジャンルを区別しているのだが、目下の論考は混合された言論ジャンルに帰すべきであろう。この著作は、ある事柄については出来事 (ἔργα) として語っており、また別の事柄については[登場人物の] 台詞 (λόγοι) として語っているからである。すなわち、一方で、出来事 (ἔργα) においては、叙述のみを提供している(なお、叙述が要する特質は次の二点、すなわち、登場人物と出来事が明確に描き分けられていること (εὐκρίνεια) と、表現 (παράστασις) にあたって正確であること (ἀκρίβεια) とがある)。例えば、[ソクラテスは] ペイライエウスに下って行き、女神に祈りを捧げ、祭を見物し、町の人の行列と外国人の行列を歓迎し<sup>54</sup>、帰宅しようとしたのだが、再び引き返してポレマルコスの家を訪問し、ケパロスと、ケパロスと共にいる人々に会った、ということや、その他この会合の情報を含む同種のさまざまな事柄が、これにあたる。他方で、それぞれの人物の台詞においては——ある場合には老人のように話す者を、ある場合には物語を用いた仕方で話す者を<sup>55</sup>、ある場合にはソフィストのように話す者を[模倣するというように]——この上なく正確な模倣を行い、それぞれの登場人物に対してその人に相応しい仕方で知 (γνώσις) と生 (ζωή) を割り当てている<sup>56</sup>。というのも、こうした事柄において適切さ (πρέπον) を保つことが、もっとも完

<sup>54</sup> トラキアの月の女神ペンデイスを讃える祭のことであり、当時交易のため多数のトラキア人が居留していた港町ペイライエウスで行われ、日中にはアテナイの人々とトラキアの人々との双方による行列が、夜には松明を手にもった騎手による乗馬競争が執り行われた。

<sup>55</sup> Festugière の言うように、「ギュゲスの指輪」の物語を語るグラウコンや (359c7-360d7、特に 359d6 「物語を語る (μυθολογοῦσιν)」)、「洞窟の比喩」(514a1-521b11) や「エルの神話」(614b2-621b7、特に 621b8 「物語 (μῦθος) は救われた」) を語るソクラテス自身のことか。なお、μυθοειδῶς (「神話を用いた仕方で」) は底本も採用するパーゼル版 (b) の読みであり、写本の読みは θυμοειδῶς (「気概に満ちた仕方で」) である。後者の場合には、プラトン『国家』第一巻で、「老人のように話す」ケパロスの後に、「ソフィストのように話す」トラシユマコスに先立って対話相手となるポレマルコスを指しているのとれるかもしれない。

<sup>56</sup> 「知 (γνώσις)」と「生 (ζωή)」という対は、第五論文 (53.10-16) でも詩作による模倣のあり方を論じる文脈で言及される。

壁な模倣のなすことだからである。それはちょうど劇の場合でも、登場人物が何かを語る際、使用人と自由人との間、女性と男性との間で、それぞれ異なる仕方では発言するように模倣しなければならないのと同じことである。というのも、それぞれの人を模倣する者は、それぞれの自然本性（気質）、年齢、運不運、生業、地位に相応しい言葉を割り当てなければならないからである。

[15.18-16.1]ともあれ、この論考は混合された言論ジャンルに帰すべきである。さらに、もしわれわれが、一部のプラトン主義者がしているような仕方では、ジャンルを教示的なもの（*ὀφηγητικόν*）、探求的なもの（*ζητητικόν*）、その両者が混合されたものへと分類するとしても<sup>57</sup>、やはりわれわれはそのなかから混合されたジャンルを選び出し、『国家』をそこに帰することになるだろう。というのも、この作品のなかには多くの探求的な言論がある一方で、ソクラテスが最善のポリスの解体をムーサの言葉を通して教示したり<sup>58</sup>、ハデスにおける情景をエルの言葉を通して教示したりする箇所のように<sup>59</sup>、教示的な言論もあるからである。そしておそらく、混合された言論ジャンルは、国制に関する言論にとって適切でもあろう。国制の内には、ちょうどあらゆる種類の生の集合があるように、あらゆる種類の行為や言論の集合があるからである。

[16.2-25] 実際、以下の点もまた粗略ではない仕方で見しておく必要がある。すなわち、この国制は三度にわたって語られているが<sup>60</sup>——ペイライエウス

<sup>57</sup> デイオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』3.49、アルピノス『プラトン序説』3でも「教示的」と「探求的」の二種類への対話篇の分類が紹介されている。また、デイオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』3.50では、これとは異なる分類として、本論文ですでに取り上げられた分類と類似した、「演劇的（*δραματικός*）」、「叙述的（*διηγηματικός*）」、その混合という三種類への分類が紹介されている。

<sup>58</sup> プラトン『国家』545d7-547c5。なお、この難解な「ムーサの言葉」の解釈が、プロクロス『プラトン『国家』注解』の長大な第十三論文で取り上げられている。

<sup>59</sup> プラトン『国家』614b2-621b7。「エルの物語」の解釈は、プロクロス『プラトン『国家』注解』のなかでもっとも長い第十六論文で取り上げられている。

<sup>60</sup> プラトン『国家』は、前日にペイライエウスのポレマルコス邸で行われた対話（プロクロスの言う「第一」の会合）を、アテナイに戻ったソクラテス本人が報告する（「第二」の会合）という形をとっている（327a1-328c4）。さらに、プラトン『ティマイオス』の導



において争論的な仕方でも語られ、その翌々日にティマイオスに対する説明のなかで登場人物なしの要約的な仕方でも語られ、その中間の日に叙述的な仕方でも語られる（その叙述は登場人物や出来事を伴っているが、その前日のものよりも秩序だっている）、というように——、第一のものも第三のものも、中間のものほどには国制に関する議論に適合しないと考えられたという点である。というのも、第一のものはまだ情念と戦っている魂の生を模倣しており、第三のものは完全に観想へと引き上げられ、その戦いの記憶を脱ぎ捨てた魂の生を模倣しているが、両者の中間のものは、すでに平静になっているとはいえ、[魂の内なる]非理性的な諸要素の大群を抑えつけたときの戦いのことを覚えている魂の生を模倣しているからである。したがって、プラトンがこの中間の会合を国制に関する議論にふさわしいとみなしたのはもっともなのである。というのも、ポリス的（市民的）な生はそれら[非理性的な諸要素]を治療するもの（治療法）であり、われわれの内なる理を集中させることで、観想を目的とするからである。そのような理のみが<sup>61</sup>、その集中したあり方において、いかにして自身よりも後のもの[下位の諸要素]を秩序づけたの

---

入部（17a1-19b2）では、前日にソクラテスがティマイオス、ヘルモクラテス、クリティアス、無名の人物の四名を相手に語ったとされる国制に関する議論の要点を、ソクラテス本人が無名の人物を除くティマイオスら三名を相手に振り返って語っている。その内容が『国家』の一部（特に第二～五巻）と大きく重なることから、『国家』のなかでソクラテスが前日の対話を報告している相手（すなわち「第二」の会合の相手）を、ティマイオスら四名とする解釈が生じる（その場合、『ティマイオス』における対話が「第三」の会合となる）。プロクロスはこの解釈を採用しているが（『プラトン『ティマイオス』注解』I8.30-9.12, 28.16-20）、現代のプラトン研究者の多くはそのような解釈に留保を付している。『国家』が言及するベンデイス祭と『ティマイオス』が言及するパンアテナイア祭とが実際には異なる時期に行われていたと推測されること（詳しくは注76）、『ティマイオス』で報告される前日の議論が『国家』の一部分にしか対応していないことが、その主な理由である（種山213-215「補注N」参照）。

<sup>61</sup> 底本の apparatus では  $\mu\acute{o}\nu\omicron\varsigma$  を  $\mu\acute{\epsilon}\nu\omega\nu$  とする修正が提案されている（「その理は留まることで」）。ただし、Festugière が言うように、すぐ後で「自分自身の内なる国制を確立した者のみ（ $\mu\acute{o}\nu\omicron\varsigma$ ）」と言われているのに対応していると考えられる。すなわち、「理が魂の下位の諸要素を秩序づけることができたときにのみ、宇宙とその製作者（デミウルゴス）を観想することができる」と述べている。



かを総覧的な仕方では知るのであり、その上で「[万有] 全体の観想に向けて — その「[万有] 全体においてある国制と、宇宙のただ一人の政治家を見てとるために — それ自身を展開するのである<sup>62</sup>。そして事実、この「各人の内なる」最善の国制の範型が天においてあるのならば<sup>63</sup>、天の製作者（デミウルゴス）こそが最善の政治家であり、自分自身の内なる国制を確立した者のみがその天の製作者（デミウルゴス）を観想するだろう。以上で私は、言論ジャンルを十分に明らかにしたと思う。

### 【III：設定（16.26-19.25）】

【16.26-17.1】目下の課題のうち第三のものは、論考の設定を見てとることであった。それは、登場人物・時・場所という三つの点において見出される。そこで、先に述べた事柄に続く仕方では、これらの点を論じることにしよう。

#### 【場所（17.1-18.6）】

【17.1-18.6】場所については、第一の会合の場所がペイライエウスであるように、第二、第三の会合の場所はポリスである。次のことはおそらくプラトンの読者には明らかだろう。すなわち、海沿いの場所は騒々しく多彩な生に満ちているのに対して、海から遠いポリスはその分だけそのような悪から免れている（清浄である）のが必然だということである<sup>64</sup>。そして、もしポリ

<sup>62</sup> 難解な箇所であるが、新プラトン主義における徳の段階についての考え方が背景にあると考えられる（注47参照）。すなわち、ポリス的（市民的）な徳は魂の下位の非理性的な部分を秩序づけることで情念の抑制（μετριοπάθεια）をもたらし、さらに浄化的な徳は魂を身体からできるだけ切り離し情念の消滅（ἀπάθεια）をもたらすことで観想（ないしさらに上位の徳への上昇）を可能にするという考え方である。また、「集中（συναίρειν, συναίρεισις）」、「総覧的（συνοπτικῶς）」など、プラトンによる哲学的問答法（διαλεκτική）の説明に見られる語が用いられている（それぞれ『パイドロス』249c1, 『国家』537c2, 7）。

<sup>63</sup> プラトン『国家』592b1-2。

<sup>64</sup> プラトン『法律』705a2-7。

スが自分と同じ性格をもつ神々に属しているのであれば——そうした神々にポリスは捧げられているのだが、それはもっとも知慮ある魂を受け入れるのに適しているからである。このことはプラトン自身が女神アテナへの土地の割り当てに関してあらためて述べている通りだが、その割り当てられた土地を女神が選んだのは、とりわけそれが女神にもっとも似た人間を生み出すだろう（*ἄνδρας οἴσοντα προσφερεστάτους αὐτῇ*）とみなしてのことであった<sup>65</sup>——、そうであればおそらくなおさら、秩序、賢慮ある生、理が、そのような性格をもつポリスに相応しいものとなるだろうということは明らかである。もしプラトンが両方の場所について以上の見解をもっていたならば、われわれは以下のように述べても不適當なことを論じたことにはならないだろう。すなわち、一方の場所〔海沿いのペイライエウス〕は、第一の会合——ここでは当然、正義に関する、またこう言った方がよければ、国制に関する議論が、騒乱を欠くこともソフィスト的な争論を欠くこともなかった（ソクラテスが正義のために多くの頭をもつソフィスト的な生に対して戦ったのだから<sup>66</sup>）——にもっとも相応しいのに対して、もう一方の場所〔海から遠い中心市アテナイ〕は、騒乱のない状態で、哲学に適した静寂とともに自分自身へと引きこもり、自分と同類のものと共にありながらなされる観想——かつては騒乱のなかで非常に苦勞して観たものと対象を同じくする観想——にもっとも相応しい、と。そしておそらく、一方の場所は生成に適合しており、も

<sup>65</sup> 底本や諸訳が参照しているプラトン『クリティアス』109c6-d2では、ヘパイストスとアテナの両神が「もともと徳や知慮に相応しく適合した土地」であったアテナイの地を割り当てとして受け取り、そこに善い人々を住ませたと語られている。しかし、この箇所と表現がより近いのはプラトン『ティマイオス』24c4-d3であり、女神がアテナイという場所を選んだのは、そこが「もっとも知慮ある（*φρονιμωτάτους*）」人々を生み、「女神にもっとも似た人間を生むだろう場所（*τὸν προσφερεστάτους αὐτῇ μέλλοντα οἴσειν τόπον ἄνδρας*）」だと考えたからだとして論じられている。

<sup>66</sup> プラトン『ソフィスト（ソピステス）』240c5に「多くの頭をもつソフィスト」という表現が見られる。また、プラトン『国家』588c7-589b6でも、魂の非理性的な諸部分が多く、頭をもつ怪物に喩えられている。ここでの「ソフィスト的な争論」とは、具体的には特にプラトン『国家』第一巻でのトラシマコスとの対話を指すか。

う一方の場所は生成から免れた（清浄で）アイテールのなものに適合しているだろう——と『パイドン』におけるソクラテスなら述べるだろう<sup>67</sup>。実際、生成は「塩辛い」生に満ち、さらには「嵐」にも、魂を沈めてしまう「三つの大浪」にも満たされているため、魂がたとえ理に即して生きるとしても、その生は騒乱のないものではない<sup>68</sup>。そしてもう一方のかの場所は、清浄で「禍を免れた（ἀπήμων）」「回遊（περίοδος）」をすでに達成している魂<sup>69</sup>——たとえば、生成における動揺と、この〔生成の〕場所において戦った闘争とを、いまだに覚えているとはいえ——に属しているのである。

[時 (18.6-19.23)]

[18.6-19.2] 場所については以上の通りであるが、プラトンがそれぞれの会合を割り当てた時（καιρός）——ペイライエウスでの会合はベンディス祭に、町〔中心市アテナイ〕での会合はパンアテナイア祭に、それぞれ割り当てたのだが——もまた、場所と調和しているのを見てとることができる<sup>70</sup>。いやむろん、ベンディス祭はトラキア人の慣わしにしたがってアルテミスを祀るためのものであり、「ベンディス」というこの名がトラキアの言葉であることをわれわれは知っていよう。トラキアの神学者<sup>71</sup>もそのように、セレネ

<sup>67</sup> プラトン『パイドン』の末尾でソクラテスが物語る真の「大地」の描写（108c5-114c9）への言及だと考えられる（特に109b7-c2, 111a7-b2）。

<sup>68</sup> プラトン『法律』705a3-4では、土地に隣接した海は「塩辛く（ἀλμυρόν）苦い隣人」だと言われている（アルクマン断片108 Page）。「三つの大浪」という表現は、プラトン『国家』472a4でソクラテスによる理想国の提案に対する挑戦について用いられている。「嵐（ζάλη）」という表現は、プラトン『国家』497d7および『ティマイオス』43c3によるか。

<sup>69</sup> プラトン『パイドロス』のなかで魂の転生の運命が語られている「アドラスティアの掟」では、その冒頭で「いかなる魂も、神の行進に随行することができて、真実なる存在のうちの何かを観得したならば、つぎの回遊（περίοδος）のときまで禍を免れてある（ἀπήμων）こと」（藤沢訳を一部改変）と言われている（248c3-5）。

<sup>70</sup> プラトン『ティマイオス』21a1-3, 26e2-3には、対話を行っているのが「女神アテナの祭礼」（すなわちパンアテナイア祭）の最中であることを示唆する記述がある。

<sup>71</sup> オルベウスのこと。プロクロスなど新プラトン主義者はオルベウス教の教説を権威として用いた。

[月]の数多の名とともに「ベンディス」をも、かの女神[アルテミス]に帰したのだから。

プルトネ<sup>72</sup>とエウプロシユネ<sup>73</sup>と力強きベンディス。<sup>74</sup>

他方、ベンディス祭に続くパンアテナイア祭——小パンアテナイア祭のことを私は言っているのだが<sup>75</sup>——は、祭のゆかりとして女神アテナを据えていた<sup>76</sup>。そこで、[ベンディスとアテナは]両方ともゼウスの子であり、両方とも乙女なのだが、さらに、両方とも光をもたらす者であるという点も付け加えることにしよう——ただし、ベンディスが光をもたらす者であるのは、自然の見えざる諸原理(λόγοι)を光へと導く者としてであるのに対して、アテナが光をもたらす者であるのは、魂に知性的な光を灯す者としてであるのだが<sup>77</sup>。

アテナは、彼の兜と盾から、絶えざる炎を燃え上がらせた。<sup>77</sup>

---

<sup>72</sup> プルトン(ハデスの別名)の妻ペルセポネのこと。

<sup>73</sup> 三美神(カリス)のうちの一柱(ヘシオドス『神統記』909参照)。

<sup>74</sup> オルベウス断片 200 Kern。

<sup>75</sup> Festugière に従い λέγων を λέγω と読む。

<sup>76</sup> 二つの祭の時期に関して何らかの事実誤認があると考えられる。プロクロスは、ベンディス祭が開かれたのは初夏のタルゲリオン月 19 日ないし 20 日であり、その翌日に小パンアテナイア祭が続いたと記している(『プラトン『ティマイオス』注解』I 26.13-15, 85.28-30)。しかし、四年に一度開かれた大パンアテナイア祭と、それ以外の年に開かれた小パンアテナイア祭は、いずれも盛夏のヘカトンバイオン月の終わり頃に執り行われていたことが知られている。この問題に対してプロクロスは、小パンアテナイア祭と大パンアテナイア祭の時期は異なるとみなすことで対処したと考えられる(『プラトン『ティマイオス』注解』I 26.10-20)。ちなみにプロクロスは、『パルメニデス』の対話が、大パンアテナイア祭の時期に行われたのに対して(プラトン『パルメニデス』127a7-b1), 『ティマイオス』の対話が(彼の解釈では)小パンアテナイア祭の時期に行われたことについても、それぞれの著作の主題に——すなわち、前者は女神アテナの超宇宙的で可知的なはたらきに、後者は宇宙内の可感的なはたらきに——対応しているという解釈を提示している(『プラトン『ティマイオス』注解』I 84.22-85.4)。

さらに、アテナが光をもたらす者であるのは、霧——魂にそれが生じると、何が神的で何が人間的なのが見えなくなる——を取り扱う者としてもある<sup>78</sup>。両者が以上のような固有性を有している以上、次のことは明らかである。すなわち、ベンディスは生成を統べる者、生成にかかわる諸原理の産出を援ける者（λοχευτική）であるのに対して、アテナは魂を上方へと導く者、知性と真実の知慮とを取り仕切る者（χορηγός）、天界において格上の仕方で君臨し、上方から月下界の秩序全体を完成させる者なのである。

[19.2-10] さて、以上のわれわれの主張が真実であるならば、ベンディスの祭は、[ペイライエウスという]場所がそうであったのと同様に、第一の会合に適していることになるだろう。この会合が模倣している魂は、生成を秩序づけてはいるが、それを騒乱のない仕方で行っているのではない魂だからである。他方、パンアテナイア祭は、第二、第三の会合に適していることになるだろう。これらの会合が模倣する魂は、それ自身の内へと引きこもり、生命を下方のものから自らの知性の方へと集約させ、類似しないものを自分自身に向けて秩序づける代わりに類似したものとこそ交わり、思惟——すなわち「幸福な観照者」に適した「観もの」<sup>79</sup>——に与る魂だからである。

[19.10-23] また、こう言ってよければ、次のように[プラトンが考えていたと]みなしてもよからう。すなわち、祭典のうち異邦のものは、生成の内になりながら神聖な仕方では生きてはいるものの、異邦の祭典——すなわち天界の祭典ではなく生成にかかわる祭典——に結びついている魂に相応しいのに対して、パンアテナイアの祭典のような祖国の祭典は、[自らに]相応しい慣わし（ἤθη）へと向き返っていて、知性的に、すなわちかの者[プラトン／ティマイオス]が言う「伴侶の星（σύννομον ἄστρον）」<sup>80</sup>に適した仕方で、生

<sup>77</sup> ホメロス『イリアス』5.4（「彼」はディオメデスを指す）。

<sup>78</sup> ホメロス『イリアス』5.127-128では、女神アテナがディオメデスに対して「これまでそなたの眼にかかっていた霧を掃い、神と人間との見境がはっきりつくようにもしておいた」と語っている。同15.668-669も参照。

<sup>79</sup> プラトン『パイドン』111a3-4の表現。

<sup>80</sup> プラトン『ティマイオス』42b4。

きている魂に相応しいのだ、と。実際、かのもの〔天界の祭典〕は魂にとって本当に祖国のものなのだが、それは製作者（デミウルゴス）による〔人間の魂の〕播種がなされたわれわれの祖国がまさにかのところにあるからである<sup>81</sup>。他方、生成の祭典は、たとえ守護神たち（θεοὶ ἔφοροι）のための祭典であるにせよ、異邦のものである。分別ある者は、こちらの祭典に対しても義務を果たすべきではあるが、かの〔天界の〕祭典の方に目を向け、できるだけ早く向き返らなければならない。これはちょうどソクラテスがそうしたのと同様である。ソクラテスはその〔異邦の祭典の〕なかの祭に参加し、祈りを捧げ、見物したあと、すぐに家路についたのだから。時については以上の通りである。

#### [登場人物 (19.23-25)]

[19.23-25]まだ残されているのは、登場人物について説明することである。しかるに、会合に集まった者の数は10人<sup>82</sup>で……

(以下欠落)<sup>83</sup>

<sup>81</sup> プラトン『ティマイオス』41d8-42d5では、各人の魂はそれぞれ製作者（デミウルゴス）によって割り当てられた星を有しており、しかるべき時間を立派に過ごしたならば、本来割り当てられた「伴侶の星」に戻るとされる。

<sup>82</sup> ソクラテス、グラウコン、アデイマントス、ポレマルコス、ケパロス、トラシユマコス、クレイトポン（以上、発言あり）、リュシ阿斯、エウテュデモス、カルマンティデス（以上、発言なし）の10人か。しかし、ニケラトス（327c2）も会合に加わったと考えるのが自然であり、その場合（ケパロスの退出までは）少なくとも11人いたことになる。プロクロスがどのようなことを論じたのかは推測するしかないが、10を完全数とするピュタゴラス派の教説にもとづく象徴的解釈が行われたかもしれない。実際、プロクロス『プラトン『ティマイオス』注解』I23.19-24.11では、ソクラテスの対話相手が前日の四名から三名に減ったことについて、「〈三〉は〈四〉より、〈四〉は〈十〉より神聖である」とするピュタゴラス派の教説が引かれた上で、「ソクラテスは〔対話相手の〕数の減少を、よりすぐれた完成の象徴とみなした」とする解釈が提示されている。さらに Baltzly, Finamore & Miles 48-51 参照。

<sup>83</sup> 以下、第一論文の残り、第二論文の全体、第三論文の途中までテキストが散逸している。なお、プロクロス『プラトン『国家』注解』の日本語訳として、現時点では西尾（第三

## 【文献】

- [Abbate] Abbate, M. (tr.), *Proclo: Commento alla Repubblica di Platone: Dissertazioni I, III-V, VII-XII, XIV-XV, XVII*, Pavia: Bompiani, 2004.
- [Baltzly, Finamore & Miles] Baltzly, D., Finamore, J. F. & Miles, G. (tr.), *Proclus: Commentary on Plato's Republic*, vol. 1, Cambridge: Cambridge University Press, 2018.
- [Bobonich] Bobonich, C., *Plato's Utopia Recast: His Later Ethics and Politics*, Oxford: Oxford University Press, 2002.
- [Burnet] Burnet, J. (ed.), *Platonis Opera*, 5 vols., Oxford: Oxford University Press, 1900-1902.
- [Dillon] Dillon, J. M. (ed.), *Iamblichi Chalcidensis In Platonis Dialogos Commentariorum Fragmenta*, Leiden: Brill, 1973.
- [Duke, Hicken, Nicoll, Robinson & Strachan] Duke, E. A., Hicken, W. F., Nicoll, W. S. M., Robinson, D. B. & Strachan, J. C. G. (ed.), *Platonis Opera*, Tomus I, Oxford: Oxford University Press, 1995.
- [England] England, E. B. (ed.), *The Laws of Plato*, London: Manchester University Press, 1921.
- [Festugière] Festugière, A. J. (tr.), *Proclus: Commentaire sur la République*, 3 vols., Paris: Vrin, 1970.
- [Griffith & Schofield] Griffith, T. (tr.) & Schofield, M. (ed.), *Plato: The Laws*, Cambridge: Cambridge University Press, 2016.
- [Hadot] Hoffmann, P. (tr.) & Hadot, I. (comm.), *Simplicius: Commentaire sur les Catégories*. Traduction commentée sous la direction de I. Hadot. Fascicule I: Introduction, Première partie (p. 1-9, 3 Kalbfleisch), Leiden: Brill, 1989.
- [Kroll] Kroll, W. (ed.), *Procli Diadochi In Platonis Rem Publicam Commentarii*, 2 vols., Leipzig: Teubner, 1899-1901.
- [Mansfeld] Mansfeld, J., *Prolegomena: Questions to be Settled Before the Study of an Author, or a Text*, Leiden: Brill, 1994.
- [Slings] Slings, S. R. (ed.), *Platonis Respublica*, Oxford: Oxford University Press, 2003.
- [Stalley] Stalley, R. F., *An Introduction to Plato's Laws*, Indianapolis: Hackett, 1983.
- [Westerink] Westerink, L. G. (ed.), *Anonymous Prolegomena to Platonic Philosophy*:

---

論文), 近藤・川島・高橋・野村(第四論文)がある。

*Introduction, Text, Translation and Indices*, Amsterdam: North-Holland Publishing Company, 1962.

- [種山] 種山恭子訳「ティマイオス」『プラトン全集12』岩波書店, 1975
- [近藤・川島・高橋・野村] 近藤智彦・川島彬・高橋勇真・野村拓矢「プロクロス『プラトン『国家』注解』第四論文 日本語訳・注」『北海道大学文学研究院紀要』169 (2023), 左 41-左 70
- [中畑] 中畑正志編『プラトン哲学入門』京都大学学術出版会, 2008
- [西尾] 西尾浩二「(試訳)プロクロス著『プラトン国家篇註解』——第三論文(20.7-27.6)——」『古代哲学研究室紀要(HYPOTHESIS)』(京都大学西洋古代哲学史研究室) 11 (2002), 40-51
- [納富] 納富信留『ソフィストと哲学者の間——プラトン『ソフィスト』を読む』名古屋大学出版会, 2002
- [藤沢] 藤沢令夫訳『プラトン：国家(上・下)』岩波書店, 1979
- [藤沢] 藤沢令夫訳「パイドロス」『プラトン全集5』岩波書店, 1974
- [丸橋] 丸橋裕『法の支配と対話の哲学——プラトン対話篇『法律』の研究』京都大学学術出版会, 2017
- [森・池田・加来] 森進一・池田美恵・加来彰俊訳『プラトン：法律(上・下)』岩波書店, 1993

※本翻訳は JSPS 科研費 (JP21K00024, JP22J00249) の助成による成果の一部である。本訳・注の草稿に対して貴重なコメントを下さった安田将氏(日本学術振興会・京都大学)に感謝申し上げたい。





## ドイツ高教会運動とハイラー宗教学の形成

宮 嶋 俊 一

### Abstract

This study explores the foundation of religious studies in Germany during the Weimar Republic and its relationship to religious movements, beginning with Friedrich Heiler (1892–1967). This paper forms a part of a larger study. Heiler was a German religious scholar and religious activist between the Weimar Republic and the post-World War II period. However, his activities were suspended during the war. Hence, his works can be classified as prewar and postwar, despite the overlap in its substance.

We have confirmed that Heiler's writing activities shifted domains in the 1920s from the Liberal Protestant journal *Die Christliche Welt* to *Hochkirche*, a journal favoring the German High Church movement. The reasons for this transfer include Heiler's nostalgia for Catholicism, isolation at Marburg University, approach to the High Church movement for escaping this situation, active participation in ecumenical activities, and engagement in the liturgical and worship reform movement. Moreover, Nathan Söderblom, a supporter of Heiler, died in 1931. Heiler probably became increasingly isolated in the Protestant world after Söderblom's death. In such circumstances, Heiler became further involved in the German High Church movement and published numerous works on church history in *Hochkirche*, while writing little on general religious history and religious studies. The Nazi regime banned the publication of *Hochkirche*, which represented the foundation of Heiler's activities, thus stopping his pre-World War II activities.

10.14943/bfhhs.172.193

## 1. はじめに

筆者はこれまで、ワイマール共和制期ドイツを中心とした宗教学の形成と宗教運動との関わりについて、フリードリヒ・ハイラー（1892-1967）を起点として研究を行ってきた<sup>1</sup>。本稿もその一端をなす<sup>2</sup>。ハイラーはワイマール共和制期から第二次世界大戦後にかけて活躍したドイツの宗教学者・宗教運動家であるが、その活動は、戦中期に休止させられたため、(内実としては重なるところも多いが<sup>3</sup>、形式的には)戦前と戦後に大別できる。

戦前の活動に関して述べると、1918年に主著となる『祈り』<sup>3</sup>を出版し1920年にマールブルク大学神学部に着任した時期がハイラーの学術活動の起点と言える。さらに1931年から正式に関わることとなったドイツ高教会運動はハイラーにとって重要な意味を持つ。この運動はエキュメニカルな志向を持ったキリスト教改革運動であり、プロテスタンティズムにおいて聖体拝領などカトリック的要素を重視しそれに基づき典礼・礼拝の改革運動にも積極的に取り組んだ。『高教会 (Hochkirche)』(後に『一つの聖なる教会 (Eine Heilige Kirche)』とタイトルを変更する)という機関誌を刊行し、ハイラーは長くその編集長を務めた<sup>4</sup>。

---

<sup>1</sup> ハイラーに関しては、拙著『祈りの現象学—ハイラーの宗教理論』ナカニシヤ出版、2014年を参照。また、ハイラーの宗教学と宗教運動との関わりについては、拙稿「ハイラー宗教学再考」『北海道大学文学研究院紀要』(168) 37-54頁、2022年を参照。

<sup>2</sup> 本稿は日本宗教学会大82回学術大会(2023年9月9日(土)東京外国語大学 府中キャンパス)での発表に加筆、修正を加えたものである。

<sup>3</sup> Heiler, Friedrich, *Das Gebet. Eine religionsgeschichtliche und religionspsychologische Untersuchung*, Ernst Reinhardt, 1918.

<sup>4</sup> ハイラーのドイツ高教会運動での活動については、Niepmann, Helmut Martin, Professor Friedrich Heiler und die Hochkirchliche Vereinigung, Haut, Theodor / Kisker, Ursula (Hg.), *Siebzig Jahre Hochkirchliche Bewegung (1918-1988). Hochkirchliche Arbeit. Woher? — Wozu? — Wohin? (Eine heilige Kirche NF 3)*, Bochum 1989, S. 55-89, および, Langfeldt, Jan, *Die hochkirchliche Bewegung in Deutschland und die Eucharistiefeyer der Evangelisch-katholischen Eucharistischen Gemeinschaft von 1931: Unter besonderer Berücksichtigung des Offertoriums*, Grin Verlag, 2007を参照。

筆者はこれまでもハイラーにとってのドイツ高教会運動の意義について、論文や学会発表を通じて報告してきた。その意義のひとつは、1918年に出版された『祈り』において説かれた「祈りの理想」を実現するための実践的な活動の場としての意義である。すなわち、ドイツ高教会運動において目指された新たな典礼・礼拝の創設は『祈り』の延長線上に位置するものであり、ハイラーの宗教的・宗教学的活動はその「理論と実践」において理解される、というものである<sup>5</sup>。その意味で、今日のわれわれからすれば、宗教学からの逸脱に見える宗教活動は、ハイラーにおいては学問的活動とは矛盾せず、一貫していたと考えられる。

そのような見方には妥当性があると思うが、本稿では、もうひとつ別の意味を考えていきたい。それは、ハイラーの1930年代の活動拠点としての意味である。というのも、1930年代のハイラーの著述活動のスタイルは機関誌『高教会』で論文・評論を次々に発表し、それをまとめて著作化し、Ernst Reinhardt社から刊行するというものであったからである。

本稿の筋立てを先取りして言うと、カトリック出自のハイラーが、信仰上の理由でプロテスタントへと「改宗」し、マールブルク大学プロテスタント神学部に着任したが、カトリックへの「郷愁」断ちがたくそこで孤立する中で、新たな活動の場を求めた結果、当該運動にたどり着き、さらにはそこを出版活動の拠点としていった、という流れとなる。またその結果、ハイラーの「宗教学」が、今日の私たちが考える意味での宗教学ではなく、より実践的な活動として形成されていったことも指摘したい。以下、ハイラーのライフヒストリーと重ねながら、ハイラーの活動内容を具体的に示し、分析を加えつつ、彼独自の宗教学が形成されていく、その一端を見ていくこととした。

---

<sup>5</sup> 宮嶋前掲論文参照。

## 2. 1920年代前半におけるハイラーの活動

1918年に『祈り』を出版したハイラーは1920年、マールブルク大学神学部に助教授として着任する。それに先立ち、カトリックからプロテスタントへと「改宗」とされる<sup>6</sup>。本稿末に付した参考資料を見ると、この時期(1920~25年)は雑誌『キリスト教世界』を活動の場としていたことがわかる。同誌には継続的にハイラーの論文が掲載されているが、同誌の編集を務めていたマルティン・ラーデはマールブルク大学神学部教授であり、「文化プロテスタンティズム」の代表者と位置づけられてきた人物である。ハイラーとラーデの関係についてはまだ調べ切れていないが、少なくとも同誌に少なからぬ論考を発表することが可能であったことは明らかであり、それだけでなくその頻度や分量からして1920年代前半のハイラーにとって『キリスト教世界』誌はその活動における重要な位置を占めていたと言える。

1920年には「一般宗教史におけるキリスト教の絶対性 (Die Absolutheit des Christentums in der allgemeinen Religionsgeschichte)」というタイトルの講演録<sup>7</sup>が同誌に掲載される。トレルチの「キリスト教の絶対性と宗教の歴史」を彷彿とさせるこの論考は、宗教史におけるいわゆる「平行理論」に基づきつつ、諸宗教に対するキリスト教の優越性を説いた論考であり、主張そのものは護教的であるが、少なくともその手法において当時の宗教史理論に依拠した、学術的性格を有した論考であると言えよう。

また、1923年には、同誌上において、インド人宣教師スンダー・シングに

<sup>6</sup> 1918年10月13日付けゼーデルブロムからオッターに宛てた手紙を参照。Misner, Paul (Hrsg.), *Friedrich von Hügel — Nathan Söderblom — Friedrich Hailer: Briefwechsel 1909-1931*, Bonifatius-Druckerei, 1981, S.309.

<sup>7</sup> Heiler, Friedrich, *Die Absolutheit des Christentums in der allgemeinen Religionsgeschichte*. Vortrag in der Religionswissenschaftlichen Gesellschaft zu Stockholm (1919). *ChrW*, Vol.34, 1920, Sp.226-230, 244-248, 258-262.

関する論考を発表している<sup>8</sup>。この論考は、ハイラーがスンダー・シングというインド人宣教師の活動や言動に、プリミティブなキリスト教の理想を見出し、イエス・キリストの再来とまで高く評価したものだが、一方でその言動を虚偽として否定し、スンダー・シングは虚言癖のある精神病者に過ぎないと主張したプフィスターとの間で論争を引き起こすこととなった。すなわち、この論争の端緒となった論考が、同誌に発表されているのである。実践的な性質を有した論考であり、スンダー・シングの宗教的（キリスト教的）「真実性」を主張するという意味では神学的とも言えるが、その論証の手続きで宗教史的な知識を援用している点において、（少なくとも当時の学問状況においては）宗教（史）学的であることが目指されていると言える。

このように、『キリスト教世界』に掲載されたいくつかの論考は、護教的・神学的・実践的な傾向を持ちつつも、その手続きにおいて「宗教学」的であることが目指されていた。

### 3. 1920年代半ばにおけるハイラーと高教会運動との関わり

『キリスト教世界』誌1925年10月号には、8月にストックホルムで開催された「ライフ・アンド・ワーク世界会議」の報告が掲載されている<sup>9</sup>。このライフ・アンド・ワーク世界会議は、エキュメニカル運動の潮流に棹さすものであり、教派を超えて経済や政治、道徳などを含む社会問題に関する諸教会の協力について話し合う会議で、ナータン・ゼーデルブルムの主導で開催された。ゼーデルブルムはこの会議以前から、エキュメニカルな対話の促進や、第一次世界大戦の和平交渉に関わっていた。カトリック教会は参加しなかったが、それ以外の多くの教派がこの会議に参加した。ハイラーはこの会議で開催された礼拝の様子などについて、詳細に報告している。

<sup>8</sup> Heiler, Friedrich, Sadhu Sundar Singh, der Apostel Indiens, *ChrW*, Vol.37, 1923, Sp. 417-483.

<sup>9</sup> Heiler, Friedrich, Die religioese Einheit der Stockholmer Weltkonferenz, *ChrW*, Vol.39, 1925, Sp.865-875.

興味深いのは、この報告が『キリスト教世界』だけでなく、ドイツ高教会運動の機関誌『高教会』にも掲載されたことである<sup>10</sup>。当時、キリスト教（とりわけプロテスタント）世界で大きな影響力を持っていたゼーデルブロム主催の国際会議の報告が『キリスト教世界』に掲載されることは不思議ではないが、同時にエキュメニカルな志向を持っていた高教会運動の機関誌にも同じ報告（短縮版）が掲載されたのである。結果的にこの報告はハイラーが活動の場を『キリスト教世界』から『高教会』へと移す、その嚆矢になった論考とも言える<sup>11</sup>。

さらに、『高教会』1926年の1月号からは、前年12月にマグデブルクで開催された高教会同盟会議でのハイラーの講演が掲載され<sup>12</sup>、この時期から、ハイラーが高教会運動に接近していることがわかる。

#### 4. 1920年代後半のハイラー

1920年代後半、ハイラーはマールブルク大学プロテスタント神学部で孤立する。その（重要な）理由のひとつは、プロテスタントに「改宗」したと言いつつも、カトリックへの「郷愁」を断ち切ることができず、プロテスタント的な環境に馴染むのが難しかったことである。1927年8月3日付けの、アンネ・マリー・ハイラーからゼーデルブロムに宛てた手紙には、以下のような内容の記述が存在する。すなわち、ハイラーがマールブルク大学プロテスタント神学部で孤立していること、そのことを同僚であるオットーが心配し、ゼーデルブロムに相談するよう（アンネ・マリーが）オットーから言わ

---

<sup>10</sup> Heiler, Friedrich, Die religioese Einheit der Stockholmer Weltkonferenz, *Hochkirche*, Vol. 7, 1925, S.359-363; Vol.8, 1926, 118f.

<sup>11</sup> なお、参考資料からわかる通り「Jahrbuch für Liturgiewissenschaft」と題された典礼学の年報を紹介した文章も、1924年は『キリスト教世界』で連載されていたが、その後は『高教会』での掲載に変更されている。

<sup>12</sup> Heiler, Friedrich, Evangelische Hochkirchentum. Vortrag auf der Tagung der Hochkirchlichen Vereinigung in Magdeburg 1. Dezember 1925, *Hochkirche*, Vol.8, 1926, S.2-16, 36-46, 68-74.

れたこと、1927年8月に開催されるローザンヌでの国際会議の終わり頃（8月18日～20日頃）に、夫、フリードリヒと話をし、彼を助けてくれないだろうか、という相談が記されているのである<sup>13</sup>。

そうした状況に呼応するかのように『キリスト教世界』への文章掲載の機会は失われていく。そして、それに代わって、文章発表の場として重要な意味を持ち始めるのが『高教会』である。参考資料を見れば明らかのように、1930年以降、1940年の発刊停止まで、『高教会』（1934年からは『一つの聖なる教会』とタイトル改変）に占めるハイラーの文章掲載量は圧倒的となる。その内容は概ね、典礼・礼拝改革に関わる文章、エキュメニカル運動に関わる文章、そして膨大な書評が含まれる。結果的に、狭義の宗教学的（あるいは宗教史的）な論考は減り、高教会運動に関する実践的論考が増加していくこととなる（参考資料は1930年までとなっているが、この後もほぼ同じような状況が続く）。

## 5. 考察

本稿においてまず確認したかったのは、1920年代においてハイラーの著述活動の場が『キリスト教世界』から『高教会』へと移行したということ、その理由として考えられるのがハイラーのカトリック教会への「郷愁」、マールブルク大学でのハイラーの孤立、その状況を脱するための高教会運動への接近、そしてエキュメニカル運動や典礼・礼拝改革運動への積極的な参加、といったハイラーの置かれた状況や活動内容の変化である。さらにハイラーの後ろ盾ともなっていたナータン・ゼーゼルブロムは1931年に死去する。今回は1920年代を取り上げたため30年代の動きの詳細には触れないが、ゼーデルブロムの死去によりハイラーはプロテスタント世界でますます孤立を深めていった可能性は高い。そうした中、ハイラーはドイツ高教会運動への関わりを深め、教会史に関する著作を多く執筆する一方、一般宗教史・宗教学

---

<sup>13</sup> Misner, Paul (Hrsg.), *Briefwechsel*, S.321-322.



に関する著作はほとんど書かれなくなっていく。そして、ハイラーの活動の基盤となっていた『高教会』の出版がナチス政権によって禁止されたことによって、ハイラーの第二次世界大戦前の活動は停止することとなるのである。

もし、ハイラーがプロテスタント世界に馴染み、そこでの活動を継続し、またそれが周囲からも認められ、結果、プロテスタント出版界に活動の場を維持し続けていれば、『高教会』に活動の場を求める必要はなかったであろうし、エキュメニカル運動との関わりも深まらなかった可能性がある。そうなれば、『高教会』に発表してきたような実践的・論争的な評論ではなく、むしろ(狭義の)宗教(史)学的論考が多く書かれることになったかもしれない。だがそれが難しかったからこそ、『高教会』へと活動の場が移された。ドイツ高教会運動にコミットしたことにより、ナチズム下においては、その活動を制限されることとなったが、それは、ハイラーがナチズムを積極的に批判したからではなく、国際的な人間関係がその理由であるとされる。いずれにせよ、結果的にナチズムに加担することがなかったため、戦後、公職追放されることもなく、その活動にも支障が出なかった。それゆえ、戦後ドイツの宗教学会において重鎮としての役割を果たすこととなった。

では、ドイツ高教会運動へのコミットメントは、ハイラーの「宗教学」にどのような影響をもたらしたのだろうか。元々、ハイラーは聖職者になることを夢見ていた。その夢を絶たれたハイラーを支えたものが「宗教学」であった。よって、ハイラーの「宗教学」が偽装神学的(ルードルフ)<sup>14</sup>なものとなったのも、必然であったと言える。その「宗教学」は、ドイツ高教会運動との関わりを通じて、ますます実践的なものとなっていった。19世紀の後半を宗教学の黎明期と捉えるならば、20世紀前半を宗教学の発展的形成期と位置づけることができよう。そしてこの時期、ハイラーは宗教運動へと傾倒し、アカデミズムでの活動から距離を置いていったが、それは、今日のわれわれからは、宗教学からの疎遠化のように見える。だが、ハイラーにとっては理論

<sup>14</sup> Rudolph, Kurt, Die Problematik der Religionswissenschaft als akademisches Lehrfach, *Kairos*, Vol.9, S.22-42.

と実践を融合させつつ、理想的な宗教のあり方を模索する、いわば「実践的宗教学」を形成していくプロセスであった。そのようにして形成されていった実践的宗教学が戦後において諸宗教間の対話、さらには諸宗教の統合といった主張へと展開していくのだが、その問題については稿を改めて論じたい。

(本研究は JSPS 科研費 21K00064, 20H01188 の助成を受けた。)

## 参考文献

- 宮嶋俊一『祈りの現象学—ハイラーの宗教理論』ナカニシヤ出版, 2014年  
—「ハイラー宗教学再考」『北海道大学文学研究院紀要』(168) 37-54頁, 2022年
- Heiler, Friedrich, *Das Gebet. Eine religionsgeschichtliche und religions-psychologische Untersuchung*, Ernst Reinhardt, 1918.
- , Die Absolutheit des Christentums in der allgemeinen Religionsgeschichte. Vortrag in der Religionswissenschaftlichen Gesellschaft zu Stockholm (1919). *ChrW*, Vol. 34, 1920, Sp.226-230, 244-248, 258-262.
- , Sadhu Sundar Singh, der Apostel Indiens, *ChrW*, Vol.37, 1923, Sp.417-483.
- , Die religioese Einheit der Stockholmer Weltkonferenz, *ChrW*, Vol.39, 1925, Sp.865-875.
- , Die religioese Einheit der Stockholmer Weltkonferenz, *Hochkirche*, Vol.7, 1925, S. 359-363; Vol.8, 1926, 118f.
- , Evangelische Hochkirchentum. Vortrag auf der Tagung der Hochkirchlichen Vereinigung in Magdeburg 1. Dezember 1925. *Hchkirche*, Vol.8, 1926, S.2-16, 36-46, 68-74.
- Langfeldt, Jan, *Die hochkirchliche Bewegung in Deutschland und die Eucharistiefeyer der Evangelisch-katholischen Eucharistischen Gemeinschaft von 1931: Unter besonderer Berücksichtigung des Offertoriums*, Grin Verlag, 2007.
- Misner, Paul (Hrsg.), *Friedrich von Hügél — Nathan Söderblom — Friedrich Heiler: Briefwechsel 1909-1931*, Bonifatius-Druckerei, 1981.
- Niepmann, Helmut Martin, Professor Friedrich Heiler und die Hochkirchliche Vereinigung, in: Haut, Theodor / Kisker, Ursula (Hg.), *Siebzig Jahre Hochkirchliche Bewegung (1918-1988). Hochkirchliche Arbeit. Woher? — Wozu? — Wohin? (Eine heilige Kirche NF 3)*, Bochum 1989, S. 55-89.
- Rudolph, Kurt, Die Problematik der Religionswissenschaft als akademisches Lehrfach, *Kairos*, Vol.9, S.22-42.

参考資料（\*印は書評など、分量が1頁に満たないような短い文章。なお長いタイトルは一部省略した。）

年号	『キリスト教世界(ChrW)』に掲載された文章	『高教会(Hk)』に掲載された文章
1920	<p>- Die Absolutheit des Christentums in der allgemeinen Religionsgeschichte. Vortrag in der Religionswissenschaftlichen Gesellschaft zu Stockholm (1919). ChrW 34 (1920) Sp.226-230, 244-248, 258-262</p> <p>- Ut omnes unum. Predigt beim schwedischen Gottesdienst im "Michelchen" in Marburg. ChrW 34 (1920) Sp.515-518.</p>	
1921	<p>* Die hochteure Pforte. Schriften von Jakob Boeme, herg. von W. Irmer. Furchel-Verlag, Berlin 1921. ChrW (1921) Sp.923.</p>	
1923	<p>- Sadhu Sundar Singh, der Apostel Indiens. ChrW 37 (1923), Sp.417-483.</p> <p>* Soehngen, Oskar, Das mystische Problem in Plotins Weltanschauung. Kroener, Leipzig 1923. ChrW37 (1923) Sp.592.</p>	
1924	<p>* Liturgiewissenschaft, Jahrbuch fuer, herg. von Odo Casel. Aschendorf, Muenster. I 1921, II 1922: ChrW 38 (1924) 59f. [, IX 1929; Hk 13 (1931) 139; X 1930, XI 1931, Registerband 1933: EhK 16 (1934) 89.]</p> <p>* Die Reden Gotamo Buddhos. Aus der mittleren Sammlung Majjhimanikayo des Palikanons, 3Bde. Die letzten Tage Gotamo Buddhos. Aus dem grossen Verhoer ueber die Erloeschung, Mahaparinibbanasuttam. / Die Lieder der Moenche und Nonnen Gotamo Buddhos. Aus den Theragatha und Therigata. Der Wahrheitspfad Dhammapadam. / Die Reden Gotamo Buddos. Aus der laengeren Sammlung Dighinikayo. Uebersetzt von Karl Eugen Neumann. 2. und 3. Auflage. P. Piper, Muenchen 1921/23. ChrW (1924) Sp.193.</p> <p>* Gilg, Otto, Die Messe. Dietschi, Olten 1924. ChrW 38 (1924) Sp.917.</p>	
1925	<p>- Friedrich von Huegel +, ChrW 39 (1925) Sp.265-272.</p> <p>- Fuenfzig Jahre Altkatholizismus. Zum Tode von Bischof Eduard Herzog. ChrW 38 (1924) Sp.651-660, 699-706.</p> <p>- Die religioese Einheit der Stockholmer Weltkonferenz. ChrW 39 (1925) Sp.865-875.</p> <p>- Ein Zerrbild von Stockholm. ChrW39 (1925) Sp.991-997.</p>	<p>- [Die religioese Einheit der Stockholmer Weltkonferenz. ChrW 39 (1925) Sp. 865-875.] Teilweise in: Hk7 (1925) 359-363; 8 (1926) 118f.</p>

ドイツ高教会運動とハイラー宗教学の形成

1926		<p>- Evangelische Hochkirchentum. Vortrag auf der Tagung der Hochkirchlichen Vereinigung in Magdeburg 1. Dezember 1925. in: Hk8 (1926) 2-16, 36-46, 68-74.          * [Die Gottesmutter. Eine evangelische Marien-betrachtung. MNN, 23.12.1925. Abgedruckt in: Hk 8 (1926) S.54-57]</p>
1927	<p>- Tagung des hochkirchlich-oekumenischen Bundes 1926 in Berlin. ChrW 41 (1927) Sp.35-37.          - Das Buch der Reformation Huldrych Zwanglis. Von ihm selbst und gleichzeitigen Quellen erzaert durch Walter Koehler. Ernst Reinhardt, Muenchen 1926. ChrW41 (1927) Sp.832.          - Braeunlich, P., Sundar Singh in seiner wahren Gestalt. Ungelenkt, Dresden. ChrW 41 (1927) Sp.233f. [; Hk 9 (1927) 27f.]          - Auf dem Wege zur einen Kirche. Kritische Gedanken ueber Lausanne. ChrW41 (1927) Sp.899-907.</p>	<p>- Braeunlich, P., Sundar Singh in seiner wahren Gestalt. Ungelenkt, Dresden. Hk 9 (1927) 27f. [; ChrW 41 (1927) 233f]          - Die hochkirchliche Bebeugung (Cahtolic Movement) in der anglikanischen Kirche. Hk 9 (1927) 79-85, 105-115, 136-144, 169-173.          - Die Lausanner Konferenz fuer Glaube und Kirchenverfassung. Hk 9 (1927) 297-301, 323-341.</p>
1928	<p>- Clemen, Carl, Die Religion der Erde. Bruckmann, Muenchen. ChrW 42 (1928) Dp.724f.</p>	
1929		<p>- Reformation der Reformation. Hk11 (1929) 358-365.          - Hochkirchliche Aufgaben. Hk 11 (1929) 318-311.</p>
1930	<p>- Professor Heiler und die apostolische Sukzession 2 (Erwiederung auf Karl Ludwig.) ChrW 44 (1930) Sp.479ff.</p>	<p>- Orthodox, katholisch und evangelisch. Hk 12 (1930) 3-9.          * Le Fort, Gertrud von, Hymnen an die Kirche. 2Auffl. Koesel&amp;Pustet, Muenchen 1929. Hk12 (1930) 31f.; 95f.          * Dimmer, Hermann, Skrupulositaet und religioese Seelenstoerungen. Ludwig Auer, Donauwoerth 1930. Hk15 (1933) 152.          - Apostolische Sukzession. Hk 12 (1930) 34-54.          - Evangelisches Franziskanertum. Hk.12 (1930) 67-79.          - Die Katholizitaet der Confessio Augustana. Hk 12 (1930) 172-208.          * Fendt, Leonhard, Der Wille zur Reformation im Augsburgischen Bekenntnis. Ein Kommerntar. Wallmann, Leipzig 1930. Hk 12 (1930) 242.          * Lortzing, J. Die Augsburgische Konfession im Lichte des Neuen Testaments und der Geschichte. Schoeningh, Parderborn 1930. / Ders., Die</p>

		<p>Augsburgische Konfession vom religioesen und nationalen Standpunkt aus beleuchtet. Schoeningh, Parderborn 1930. Hk12 (1930) 242f.</p> <p>* Vollrath, Wilhelm, Das Augsburgische Bekenntnis und seine Bedeutung fuer die Gegenwart. Deichert, Leipzig 1930. Hk12 (1930) 243f.</p> <p>* Thieme, Karl, Die Augsburgische Konfession und Luthers Katechismen, auf ihren theologischen Gegenwartswert untersucht. Toepelmann, Giessen 1930. Hk12 (1930) 244.</p> <p>* Worte des hl. Augustinus ueber die katholische Kirche. Hk12 (1930) 247f.</p> <p>- St. Augustinus als Lehrer der Kirche. Hk 12 (1930) 249-256.</p> <p>- Adorf von Harnack +, Seine Stellung zu Katholizismus und Protestantismus. Hk 12 (1930) 268-278.</p> <p>* Aus gortgeschenkter Fueelle. Gedanken aus den Schriften des Kirchenvaters Augustinus. Ausgewaehlt und uebertragen von Wunibald Roetzer. M. Hueber, Muenchen. Hk12 (1930) 286.</p> <p>* Vetter, Johannes, Der heilige Augustinus und das Geheimnis des Leibes Christi. Matthias-Gruenewald, Verlag, Mainz 1929. Hk12 (1930) 286.</p> <p>* Gebet einer italienischen Franziskanerin. Hk12 (1930) 288.</p> <p>- Ein Zeugnis von der einen, heiligen, katholischen Kirche. Die 7. Lambeth-Konferenz der anglikanischen Bischoefe. Hk12 (1930) 298-308.</p> <p>* Wilfred Monod, Das Geheimnis des "Und". Ansprache am 29. Augst 1930 bei der Tagung des Fortsetzungsausschusses der Lausanner Konferenz in Muerren. Hk12 (1930) 320-323.</p> <p>* Das einfaeltige Auge. Homilie einer Franziskanerin am Vorabend des Festes der hl. Elisabeth. Hk12 (1930) 319f.</p> <p>- Ex Oriente lux. Der 12. Hochkirchentag - ein Schritt zur oekumenischen Einheit. Hk12 (1930) 330-337.</p> <p>* Lexikon fuer Theologie und Kirche, herg. von M. Buchberger. Hk 12 (1930) 339ff. [; 14 (1932) 172f.; EhK 16 (1934) 272.; 19 (1937) 92f.]</p> <p>* Lesebuch, Religionsgeschitliches, herg. von A. Bertholet, Heft 1-17. Mohr,</p>
--	--	--

		<p>Tuebingen 1926 (2) ff. Hk 12 (1930) 343-344          [; 14 (1932) 293f.; 16 (1934) 92.]</p> <p>* Bernhart, Joseph, Der Vatikan als Thron der Welt. Paul-List-Verlag, Leipzig 1928. Hk12 (1930) 346-348.</p> <p>- Evangelische Katholizitaet (Vortrag in Berlin, 6.10.1930). Hk12 (1930), S.355-366.</p> <p>* Analekten zur Geschichte der Franziskus von Assisi, herg. von Heinrich Boemer. a. Aufl. von F. Wiegand. Mohr, Tuebingen 1930. Hk12 (1930) 345.</p> <p>* Maertyrerakten, Ausgewaehlte, herg. von Rudolf Knopf. 3. Aufl., bearbeitet von G. Krueger. Mohr, Tuebingen 1929. Hk12 (1930) 345.</p> <p>- Jungfrau-Mutter. Eine Marienbetrachtung fuer die Advertszeit. Hk12 (1930) S.351-355.</p> <p>- Evangelische Marienandachten im Advent. Hk 12 (1930) S.370-374.</p> <p>* Die Religion in Geschichte und Gegenwart, 2. Aufl. 1927/31. Hk12 (1930) 339-341; [14 (1932) 171.]</p> <p>* Krebs, Engelbert, Sankt Augustinus, der Mensch und Kirchenlehrer. Gildenverlag, Koeln 1930. Hk 12 (1930) 377f.</p> <p>* Das Leben des heiligen Kirchenvaters Augustinus, beschreiben von seinem Freunde Bischof Possidius, uebersetzt von K. Romeis. St.-Augustinus-Verlag, Berlin 1930. Hk 12 (1930) 377.</p> <p>* Gilson, Stefan, Der heilige Augustin. Eine Einfuehrung in seine Lehre, uebersetzt von Ph. Boehner und Th. Sigg. Hegner, Hellerau. Hk 12 (1930) 378.</p> <p>* Gilson, Stefan, Der heilige Augustin. Eine Einfuehrung in seine Lehre, uebersetzt von Ph. Boehner und Th. Sigg. Hegner, Hellerau. Hk12 (1930) 378.</p> <p>* Bibel und Liturgie, Blaetter fuer volksliturgisches Apostelat, herg. von Pius Parsch. Augustinus-Jublaeums-Festnummer, Klosterneuburg bei Wien 1930. Hk 12 (1930) 378f.</p> <p>* Harnack, Adolf von, Aus der Werkstatt des Vollendeten, herg. von Axel von Harnach. Toepelmann, Giessen 1930. Hk12 (1930) 380f.</p>
--	--	---



## 『伊勢物語』 摘注

後 藤 康 文

本稿は、『伊勢物語』注釈の惨憺たる現状を座視するに忍びず、いまだ正しく解説されていない章段を順に取り上げて私解を開示するものである。なお、それらの骨子は、拙著A『伊勢物語誤写誤読考』（笠間書院、平一二）、または、拙著B『日本古典文学読解考―『万葉』から『しのびね』まで―』（新典社、平二四）においてすでに述べたところである。

## 第十一段

## 【本文】（底本Ⅱ学習院大学蔵本）

昔、男、あづまへ行きけるに、友だちのもとに、道よりいひおこせける、

忘るなよほどは雲居になりぬとも空行く月のめぐりあふまで

（二二才・五行〜八行）



【現代語訳】

昔、男が、東国へ行った折に、（京のある）友人のもとに、道中からいつてよこした歌、

（どうか私のことを）忘れないで（いて）ください。（あなたと私との）距離はたとえ雲居ほど遠くになつてしまつたとしても、空を行きめぐる月が（沈んでもまた上つて、再び）めぐり会うように、われわれが再会を果たす時（が来る）まで。

【注】

○友だちのもとに―「のもとに」は底本以下諸本「ともに」。しかし、ここでの「友だちどもに」という複数形表記はいかにも不審であるため、誤写とみて本文を改めた。参考「ねむころにあひ語らひける友だちのもとに」（『伊勢物語』第十六段）「女のもとに、道よりいひやる」（同第二十段）「友だちの、人を失へるがもとにやれりける」（同百九段）等。ちなみに、屋代弘賢の『参考伊勢物語』によれば、かつて存在した為家本の当該本文が「道より友だちのもとへいひをこせける」であつたことが知られる。○「忘るなよ」歌―周知のごとくとは橘忠幹の歌であるが、『拾遺集』の詞書は「橘忠幹が人のむすめにしのびてもいひ侍りけるころ、遠き所にまかり侍るとて、この女のもとにいひつかはしける」（雑上・四七〇）。また、宮内庁書陵部御所本『業平集』巻末歌のそれも「身のうれへ侍りて、あづまの方へまかりて、友だちのもとへいひおくり侍る」。

【余説】

詳細は、拙著A前編第六章をご参照願いたい。が、諸賢は依然現存本文を是とし、京を遠く離れた男が複数、の友人たち、に一首の歌を詠んでよこしたという設定を疑問視しておられない。となれば、ただ単に、疑う方が愚かなだけかもしれないので、なぜ複数、でよいのかをどなたかご説明願えないものだろうか。無論、童蒙にもわかるように平易に明快に、そして論理的に、である。

第十四段

【本文】

昔、男、陸奥みちくににすずろに行きいたりにけり。そこなる女、京の人はめづらかにやおぼえけむ、せちに思へる心なむありける。さて、かの女、

なかなかに恋に死なずは桑子にぞなるべかりける玉の緒ばかり

歌さへぞひなびたりける。さすがにあはれと思ひけむ、行きて寝にけり。夜深く出でにければ、女、

夜も明けばきつにはめなむくたかけのまだきに鳴きてせなをやりつる

といへるに、男、「京へなむまかる」とて、

栗原の姉齒の松の人ならば都のつとにいざといはましを

といへりければ、よろこぼひて、「思ひけらし」とぞいひをりける。

(一三ウ・二行〜一四オ・九行)

【現代語訳】

昔、男が、陸奥にあてどなく行き着いてしまった。(すると、)そこに住んでいる女が、京の人はめったになく(すばらしい)とでも感じたのだろうか、一途に思いを寄せる気持ちがあったのだった。そこで、その女は、(堪えかねてこう詠んでやったのだった。)

なまじっか(叶わぬ)恋(のため)に死んだりせずに、(いつそのこと、雌雄一対で繭に籠るといふ)蚕になるべきであった。(たとえ)玉の緒ほど(のほんの短い間)であっても。

(女自身はもとより、詠んだ)歌までもが田舎じみていたのだった。(男は)そうはいうもののかわいそうだとでも思ったのだろうか、(その夜、女の家へ)行って共寝をしたのであった。(ところが、男が)深夜に出て行ってしまったものだから、女は(たまらず)、

夜も明けたならば(すぐに)、水桶にぶち込んでしまおう。腐れ鶏めがまだ時刻でもないのに鳴いて、(私の)愛しいあの人を(早々と)帰してしまったことよ。

といったのだが、男は(意に介さず)、「京へお暇します」といって、

(ここ)栗原の姉齒の松が人であるならば、—あなたが(せめて)人並みの女性であるならば、都へのお土産に「さあ(一緒に)」といいましよもの。

といったところ、(女は、一首の真意を理解できないままに、歌を返してもらったこと自体がうれしくて、その後)ずっと喜びつづけて、「やはりあの方は、私を)愛していたらしい」と話していたそう。

## 【注】

○きつにはめなむ―底本以下諸本「きつにはめなて」に作るが、「て(天)」は「ん(无)」<sup>1</sup>「む」の明白な誤写。よつて、本文を改訂した。この一首は、「思ひあらば律の宿に寝もしなむひしきものには袖をしつつも」(『伊勢物語』第三段)「五月来ば鳴きもふりなむ時鳥まだしきほどの声を聞かばや」(『古今集』夏・伊勢)等と同型の歌なのである。なお、「きつ」は不詳。通説どおり「水桶」の意とみておく。

## 【余説】

「夜も明けば」歌の第二句「きつにはめなて」の「なて」を「なで」とみて、その下に「おくものか」等の意を補つて解く<sup>2</sup>。省略説<sup>3</sup>や、「なて」<sup>4</sup>「なで」を「なむ」の東国方言とみなす<sup>5</sup>。方言説<sup>6</sup>が、堂々とまかり通っている現状は悲惨の一言に尽きる。詳しくは拙著A前編第四章をご参照いただきたいが、前者は語法的に成り立ちえない謬見であり、後者もまるで根拠のない妄説にすぎないからである。

いわゆる新注の時代、国学者たちは「なて」が「なむ」の誤写であることを見抜き、本文を改める立場もあった。しかるに、近・現代の諸注は、低部本文批判絶対主義に毒されて、そこから大きく後退してしまった。そればかりか、謬説をまことしやかに正当化する大失態を演じてしまったのである。

## 第十五段

### 【本文】

昔、陸奥みちのくににて、なでうことなき人の妻めにかよひけるに、あやしう、さやうにてあるべき女ともあらず見えければ、しのぶ山しのびてかよふ道もがな人の心の奥も見るべく

女、かぎりなくめでたしと思へど、さるさがなきえびす心を見ては、いかがはせむは。(一四ウ・一行〱九行)

### 【現代語訳】

昔、(男が、)陸奥で、平凡な人の妻(のもと)に通つ(て行つ)た時に、不可解なことに、そのような境遇にあることがふさわしい女でもないように見えたので、(事情を知りたくなって、次のような歌を詠んだ)、

(ここ)信夫山(のしのぶ)にあやかつて、あなたの心の奥底にこっそりと分け入って行く方法があつたらなあ。あなたが秘密にしている過去をも見顕すことができるように。

女は、(この男のことを)、この上なくすばらしいと思つて(魅了されて)いたけれど、そのような質の悪い野暮な、田夫野人同然の性根が露見してしまつた今となつては、(ただ失望と幻滅あるのみ。もはや)どうしようもないではないか。

【注】

○なでうことなき人の妻―「なでうことなき」は「人」のみに係る。平凡な身分の夫。「人の親」「人の子」「人の妻」等は、単独ならばこの単位で機能することのだが、本例のごとく上に何らかの修飾を伴う場合は、「人」のみがそれを引き受ける対象となる。○あやしう、さやうにてあるべき女ともあらず見えければ―男は、女が現地の人間でないことを察知し、なぜこんな辺境で田舎者の妻に納まっているのか、不思議に思ったのである。○人の心の奥―この人妻が心の奥底に隠している秘密。都で生まれ育った良家の子女が、陸奥にまでさすらい来って住み着くようになった経緯。○かぎりなくめでたし―女は、男のことをこの上なくすばらしいと思っていたのである。「めでたし」の対象を男の詠んだ歌と解する立場もあるが誤り。歌を賞賛する時には、動詞「めづ」が用いられる。○さるさがなきえびす心―歌に露見した質が悪く野暮な男の心根を指す。「信夫山」歌には、女のデリケートな心の中に土足で踏み込むような、無神経で無遠慮な男のエゴイズムが発露している。みやびな貴公子でありながら、その根性は何と「えびす」さながらだという皮肉。○見ては―この「ては」は、仮定ではなく確定の語法。「し（てしまつ）た今（となつて）は」「し（てしまつ）た以上は」の意。参考「まして近く見ては、いま千重まさりて、あはれにかなしく思ほえて」（『うつほ物語』俊蔭卷）「かくよき人を見ては、さて過ぐすことのあらむ」（同内侍のかみ卷）など。

【余説】

「さるさがなきえびす心」を「女」の心と解するのが最近に至るまで不動の定説であるが、これが根本的な誤りであることは論を俟たない。「女」の「さがなきえびす心」が章段中のどこに描出されているのか、説明できるならば是非

説明していただきたいと思う。「さる」は男の歌の内容を受けてることばであつて、「信夫山」の一首は、平たくいえば「あんたの秘密が知りたい」という傲岸かつ下品な歌であることを、この際よくよく弁えるべきであらう。何度でもいうが、われわれは何よりも、あらぬ思い込みや無用な先入観に邪魔されることのない、虚心な本文の読解に努めなければならぬのである。

第十四段の「女」が「みやび」とは対蹠的な、どこまでも「ひなび」た東国の女性であり、その徹底した戯画化は痛快ですらあつたのだけれども、本段はその逆。同じ東国に住む「みやび」な人妻が、自らの来歴ゆえに憧憬と郷愁を抱いた「男」の内面に、「えびす」同然の無神経で野暮な性根を見て取り、大いなる失望を味わつたというのである。詳しくは拙著A後編第二章をご参照願いたい。

## 第二十六段

### 【本文】

昔、男、「五条わたりなりける女を、え得ずなりにけること」とわびたりける人の返りことに、

おもほえず袖にみなとのさわぐかなもろこし船の寄りしばかりに

(二五ウ・七行―二六オ・一行)

### 【現代語訳】

昔、男が、「五条近辺に住んでいる女性を、(とうとう) 手に入れることができずじまいになってしまったこと」と

泣き言をいつてきた（友）人への返信に、

突如として袖の港に波が立ち騒ぐことです。（大きな）唐船が（不意に）寄港したばっかりに。――思いがけず私の袖が涙でぐっしりと濡れることです。あなたから（私の記憶をはしなくも呼び醒ます）衝撃的なお手紙をいただいたばっかりに。（実は、私にも過去にまったく同じ体験があつて、とても他人事とは思えません。あなたのご無念が身に染みてわかります。）

### 【注】

○わびたりける人の返りこと―泣き言をいつてきた人への返信。参考「命を知らぬ」とある人の返りことに」（伝西行筆本『小大君集』）「宿の梅少し」と乞ひたる人の返りことに」（針切『重之子僧集』）「涙の色」など書きたる人の返りことに」（実践女子大学本『紫式部集』）「いくかさね」といひおこせたる人の返りことに」（松井本『和泉式部集』）等々。また、ここでの「わぶ」は、自己の苦衷をことばで他者に訴えるの意。参考「国の司」、「民疲れ」、「国滅びぬべし」となむわぶる」（『大和物語』第百七十二段）「田舎なる人のもとより」、「日照りして」、「国のみな焼けたること」わびたるに」（榊原本『和泉式部集』）等。○もろこし船―相手からの手紙の比喩。その衝撃の大きさをゆえに外洋を航海する中国船に準えた。○ばかりに―程度ではなく、原因を表す用法。「うせいで」、「うばかりに」。参考「今来むといひしばかりに」長月の有明の月を待ち出でつるかな」（『古今集』恋四・素性）等。



【余説】

詳細は拙著A後編第一章をご参照願いたいだが、今日なお、「わびたりける」で読点を打つ文章を切る立場が支配的なのはなぜであろうか。すなわち諸賢は、「五条わたりけるの女」を高子のこととし、これをわがものにできなかつたのは「男」を措いてほかになく、さらに、「人の返りこと」は失意の「男」を慰めてくれた第三者への「男」の返信と解かれるのだけれども、これは文法的に成り立つ余地のまったくない、ありえない解釈である。あらぬ思い込みで洗脳された誤読の垂れ流しは、もういい加減やめていただきたい。素人ならば好きに読めばよいようなものだが、専門家がこれではほんとうに困る。

また、本段が「難解」なのは、もともとの文章がことば足らずだからだとか、不完全だからだとか、『伊勢物語』側に責任をなすりつける評言にもしばしば出くわすが、これも酷い話だ。足らないのはその注釈者の読解力の方であり、不完全なのはその注釈者の思考力の方であることを、この際よくよく省みるべきではなからうか。

本段は、「男」が、自分と同じ経験をした友人の手紙を見て、かつての悲恋が忽然と蘇り、もらい泣きの涙で不覚にも袖を濡らした、という話なのであり、「五条わたりける女」ということばは、「男」の人生に刻印された甘美な傷の痛みを呼び醒まさずにはおかない「符号」だったのである。

## 第二十七段

### 【本文】

昔、男、女のもとに一夜行きて、またも行かずなりにければ、女の、手洗ふ所に、貫簀ぬきすをうちやりて、たらひの影に見えけるを、みづから、

わればかりもの思ふ人はまたもあらじと思へば水の下にもありけり

とよむを、来ざりける男立ち聞きて、

水口みなぐちにわれや見ゆらむかはずさへ水の下にてもる声に鳴く

(二六〇・二行～一〇行)

### 【現代語訳】

昔、男が、(ある) 女の許に一夜行つて、二度と再び行くことなく終わってしまったので、(その) 女が、手を洗う所で、(覆いの) 貫簀を払いのけて (みると)、盥うの (水の) 影に (自分の姿が映つて) 見えたのを、直々に、

私ほど恋の悩みを抱えた人間は、(この世に) 二人とないだろうと思つていたところ、(何とまあ、盥の) 水の下にも (もう一人) いたのだった。

と詠んだのを、来なかった男が (偶然) 立ち聞いて、(次のように詠んだ)。

(田圃の) 水口 (ならぬ盥の端っこ) に (あなたへの恋ゆえに嘆き悲しむ) 私の姿が映っているのでしょうか。

(いやそれどころか、) 蛙(ならぬ別の男、同じ苦しみを味わっているお仲間) までもが、(私と) 声を合わせて  
鳴いて(、いえ泣いて) いますね。

【注】

○またも行かずなりにければ―男が女のもとを訪れた時、他にも男を通わせている形跡があり、その点にわだかまりを覚えたからである。女自身に魅力がなかったためではない。○みづから―本文の混乱を想定してみたくなる箇所だが、今はひとまず、悲劇のヒロインを演じるに詠え向きの状況に遭遇した女が、勿体をつけて歌を詠みあげる様子を、先取りして誇張した表現とみておく。自分から進んで。直々に。○来ざりける男立ち聞きて―女に未練があつて様子をうかがいにやつて来ていたのである。○かはづさへ―「かはづ」は女に泣かされている他の男の比喩。別の男までもが。

【余説】

『伊勢物語』中「かはづ」が登場するのは本段と第百八段の二章段だが、この両章段が同工異曲ともいふべく大変よく似た構成および内容になっている点には十分注意する必要がある。詳細は拙著A後編第三章をご参照いただきたいが、このことをひとたび弁えるならば、従来正しく読み解かれて来なかった「かはづ」の寓意も、立ちどころに判明する。すなわち本段の「かはづ」とは、「男」自身の比喩でも、「女」を揶揄した表現でも、田圃の蛙そのものでも毛頭なく、「女」が通わせていた「男」とは別の男の意を寓していたわけである。

## 第四十一段

### 【本文】

昔、女はらから二人ありけり。一人はいやしき男の貧しき、一人はあてなる男もたりけり。いやしき男もたる、師走のつごもりに、上の衣を洗ひて、手づから張りけり。心ざしはいたしけれど、さるいやしきわざもならはざりければ、上の衣の肩を張り破りてけり。せむ方もなくて、ただ泣きに泣きけり。これをかのあてなる男聞きて、いと心苦しかりければ、いとよらなる緑衫の上の衣をし出でてやるとて、

紫の色濃き時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける

武蔵野の心なるべし。

(三二ウ・七行〜三二ウ・二行)

### 【現代語訳】

昔、(上流の) 姉妹が二人いた。一人(≡妹)は身分の低い男で貧しい男を、(もう) 一人(≡姉)は、高貴な男を(夫に) 持っていた。身分の低い男を(夫に) 持っていた(方の) 女が、(ある年の) 十二月の下旬に、(夫の) 袍を洗って、自分の手で(張板に) 張った。(夫のために) 真心は尽くしたのだけれど、(何しろ) そのような下々のする仕事など初めてだったので、(とうとう) 袍の肩(の部分) を張り(損ねて) 破ってしまった。(夫の) 一張羅を台無しにしてしまった女は、途方に暮れて) ただもう泣くばかりだった。このことを、あの高貴な男が聞いて、たい

そう気の毒に思ったので、とても華やかな緑衫の袍を（急いで）仕立てて送るということだ、

紫草の色が濃い時は、目も遙かに（見通されて、この）野原に生えている草木は（皆）同じに見えるのでした。

―妻を深く愛している今は、私の気持ちも遍く行き届いて、縁者であるあなた方のことも等しくいとしいと思われるのでした。

（これは、あの）武蔵野の（古歌）の趣なのだろう。

### 【注】

○師走のつごもりに一年の瀬の寒い時期に夫の一張羅をわざわざ洗ったのは、新年の朝賀に間に合わせようとしたためである。○し出で―底本以下「みいて」。だが、「み」は「し」の誤写とみて本文を改めた。「之（し）」↓「三（み）」。  
動詞「し出づ」には、期日までに装束などを調進するの意があり、この文脈にうまく適合する。参考「かくて、年返りて、ついたちの御装束、色よりはじめていときよらに、し出で給へれば、いとよしとおほして、着てありき給ふ」（『落窪物語』 卷二）「四月になりぬ。更衣の御装束、御帳など、よしあるさまにし出づ」（『源氏物語』 明石巻）等。なお、大島本本文は「た、かたときにしいて、」となっており注目されるが、後世の改変であること論を俟たない。

### 【余説】

拙著A前編第七章で縷説したとおり、現行本文で「みいて」となっている箇所は「しいて」が原形だったと考えられる。「みいて」⇨「見出で」のままて読んだ場合、「あてなる男」は「いとよらなる緑衫の上の衣」を偶然見つけて

送ったことになるがおかしい。そうではなく、正月一日の朝賀に間に合わせるべく、華美な袍を急ぎ新調して届けたと、もとはそう書いてあったはずなのである。

## 第四十五段

### 【本文】

昔、男ありけり。人のむすめのかしづく、「いかでこの男にもいはむ」と思ひけり。うち出でむことかたくやありけむ、もの病みになりて、死ぬべき時に、「かくこそ思ひしか」といひけるを、親聞きつけて、泣く泣く告げたりければ、まどひ来たりけれど、死にければ、つれづれと籠りをりけり。

暮れがたき夏の日ぐらしながむればそのこととなくものぞかなしき

時は水無月のつごもり、いと暑きころほひに、宵は遊びをりて、夜ふけて、やや涼しき風吹きけり。螢高く飛びあがる。この男、見臥せりて、

行く螢雲の上まで去ぬべくは秋風吹くと雁に告げこせ

(三四オ・九行〜三五オ・五行)

### 【現代語訳】

昔、男がいた。(しかるべき家柄の)未婚の娘で(親が)大事に養育している娘が、「何とかしてこの男とつきあいたい」と思っていた。(しかし、その思いを)口に出すことがむずかしかつたのだろうか、(悶々としているうちに、

それが原因で) 体調が悪化して、死を免れなくなった時に(ようやく)、(実はずっと) こう思っていたのです」と打ち明けたのを、(男) 親が(乳母から) 聞きつけて、(その思いを) 泣きながら(男に) 知らせたところ、(男は) とるものもとりあえずやって来たのだけれど、(時すでに遅く、娘は) 死んでしまったので、(空しく家に戻るや、そのまま忌に) 籠っていたのだった。

なかなか暮れない夏の日の日中いっぱいぼんやりと外を眺めていると、これといった理由もなく漠然とした悲しみに包まれる。

季節は六月の下旬、たいそう暑い時分に、宵(のうち) は楽器を奏でていて、夜が更けて(から)、少し涼しい風が吹いた。(折しも、庭の水辺で一匹の) 螢が高く飛び上がる。この男は、(その様子を) 横になりながら見て、

(飛んで) 行く螢よ。おまえが(そのまま) 雲の上まで飛び去ることができるならば、(地上ではもう) 秋風が吹いていると、(待っている) 雁に知らせておくれ。

【注】

○籠りをりけり―死穢に触れた男は、自邸に戻って籠居したのである。○「暮れがたき」歌―この歌、底本以下現存諸本のほとんどにおいて「行く螢」歌のあとに並列して置かれており、古来その落ち着きの悪さ、必然性のなさが問題視されて来た。それもそのはずで、元来は右本文の位置にあったのである。

## 【余説】

詳細は、拙著B第I部第3章をご参照いただきたいが、「男」が二首続けて詠歌する本段現行本文の形態は決して本来的なものではなく、書写者某の不注意が原因で右に示した本文が機械的に変化したその最終形に過ぎない。しかるに、諸賢はなおも現在の本文に執着し、旧態依然たる、摩訶不思議な、不合理な読解姿勢を崩そうとはされないのだ。この頑なさにはもはや呆れるほかない。『伊勢物語』の本文が、単なる誤写の次元を越えて、かくもダイナミックに変化する場合もありえたことを、ここで改めて強調しておきたい。

## 第四十六段

### 【本文】

昔、男、いとうるはしき友ありけり。かた時さらずあひ思ひけるを、人の国へ行きけるを、いとあはれと思ひて別れにけり。月日経ておこせたる文に、「あさましく、対面せで月日の経にけること。『忘れやし給ひにけむ』と、いたく思ひわびてなむ侍る。

世の中の人の心は目離<sup>か</sup>るれば忘れぬべきものにこそあれ」

といへりければ、よみてやる、

目離るともおもほえなくに忘らるる時しなければ面影に立つ

(三五オ六行～三五ウ・六行)



【現代語訳】

昔、男が（いて）、無二の親友がいた。（二人は）一時も離れることなくお互いをいとしく思っていたのだが、（友人が）地方へ赴任したので、（男は）たいそう悲しいと思って別れてしまった。（それから）月日が経って（友人が）よこした手紙に、「（我ながら）呆れたことに、（あなたと）対面しないで（空しく）月日が経ったことです。『あなたは今も、私のことをすっかり）忘れてしまわれたらどうか』と、ひどくやりきれない思いでおります。

世間（一般）の人の心（というものは、会う機会がなくなると（その相手のことを）自然と忘れるに違いないものであります。

としたためてあつたので、詠んで送った歌、

（私には、ほかならぬあなたと）お会いする機会がなくなつたとも思われませんが。（あなたのことを）自然と忘れる時などまさかありませんので、（あなたの）お姿が（私の）眼前にずっと浮かんでおります。

【注】

○人の国へ行きけるを―地方官に任命されて赴任するのである。○月日経て―任地は遠国であるうえに、諸手続き等生活が落ち着くまでに日数を要したのである。○「世の中の」歌―この箇所は、底本「世中の人の心はめかるれはわすれぬへき物にこそあめれ」に作り、諸本も事情は同じなので、従来手紙文の結びと解されて来た。けれどもここは、「男」の「忘らるる」歌と対をなす友人の和歌とみなければならぬ。ゆえに今、下句相当部分につき、「わすれ」は「わすられ」からの、「あめれ」は「あれ」からの転化本文と判断して、これを復元した。「忘られ」の「れ」は自発の

用法。「世の中の人の心」というフレーズはそもそもトーンが高く、和歌に多用される表現である。参考「世の中の人の心は花染めのうつろひやすき色にぞありける」(『古今集』恋五・よみ人しらず)「色見えてうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける」(同・小野小町)「初雁の鳴きこそわたれ世の中の人の心の秋しうければ」(同・紀貫之)等々。

### 【余説】

「うるはしき友」の手紙の末尾部分がもと和歌であったことについては、早く賀茂真淵の『伊勢物語古意』がその旨を述べ、下つて、迫徹朗「歌のゆくえ―『伊勢物語』四十六段をめぐって―」(『尚絅大学研究紀要』第十七号、平六・二)が多角的に検証したところだが、今日なお「市民権」を得るに至っていない。これまた嘆かわしい事態といわざるをえない。「男」の「忘らるる」歌は親友が詠んだよこした贈歌に対する返歌にほかならず、問題の「贈歌」は、便りの終わりを「五・七・五・七・七」にうまく整形、いな、復元してやりさえすれば、立ちどころによみがえるのであって、本段の本文は、今後右に提示した形で読まれるべきなのである。

## 第五十段

### 【本文】

昔、男ありけり。うらむる人をうらみて、

鳥の子を十づつ十は重ぬとも思はぬ人を思ふものかは

といへりければ、

行く水に教書くよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり

また、男、

吹く風に去年の桜は散らずともあな頼みがた人の心は

また、女、返し、

朝露は消え残りてもありぬべしたれかこの世を頼みはつべき

また、男、

行く水と過ぐる齡よほと散る花といづれ待ててふことを聞くらむ

しのび歩きかたみにしける男女の、あだくらべしけることなるべし。

(三六ウ・六行〜三七ウ・一行)

【現代語訳】

昔、男がいた。恨み言をいう（女の）人を（、そっちこそと逆に）恨んで、

（たとえ）鳥の卵を十個ずつ十段重ね（え）たとしても、愛してくれない人を愛する道理がどこにありましようか（。あろうはずありません）。

といったところ、（女はこう返した。）

（流れ）行く（川の）水に数を書くよりもはかないとなみは、愛してくれない人を愛することだと思ひ知りました。

(そこで、) もう一度、男が、

(たとえ) 吹く風に去年の桜(の花)は散らないとしても、ああ(まったく)あてにしがたいことです。人間の心(、)そしてあなたの心)は。

(すると、)また、女が、(応じて)返歌、

朝露は(夕方まで)消え残ることもきつとあるでしょう。(それに引き換え、)いつたい誰がこの(はかない)人間の生を(、)そしてあなたとの仲を)最後まであてにすることができましようか。(とてもできません)。

(以上を受けて、)また、男が(詠んだ歌)、

(流れ)行く(川の)水と、過ぎ(去)る(人間の)年齢と、(吹く風に)散る(桜の)花と、(この三者のうち、)いつたい)どれが、「待ってくれ」ということばを聞き入れているだろうか。(どれもみな、聞いてくれはしないのだ)。

(これは、別の異性との)密会をお互いにし(てい)た男女が、どちらがよりあてにならないかを競った歌(のやりとり)なのだろう。

### 【注】

○「行く水に」歌―この歌、底本以下現存諸本においては「吹く風に」歌の返歌として四番目に配置されているが、錯誤とみて二番目に移した。男の一首目下句の表現「思はぬ人を思ふものかは」を受け、これを利用して「思はぬ人を思ふなりけり」と返したわけである。○「朝露に」歌―この歌、底本以下現存諸本においては「鳥の子を」歌の返歌

として二番目に配置されているが、錯誤とみて四番目に移した。男の二首目下句「あな頼みがた人の心は」を受けて「たれかこの世を頼みはつべき」と返したわけである。○「行く水と」歌―参考「散る花の待ててふことを聞かませば春降る雪と降らせざらまし」（寛平御時后宮歌合）。○しのび歩きかたみにしける―こつそりと別の異性のところへ出かける行為をそれぞれにしていた。「かたみに」は、男は男で女は女で各個にの意。なお、身分がそれほど高くなければ、当時女が男に会いに行くこともあった。○あだくらべしけること―はかないもの、あてにならないもの比べをした歌の贈答。「こと」は「言」で歌の意。この場合は所載の五首を指す。

【余説】

現存諸本において本段四首目までの歌順に混乱が生じていることは、早くに上田秋成の『よしやあしや』が指摘するところであり、そのとおりと思われるので今これを正した。ところが、本段本文が孕み持つ「混乱」はそれだけではなく、段末の一文にもまた認められたのである。すなわち、もとは右本文のごとくであったものが、いつしか「しのび歩き」と「あだくらべ」とが入れ替わってしまい、現在に至る奇形本文が誕生したものと考えられるのである。にもかかわらず諸賢は、相変わらずありのままの読解に甘んじておられるようだが、なぜそれが許されるのか、まったく理解に苦しむ。触らぬ神に祟りなしということなのであろうか、今後も、変わり果てて意味をなさなくなった現行本文が無難に読み継がれていくとすれば、それはゆゆしい事態だといべきだろう。なお、詳細については、拙著A前編第九章をご参照いただきたい。

## 第五十五段

### 【本文】

昔、男、思ひかけたる女の、え得まじうなりてのちに、

思はずはありもすらめどことの葉のをりふしごとに頼まるるかな

(三八オ・八行―一一行)

### 【現代語訳】

昔、男が、思いを寄せていた女が、わがものにできそうになくなったあとで、

(あなたは私のことを、もう)愛してなどいないでしょうが、(私の方は、かつてのあなたの)ことばが何かにつけてあてにされることです。

### 【注】

○なりてのちに―底本本文「なりての世に」。定家本系を中心とする諸本のほとんどがこれに同じだが、「世」||「よ(与)」は、「ち(知)」の誤写とみななければならない。参考「弥生のついたちより、しのびに人にものらいひてのちに、雨のそほ降りけるに、よみてつかはしける」(『古今集』恋三・在原業平／『伊勢物語』第二段)「女友たちと物語して、別れてのちに、つかはしける」(同雑下・陸奥)「女をうらみて、「さらにまうで来じ」とちかひてのちに、つかはしけ

る」(『拾遺集』 恋四・藤原実方)、「あひしりて侍りける人の、まうで来すなりてのち、心にもあらず声をのみ聞くばかりにて、また音もせず侍りければ、つかはしける」(『後撰集』 恋三・よみ人しらず)「かくて住まずなりてのち、中将のもとより、衣をなむしにおこせたりける」(『大和物語』 第六十段) 等々。なお、現存伝本中、広本系の大島本および一誠堂旧蔵伝為相本が「なりてのちに」、古本系第三類の宮内庁書陵部蔵伝肖柏筆本が「なりてのち」の本文を有している。

### 【余説】

本段本文中焦点となる「なりてのちに」の箇所は、従来現存形「なりての世に」のまま読まれているが、「世」の解釈が落ち着かず無理が生じている。すなわち、「世」||「よ(与)」は「ち(知)」の誤写と認めないかぎり、問題は永遠に解決しないのである。詳しくは拙著A前編第五章を参照されたい。

## 第五十八段

### 【本文】

昔、心つきて色好みなる男、長岡といふ所に家づくりてをりけり。そこのとたりけりける宮ばらに、こともなき女どもの、田舎なりければ、「田刈らむ」とて、この男のあるを見て、「いみじの好き者のしわざや」とて、集まりて入り来ければ、この男、逃げて奥にかくれにければ、女、

あれにけりあはれいく世の宿なれや住みけむ人のおとづれもせず

といひて、この屋見に集まり来ゐてありければ、この男、

葎生ひて荒れたる宿のうれたきはかりにも鬼のすだくなりけり

とてなむ出だしたりける。この女ども、「穂拾はむ」といひければ、

うちわびて落穂拾ふと聞かませばわれも田面に行かましものを

(三八ウ・九行〜三九ウ・六行)

### 【現代語訳】

昔、思慮分別があつて風流を好む男が、長岡という所に家を造作して滞在していた。(ある日) その近隣にあつた宮様方(のお住まい)に(仕える)、これといつて難のない女たちが、田舎だつたので、「稲を刈ろう」ということで(出かけたところ)、(偶然) この男がいるのを目撃して、「たいそうな風流人のお建てになつた御殿ですこと」といふて、集まつて(敷地内に)入つて来るので、この男は、(一目散に)逃げて建物の奥(の方)に隠れてしまつたので、(ある)女が、

(すつかり) 荒れ果ててしまつたことです。ああ、(いったい、建てられてから) どれほどの(時が経つた)宿なのでしようか。(かつてここに)住んでいたであらう人が(もう)姿を見せることもありません。—あなたは私たちから逃れ果てたまま、一向に顔を出そうとはなさらないのですね。

といふて、この家屋を(間近で)見物するために(皆で)集つて来て(、おしゃべりをしながら庭に)居座つていたので、この男は、



雑草が生い茂って荒廃した宿のいまましいところは、たとえ一時であつても、(このように)鬼が集まって(がやがやと)騒ぎ立てることだったのですね。―あなた方の無遠慮な来訪にはほとほと閉口しております。

と詠んで差し出したのだった。(すると、)この女たちが、「(一緒に)落穂を拾いましょう」といったので、(あなた方が、生活に)困窮して落穂拾いをするのだと予め聞いておりましたなら、私も(お手伝いに)田圃のほとりまで行きましようものを。―あいにくそうではないので、この度はお断りします。

【注】

○田刈らむ―主語は「女ども」。女たちが稲刈りをしようとして外出したのである。○いみじの好き者のしわざや―「男」の家の造作を女たちが冷かしたことば。○この屋見に―底本「この宮に」。通行の本文はこの形だが、「このやみに」↓「このみやに」↓「この宮に」の誤写とみて改訂した。「こともなき女ども」の闖入理由が、男が建てた瀟洒な建物を見るためであつたことが明確化する。ちなみに、広本系諸本および塗籠本はこの部分を欠いている。不審本文であるため削除したのであろう。

【余説】

本段は従来、「田刈らむ」の主語、「いみじの好き者のしわざや」の解釈などの問題が複合して、十全に読み解けない状態が続いていたが、右に提示したごとく不審本文「この宮に」を「この屋見に」に改訂することにより、一転すっきりとした読解が可能になるのである。にもかかわらず、諸賢なお現存本文を疑わず、母親が内親王でありその別邸

の敷地内に「男」の「家」があったために、それをも「宮」と称したのだと説明しているようだが、強弁もはなはだしい。詳しくは、拙著A前編第二章を「参照いただきたい」。

## 第六十七段

### 【本文】

昔、男、逍遙<sup>せうよう</sup>しに、思ふどちかいつらねて、和泉の国へ如月ばかりに行きけり。河内の国生駒の山を見れば、曇りみ晴れみ、立ちゐる雲やます。朝より曇りて、昼晴れたり。雪いと白う木の末に降りたり。それを見て、かの行く人の中に、ただ一人よみける、

昨日今日雲の立ち舞ひかくろふは花の林を惜しとなりけり。

(四八オ・一行く四八ウ・一行)

### 【現代語訳】

昔、男が、(息抜きの)行楽をしに、気の合う者同士連れ立って、和泉の国へ二月頃に行ったのだった。(その道中で)河内の国の生駒の山を見ると、曇ったり晴れたり、(山に)湧き出て漂う雲(の動きが)が(一向に)収まらない。(次の日は)朝方から曇って、昼になって晴れた。(すると、生駒山の頂には、まだ)雪がたいそう白く木々の梢に降っていたのだった。その(美しい)光景を見て、先の一行の中で、ただ一人(男)だけが詠んだ(歌)、  
昨日今日と雲が(せわしなく)浮動しはずと(生駒の山が)隠れていたのは、(山頂の雪が)花の(ように見

える) 林(が、日に照らされて消えてしまうの)を惜しいと思つてのことだったのだ。

【注】

○「昨日今日」歌―第五句の本文は底本以下ほとんどの伝本で「うしとなりけり」なのだが、それでは、美しい「花の林」のいつたどこが「憂し」と感じられたのか不可解というほかなくなる。第三句と第四句の間に「人に見せるのが」「人に見られるのが」等の意を補つて解くのが通説だが、これは論外。ゆえに、踊り字「ゝ」または「を(乎)」が「う(宇)」に誤写されたものとみて本文を改めた。この一首は、せっかくの「花の林」が仲春の陽光に直射され消えてしまうのを、雲が「惜し」と思つて隠しつづけた、という見立ての歌なのである。

【余説】

本段の「男」の歌は、結句が現行本文のままでは解釈不能というほかなく、「うし」を「をし」に改めることではじめて歌意が通じようになる。そのうえで、雲が何を「惜し」と思ったかをめぐつては、右に示した解釈案のほかにも別解の成立する余地があるだろう。詳細については、拙著A前編第一章をご参照いただきたい。

## 第七十七段

### 【本文】

昔、田邑<sup>たむら</sup>の帝と申す帝おはしましけり。その時の女御、多可<sup>たか</sup>幾子<sup>きこ</sup>と申す、みまそかりけり。それ失せ給ひて、安祥寺にて御わざしけり。人々捧げ物奉りけり。奉り集めたるもの、千捧げばかりあり。そこばくの捧げ物を木の枝につけて、堂の前に立てたれば、山ことさらに堂の前に動き出でたるやうになむ見えける。それを、右大将にいまそかりける藤原の常行と申すいまそかりて、講の終わるほどに、歌よむ人々を召し集めて、今日の御わざを題にて、春の心ばへある歌奉らせ給ふ。右の馬の頭なりける翁、目はたがひながらよみける、

山のみなうつりて今日にあふことは春の別れをとふとなるべし

とよみたりけるを、今見れば、よくもあらざりけり。そのかみは、これやまさりけむ、あはれがりけり。

(五四オ・九行〜五五ウ・二行)

### 【現代語訳】

昔、田邑の帝と申し上げる帝がおいでになった。その時の女御で、多可幾子と申し上げる方がいらっしゃった。その方がお亡くなりになって、安祥寺で法要を行った。(参列した)人々が捧げ物をお供えした。集まった捧げ物(の数)は、(何と)千捧げほどもあった。たくさん捧げ物を木の枝に(括り)つけて、お堂の前に立てたので、(そ

の様は、まるで本物の「山がわざわざお堂の前に動き出た（かの）ように見えたのだった。それを、右大将でいらつしゃった藤原の常行と申し上げる方がおいでになって、（経典の）講義が終わる時分に、（参列者の中で）歌に堪能な人々を招集なさって、今日のご法要を題にして、（なおかつ）春の趣がある歌を差し上げさせなさる。お堂の前の捧げ物の「山」を、右の馬の頭であった老人が、（本物の山と）見間違え（、さらに、周囲の山々とも遠近の区別がつかなくなつ）たままで詠んだ歌、

山が皆（お堂の前に）移動して（来て、）今日（の法要）に出会うのは、（亡き女御様との）春の（時節のお）別れを弔うということなのだろう。

と詠んだのを、今見ると、（たいして）よくもないのだった。（しかし、）当時はこの歌が（、他の歌よりも）優っていたのだろうか、（その場にいた皆が、しきりに）感動したのだった。

【注】

○山ことさらに―山がわざわざ。山が特別に。底本以下ほとんどの諸本で「山も、さらに」に作るが、「も（毛）」は「こと（己止）」の誤りとみて本文を改めた。○それを―捧げ物の「山」を指し示すこのことは、意味上、あとの「右の馬の頭なりける翁、目はたがひながらよみける」に係る。その間に「右大将にいまそかりける藤原の常行」から「春の心ばへある歌奉らせ給ふ」までが挿入された格好になっているため、便宜上位置をずらして訳した。○目はたがひながら―捧げ物の「山」を本物と見間違えたのみならず、周囲の山々との遠近感も失くしたままでの意に解いた。○今見れば―「右の馬の頭なりける翁」が過去を回想してこの話を語っているという設定。

【余説】

詳細は、拙著A前編第三章をご参照いただきたいが、「山ごとさらに」の箇所、現本文「山もさらに」に従ったのは、係助詞「も」と副詞「さらに」の意味が二つながら説明不能となるはずである。しかるに、諸賢なお従前どおりの姿勢を崩しておられないのは、必ずや確固たる理由、確信があるのだろう。ならば是非、それをお聞かせ願いたいものである。

第七十九段

【本文】

昔、氏の中に親王みこ生まれ給へりけり。御産屋に、人々歌よみけり。御祖父方おほぢなりける翁のよめる、

わが門に千尋ある竹を植ゑつれば夏冬たれか隠れざるべき

これは、貞数さだかずの親王。時の人、中將の子となむいひける。兄の中納言行平の娘の腹なり。

(五七ウ・七行〜五八オ・五行)

【現代語訳】

昔、在原氏の中に親王がお誕生になった。(その)産養い(の祝宴の折)に、(一族の)人々が(お祝いの)歌を詠んだ。(そのうち、親王の)お爺様方(の縁者)だった老人が詠んだ(歌)、

わが家の入口に千尋もの（蔭ができる）竹を植えたので、（暑い）夏でも（寒い）冬でも、いったい誰が（その大きな蔭の下に）隠れ（て凌げ）ないことがありますようか。―わが一門もこれで安泰というものです。

【注】

○千尋ある竹を植ゑつれば「竹」とした部分、底本以下定家本系諸本では「かけ」に作る。けれども、「蔭を植う」は不自然な表現というほかない。真名本等の「竹」を原形とみたゆえんである。「た（多）」「か（可）」の誤写が想定されよう。

【余説】

通行の定家本系本文に従うと、本段の「翁」の歌は「千尋ある蔭を植ゑた」と詠んだことになる。しかし、拙著Aの「はじめに」でも触れたとおり、当時の和歌において、「蔭を植う」という突飛な表現がなされたとは考えにくい。「植ゑ」たのはあくまで「千尋ある竹」であって、「蔭」そのものではないのである。が、それでも「蔭」の本文にこだわるならば、今後はこの奇抜な語法が成り立つ可能性について、証拠に基づいた十分な説明がなされねばなるまい。

## 第九十四段

### 【本文】

昔、男ありけり。いかがありけむ、その男住ますなりにけり。のちに男ありけれど、子ある仲なりければ、細かにごそあらねど、時々ものいひおこせけり。女方に、絵描<sup>か</sup>く人なりければ、描きにやれりけるを、今の男のものすとて、一日二日おこせざりけり。かの男、「いとつらく、おのが聞ゆることをば、今まで給はねば、ことわりと思へど、なほ人をばうらみつべきものになむありける」とて、ろうじてよみてやれりける、時は秋になむありける。

秋の夜は春日<sup>はるひ</sup>忘るるものなれや霞に霧や千重まざるらむ  
となむよめりける。女、返し、

千々の秋一つの春にむかはめや紅葉も花もともにこそ散れ

(七九オ・六行〜七九ウ・一行)

### 【現代語訳】

昔、男がいた。どんな事情があつたのだろうか、その男が（女との）夫婦関係を解消してしまった。（女には）その後（別の）男がいたけれど、（何せ）子供のある間柄だったので、親密でこそないものの、（女はもとの男に）時々手紙をよこしたのだった。（ある時、男が）女の所に、（この女は）絵を（上手に）描く人だったので、描くよう頼んだところ、（あいにく）現在の男が来ているということで、一兩日（絵を描いて）よこさなかった。（そこで）あ



の（もとの）男は、「たいそうつらいことに、私が（お願い）申し上げたことを、（今の）今までしていただけないので、当然とは思いますがもの、（私の心境は穏やかではなく、）やはりあなたにうらみごとをいわずにはおられないものなのでした」と書いて、からかって（次のような歌を）詠んでやった、その時節は（あたかも）秋なのであった。秋の夜には、春の日を忘れるものなのですね。霞よりも霧（の方が）が千倍も勝っているでしょう。——今のご主人を前にして、私のことなどすっかりお忘れというわけですね。

と詠んだのだった。（すると、）女が、返し（た歌）、

千の秋が（束になっても、たった）一つの春に敵いましょうか、敵うはずがありません。なぜって、（秋は）紅葉も花もいっぺんに散ってしまう（凋落の季節な）のですから。——今の夫千人がかりでも、あなた一人にはとうてい勝てっこありません。

【注】

○紅葉も花もともにこそ散れ——ともに」は、いっぺんに、同時にの意。参考「君恋ふる涙は秋にかよへばや袖も袂もともに時雨るる」（陽明文庫本『貫之集』）「色も香もともにほへる梅の花散るうたがひのあるやなになり」（宮内庁書陵部蔵歌仙歌集本『兼輔集』）等。よって、「花」を春の桜のこととし、この語をどちらも、双方の意に解する通説は誤り。この下句は、秋は紅葉と花が一斉に散ってしまう凋落の季節であることを述べたもので、「春」に喩えられたもとの「男」と比較すると、今の夫の魅力が一気に色褪せてしまうことを寓しているのだ。

### 【余説】

本段の問題は、女の返歌の解釈にある。従来、そして今日なお、その下句は、秋の紅葉も春の花もどちらも散るの意に読み解かれているが、これが大きな、そして初歩的な間違いなのだ。そもそも、男なんてみんな浮気者、土台あてになんかならないわ、などという冷めた歌を、「女」がここで詠む道理がどこにあったというのだろうか。あなたは今の男に夢中で私のことなどすっかりお忘れなのだろう、とからかってきた「男」の歌に対する「返し」なのだから、当然、いいえあなたの方が今の男より千倍すてきよ、と応じるはずだろう。また、上句ⅡA、下句ⅡBの論理関係も、「AけれどもB」でも、「BけれどもA」でもなく、「AなぜならばB」と捉えるのが正解だったのである。以上の詳細については、拙著A後編第六章をご参照願いたい。

## 第百八段

### 【本文】

昔、女、人の心をうらみて、

風吹けばとはに波越す岩なれやわが衣手の乾く時なき

と常のごとぐさにいひけるを、聞き負ひける男、

宵ごとにかはづのあまた鳴く田には水こそまされ雨は降らねど

(七九オ・六行〜七九ウ・一行)

【現代語訳】

昔、女が、(恋) 人の (薄情な) 心を恨んで、

風が吹くと決まって波が越える (海辺の) 岩なのでしようか、私の衣の袖は (あの人のつれなさゆえにいつも涙に濡れて、) 乾く時がありません。

といつもの口癖でいったのを、聞いて自分のことだと思った男が、

宵ごとに蛙がたくさん鳴く田圃では、(彼らの流す涙で) おのずと水嵩が増さるのですね、雨は降りませんのに。— あなたのつれなさゆえに、毎晩大勢の男たちが泣かされているのですよ。

【注】

○かはづのあまた— 蛙がたくさん。「あまた」は数が多いこと。参考「時鳥汝が鳴く里のあまたあればなほうとまれぬ思ふものから」(『伊勢物語』第四十三段)「名のみ立つ死出の田長は今朝ぞ鳴く庵あまたとうとまれぬれば」(同)「大幣の引く手あまたになりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ」(同第四十七段)「玉葛はふ木あまたになりぬれば絶えぬ心のうれしげもなし」(同第一百十八段) 等々。また、「かはづ」は「女」の薄情に泣かされている男の比喩。

【余説】

第二十七段同様、『伊勢物語』中の「かはづ」は、「女」の薄情けに泣かされている男たちの比喩として機能している。本段の場合、「あまた」の一語によってそのことがよりはっきりするはずなのだが、この唯一無二の正解が巷で通

説化するの、いったいいつになるのだろうか。もどかしさは募るばかりだ。詳しくは、拙著A後編第三章をご覧ください。  
ただきたい。



## 執筆者紹介

清水 誠 (言語科学)  
近藤 智彦 (哲学倫理学)  
川島 彬 (日本学術振興会特別研究員)  
高橋 勇真 (文学院修士課程)  
野村 拓矢 (文学院修士課程修了)  
宮嶋 俊一 (宗教学インド哲学)  
後藤 康文 (日本古典文化論)

北海道大学  
文学研究院紀要  
第一七二号

令和6年3月22日 発行

編集者

北海道大学文学研究院長

藤田 健

発行者

北海道大学

(株) アイワード

**Bulletin of the Faculty of  
Humanities and Human Sciences,  
Hokkaido University**

---

CONTENTS

German as a Germanic Language (13)		
— Sentence Structure (with Corrigenda 2)—		(Left)
..... Makoto SHIMIZU		1
Proclus: <i>Commentary on Plato's Republic</i> , Essay 1, Translated into Japanese with Notes		
..... Tomohiko KONDO, Akira KAWASHIMA,	(Left)	
Yuma TAKAHASHI, Takuya NOMURA		63
The High Church Movement in Germany and Heiler's "History of Religions"		
..... Shunichi MIYAJIMA	(Left)	93
A Commentary on <i>Ise Monogatari</i>		
..... Yasufumi GOTO	(Right)	1